

神の母聖マリア (ルカ 2:16-21)

マリアはわたしたちに救い主を指し示す

みなさん、新年明けましておめでとうございます。日本の教会にとって、1月1日はほかの国とは違った重みがあります。この大切な日に、教会は神の母聖マリアをお祝いいたします。日本人にとっての1年の始まりを、聖マリアを祝うことで迎えることに、意味を見つけないかと思ひます。

「一年の計は元旦にあり」と言われます。そこでお勧めしたいことが、「カトリック信者として、この一年をどのように過ごすか考える」ということです。わたしは、神の母聖マリアに、この一年をどのように歩むか、模範を仰いだらよいと思ひます。

今日の朗読箇所から、模範を見つけないかですが、2つ、示したいと思ひます。1つは、間違いなくここです。「マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた。」(2・19) マリアは出来事をよく観察し、その意味を慎重に思い巡らす人でした。慌てて判断を誤るというのでもなく、判断を遅らせて大事に至るのでもなく、慎重に判断することのできる人でした。

わたしたちはなかなか、慎重に物事を見極めて判断することができません。感情的にすぐに反応してしまったり、後回しにして損失を被ったりします。さらに、そういう目に遭っても、なかなか反省が身につきません。

そこで、慎重な判断が求められるときに、気持ちの上で次のように考えたらどうでしょうか。「今、大事な判断が求められている。マリアさまと一緒に考えることにしよう。」こういう思いで、出来事を思い巡らすならば、どんなに落ち着かない人でも、慌てる人でも、慎重な判断が身に付いていくのではないのでしょうか。

「この出来事をどう受け止めたらよいのか。マリアさまと一緒に考えてみよう。」このちょっとした取り組みで、わたしの判断は格段に慎重なものになるのではないのでしょうか。即断即決する人でも、そこに至る前の段階で、慎重に考える時間があるはずです。マリアさまと一緒に考えをまとめることをお勧めします。

もう1つ、マリアから仰ぎたい模範を見つけましょう。これは、わたしが今日の福音朗読を読みながら考えたことです。羊飼いたちが、幼子を訪ね当てた場面に表れています。「そして急いで行って、マリアとヨセフ、また飼う葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。」(2・16)

羊飼いたちは、飼う葉桶に寝かせてある乳飲み子だけを見つけたのではありません。「マリアとヨセフ、また乳飲み子を」と書いてあります。当たり前のことですが、天使が「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。」(2・11)と言った時、羊飼いはその救い主のことを、幼子に直接尋ねるわけにはいかないのです。当然、マリア、またはヨセフに尋ねたはずです。わたしは、この名前

の書き方、母の名前を先に出し、そのあとにヨセフの名前を出しているのは、やはり先に、母マリアを羊飼いたちは見つけたのではないかと思うのです。

そして母となったマリアに、「お生まれになった救い主はどちらにおられますか」と、尋ねたのだと思います。母マリアは、ヨセフと一緒にいて、生まれたばかりの乳飲み子を指し示したのではないのでしょうか。

今、さらっと言いましたが、マリアが、救い主を指し示すということには意味があるわけです。マリアは、神の子ではありませんが、真っ先に、神の子救い主はこちらですと、指し示すことのできる方なのではないのでしょうか。

つまりマリアは、わたしたちが道に迷ったり、救い主に心が向かっている感じがなくて力を落とすときに、「あなたを救う方はこの方です。あなたはこの方に、何かを願うべきです」と、はっきり指し示してくれる方だということです。

わたしたちが、日々、イエスに向かって歩みを進めなければならないことは百も承知です。ただ、それを自分の力だけでできるかということ、そんなに強いわけではありません。そんなときに、「あなたは、この道で、この方法で、イエスにまっすぐに向かうべきです。」そんな導きをすべての人にくださるのが、マリアさまなのではないのでしょうか。そう考えて1年を見渡すと、5月と10月に、わたしたちはマリアにロザリオの祈りをささげる月が回って来ることに思い当たるでしょう。あるいは、8月15日には聖母被昇天の祭日が回ってきます。そう考えると、1年の節目節目に、わたしたちは聖母マリアに支えをいただいて1年を過ごしているのではないのでしょうか。

神の母聖マリアは、神の子を宿し、人類の救いに協力したほめたたえられるべき方です。この方は、神の母でありながら、わたしたちから遠い存在ではありません。むしろ、身分も何もない羊飼いに救い主を指し示したことでもわかるように、わたしたちにより近いお方なのです。

この一年を、実り豊かなものにしましょう。そのために、常に救い主を指し示してくださる神の母聖マリアに、取り次ぎを願いましょう。道を間違えそうになる時、道を見失いそうになる時、神の母聖マリアが、「救い主に向かう道はこちらです」と指し示してください。今日のミサで、マリアの取り次ぎを信頼していると、マリアに呼びかけることにいたしましょう。

主の公現 (マタイ 2:1-12)

「別の道を歩む」という証

主の公現の祭日を迎えました。占星術の学者たちが、幼子を訪ね当て、ひれ伏して拝み、黄金・乳香・没薬を贈り物としてささげます。今になって振り返るのですが、わたしが赴任してきた小教区では、ご誕生の 12 月 24 日から三人の博士を馬小屋から離れた場所にまず置いて、それを毎日少しずつ近づけていました。三人の博士が、星を頼りに旅をしているというわけです。

こちらの小教区でも、よかったら来年は三人の博士をそのような形で活用したらいかがでしょうか。御公現に三人の博士を登場させて、次の週には片付けてしまうのでは、何とももったいないではありませんか。ご降誕の時から三人の博士を置いて、それを少しずつ近づけていけば、とても楽しい降誕節を過ごすことができると思います。

始めてこの試みをした太田尾教会では、三人の博士を取り出して遠くに置いたとき、ある人が、御像がこんなに遠い場所に間違っているのではないかと思い込み、自分で馬小屋に持って行き、さらにわたしに「神父さま、三人の博士の御像が変な場所に置いてあったので、馬小屋に戻しておきました」と報告に来ました。わたしから怒られたことは皆さんご想像の通りです。

それから、わたしの勉強不足で、2つの言葉を混同して使っていたのかも知れません。2つの言葉とは、「乳飲み子」と「幼子」です。一般的な意味で、「乳飲み子」は「生後1年ころまでの小児。乳で育てられ、歩きだすまでの時期の子供」であり、「幼子」は「幼い子供。ふつう、満一歳から小学校入学ぐらいまでの子供」ということのようにです。

この使い方が当時のイエスさまの時代にも当てはまるとしたら、厳密に区別して使う必要があります。それと同時に、聖書の中に「乳飲み子」と「幼子」が区別して書かれていると考えれば、羊飼いが探し当てた時と、占星術の学者たちが拝んだ時とは、ずいぶんイエスさまの面影というか雰囲気が変わっていたかもしれないと思ったのです。

参考までに、馬小屋のそばに、とある教会に置かれている御像のミニチュアを置いてみました。このイエスさまが、「幼子」と呼ぶぐらいの年齢かもしれません。この御像、1体 8400 円ですが、もし欲しい人がいたら注文をお受けします。

この御像の特徴は、幼子のイエスさまが船の錨に手をかけていることです。おそらく、航海の安全を願って作られた、特別な御像だと思います。いいなあと感じた方、個人でも会社でも、要望があればお知らせください。

さて本題に入りたいと思います。占星術の学者たち、彼らは次のような行動を取りました。まず、(1) 輝く星に気づいてユダヤの国に入り、(2) ヘロデ王に挨拶し、幼子のことを尋ね、(3) もう一度星に導かれて、幼子をひれ伏して礼拝し、贈り物をささげました。

ついで、(4) ヘロデ王に挨拶して自分たちの国に帰ろうとしましたが、

(5) 「『ヘロデのところへ帰るな』と夢でお告げがあったので、別の道を通して自分たちの国へ帰って行った。」とあります(2・12)。わたしが今回注目したのは、「別の道を通して自分たちの国へ帰って行った」この部分です。

もちろん、ここで言われているのは、ただ単にヘロデに挨拶しないで自分の国に帰ることを言っているわけですが、もう少し掘り下げて考えることができるかもしれません。占星術の学者にとって、ヘロデのところに立ち寄ってから自分たちの国へ帰るのは、当たり前のことだったのでしょう。しかし、夢のお告げで危険を察知したとき、彼らは当たり前と考えていた手順を放棄したのです。

わたしはこの様子を、次のように考えました。占星術の学者たちは、別の道を知った、ということです。ヘロデとは違う新しい王、平和をもたらし、人々の心を光で照らし、救う方が生まれ、学者たちはその幼子の前にひれ伏して拝みました。すると、彼らは通常の道ではなく、別の道を通して帰るべきだと感じたのです。

どんなに評判の悪いヘロデ王でも、帰りに立ち寄っていくのが通常の道でしたが、まことの王に出会ったからには、もはや通常の道よりも、別の道を通して国に帰ることが、彼らにとって価値のある選択だと感じたということです。

実はここに、わたしたちへの呼びかけがあると思います。わたしたちも、この人生、別の道を通して、永遠のふるさと、神の国を目指さなければなりません。この世の生き方に、もし通常の生き方というものがあるとしましょう。その生き方が、救い主を信じることなく、救い主への信仰を土台において生きるものでないとするれば、わたしたちはその道を選ばず、別の道を選ぶ必要があります。

別の道と言いましたが、わたしはその道は、1つだと思っています。すなわち、神が、わたしたちに与えてくださった御子、救い主イエス・キリストを信じ、イエスへの信仰を土台において生きる道です。

もちろん、わたしはカトリックの司祭としてこう言っているわけですが、別の言い方をすると、過ぎ去っていくこの世を信じ、この世を土台において生きる道ではなく、別の道を通していかなければ、人生の最終目的地にはたどり着けない、ということです。

では実際には、わたしたちはどのような生き方を選んでいるのでしょうか。わたしの人生は、過ぎ去っていく「この世」が、土台になってはいないのでしょうか。土台はとても大切で、大雨が降ってもびくともしない土台に、わたしたちは家を立てる必要があります。それは、わたしたちを救ってくれるお方を土台としたときに初めて可能となります。

救い主への信仰を土台とした人生の道は、「この世」の人々からすると別の道に見えるかもしれません。けれどもこの道は、占星術の学者たちを最終的に救った道でした。わたしたちも、最後に救ってくれる道を選ぶ勇気を持ちましょう。

たとえ、理解されないことがあっても、神が示すこの「別の道」を一心に歩むなら、やがて人々にもこの道の価値が分かり、「あなたの歩むその道を、わたしにも教えてほしい」と願う日が来るでしょう。わたしたちは言葉はつたなくても、歩む道で、占星術の学者と同じ証を人々の前

に示すことができます。

主の洗礼(マタイ 3:13-17)

主の洗礼 (マタイ 3:13-17)

イエスの洗礼は共に歩むための模範

昔話になりますが、中学3年生の時、中学生なりに命がけで先輩にゆるしを乞うたことがあります。中学3年生の時とはもちろん神学校時代のことですが、当時は神学校もかなり上下関係が厳しくて、先輩の言うことは絶対でした。

食事を例に紹介しましょう。6人がけのテーブルに、縦割りの班分けをして席が決められていまして、高校3年生から中学1年生までだいたい均等にそれぞれのテーブルに座ります。その中で高校3年生の命令は絶対でして、「おい、ご飯つげ」と言われれば、中学1年生が「はい」と言ってつぐことになっていました。

部活動で夕食に遅れようものなら、高校3年生に遅れた理由を直立不動で話し、先輩がゆるしてくれるまで食事の席に着くことはできませんでした。当時はそれが通っていたわけで、わたしたちも「遅れて来た方が悪い」と思っていたわけです。

そんなある日の夕食、この日はわかめのスープが食事に付いていました。食事が始まると、中学1年の子がわかめスープを飲もうとしません。あー、嫌いなんだなとすぐにわかったのですが、高校3年生の先輩はそれをゆるしてくれませんでした。

「おい、何でわかめのスープに口をつけないんだ」切れ目の、ヤンキーの髪形をした高校3年生でした。ちょうどこの前任者のような顔立ちでしたね。中学1年生は縮みあがり、しまいにはしくしく泣き出して、わたしたちも「参ったなあ」と成り行きを見ていました。

「お前がスープを飲んでしまうまで、晩飯は終わらないからな。」夕食の後、小一時間自由時間があって、制服を着たままサッカーをしたり卓球をしたり、ギターを弾いたりして楽しむのですが、先輩がゆるさなければ食事は終われません。こいつはどうしても食べてくれそうにないし、どうしたらいいかなあ、と考えました。

そこでわたしはある行動に出ました。わかめのスープが全部なくなれば、先輩も無茶は言わないだろう。そう思ったわたしは黙々と、わかめスープをお代わりし始めました。とにかくたいらげなければと、飲み続けたのです。

テーブルにはほかにも先輩後輩いたのですが、わたしの行動を理解して、協力してくれる人は誰もいませんでした。みんな蛇に睨まれたように、身動きできなかったのです。5杯、10杯、最終的には13杯お代わりしたでしょうか、最上級生がこう言いました。「中田。わいはよっぽどわかめがすきなあ。」てっきりわかってくれたと思ったのですが、わたしの命がけの行動は、最後まで伝わりませんでした。

最終的に、高校3年生が中学1年生に食べさせることを諦めたので、その日は食堂を出ることができました。あのときわたしは命がけでした。この後輩は、食べることができないから、自分が身代わりになるのでゆるしてほしい。わたしたちが協力して謝るから、ゆるしてほしい。あの

とき後輩を、他人とは思えなかったのです。

さて、今日の典礼はイエスの洗礼を祝っています。イエスが洗礼を受けようとするとき、洗礼者ヨハネはそれを思いとどませようとししました。けれどもイエスの思いはヨハネの考えを上回るものでした。「今は、止めないでほしい。正しいことをすべて行うのは、我々にふさわしいことです。」(3・15) ここでイエスは、「正しいことをすべて行うのは、わたしにふさわしいことです」とは言いませんでした。「我々にふさわしいことです」と言ったのです。

イエスが、「我々にふさわしい」と言ったのは、どういう意味だったのでしょうか。イエスと、洗礼者ヨハネ2人だけのことを言ったのでしょうか。その可能性もありますが、もっと広く考えると、「神の前にいるわたしたちすべて」ということではないでしょうか。

つまりイエスは、「正しいことをすべて行うのは、神の前にいるわたしたちすべてにふさわしいことです」と言葉に出して、わたしたちすべてが歩むべき道を示されたのです。イエスは、洗礼を受ける必要はありませんでしたが、「我々にふさわしいこと」をすべて実践するために、進んで洗礼を受けてくださったのです。

そうすると、イエスがこれから歩もうとしておられる1つ1つのことが、もっと身近になってきます。イエスは、「我々にふさわしい道」を、歩んでいくのです。だれも歩むことのできない道ではなく、わたしたちが歩んでいけるように、わたしたちと共に歩んでくださいます。

イエスの洗礼の場面で見えてくることは、わたしたちにふさわしい生き方を、先に歩んでくださる姿です。洗礼は、罪を悔いあらためて神に立ち返るためのものでした。人間は、一人では罪をすべて悔い改めることができません。そこで神の独り子が人となって、一緒に洗礼を受けてくださいました。

社会の中で弱い立場にある人、女性や子供たち、配偶者を失った人、重い病気の人、罪人と名指しされた人々。彼らは自分たちだけでは神に立ち直すことはできませんでした。そこでイエスが一緒にその重荷を担ってくださって、歩みを共にしていただきました。

ある時は、担いきれない病気や悲しみを、奇跡を起こして救い、決して見捨てないことを態度で表しました。もちろんすべてをわたしたちがまねできるわけではありませんが、一人で担いきれない重荷を抱えてしまっている人を、わたしたちも見捨ててはいけない、一人きりにしてはいけないということです。

今年、小教区で独自の聖書を読むチャンスを作りたいと思っています。わたしは、やはり聖書は読み通す、通読しなければ、なかなか聖書に親しくなるのは難しいと思っています。2ページとか3ページ読んで、次の人にバトンタッチする、そういう読み方もあるでしょうが、新約聖書なら新約聖書を1冊確実に読んでみる、こちらの方をお勧めしたいと思います。そのための手段を、考えてみたいと思います。

この聖書を読み通すという取り組みも、なかなか一人では達成できないわけです。聖書をしばしば開く司祭でも、ずっと読み通すのはなかなか難しい。そこで、考えている取り組みは、みんなで集まって、聖書を読み通すことを目指します。

だれかがくじけそうになる時、一緒に歩いてくれる人が必要です。聖書を読み通すためにも、一緒に歩いてくれる人がいれば、気持ちの弱い人でも続けることができると思います。イエスがわたしたちと共に歩む姿が、ここでも響いています。

共に担ってくださるために、イエスは洗礼をお受けになりました。この時、天からの声が聞こえました。「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」(3・17)。一緒に歩もうとするイエスの姿は、父である神の御心に適う姿でした。

わたしたちがだれかと一緒に歩もうと努力するなら、わたしたちも父である神の御心に適う者と呼んでもらえるでしょう。一緒に歩いてあげようと思う人が、おそらくだれにでもいるでしょう。ぜひその人を思い浮かべて、共に歩む姿を先に示してくださるイエスについて行く。その気持ちをミサの中でおささげいたしましょう。

年間第2主日(ヨハネ 1:29-34)

年間第 2 主日 (ヨハネ 1:29-34)

この方こそ神の子であると証しする

ビッグニュースが入りました。教皇ヨハネ・パウロ二世が列福されることになりました。教皇ベネディクト十六世は、1月14日(金)、教皇庁列聖省長官のアンジェロ・アマート枢機卿との謁見の中で、尊者・神のしもべヨハネ・パウロ二世(カロール・ヴォイティワ 1920年5月18日－2005年4月2日)の執り成しによる奇跡を認める教令を認可しました。

同日、教皇庁広報部のフェデリコ・ロンバルディ報道官は、尊者・神のしもべヨハネ・パウロ二世(カロール・ヴォイティワ)の列福式が復活節第二主日(神のいつくしみの主日)の2011年5月1日(日)に教皇ベネディクト十六世の司式で行われることを発表しました。この日認可された教令では、ヨハネ・パウロ二世を含めて、3名の福者、5名の殉教者、5名の尊者を宣言することが認められました。

ヨハネ・パウロ二世の列聖調査は教皇ベネディクト十六世によって2005年5月13日に開始が発表され、同年6月28日から正式に開始しました。2009年12月19日、ベネディクト十六世はヨハネ・パウロ二世を尊者とすることを宣言しました。

教皇庁列聖省が聖人の列に加えられることを最終的な目的として、その調査を宣言すると、その人は「神のしもべ」と呼ばれ、次の段階でその人物の生涯が英雄的、福音的な生き方であったことが公認されることにより「尊者」と宣言されます。さらに「尊者」は、その執り成しによる最低一つの奇跡が認められることにより、「福者」と宣言されます。

この日の列聖省の発表によると、ヨハネ・パウロ二世の列福手続きの際、審査された奇跡は、カトリックの母なる小さき姉妹会(Institut des Petites Soeurs des Maternités Catholiques)のマリー・シモン・ピエール・ノルマン修道女(Marie Simon Pierre Normand)のパーキンソン病の治癒です。(以上、カトリック中央協議会のホームページからの引用)

1月10日、成人の日に、長崎市小江原にあるお告げのマリア修道会本部で、誓願式が行われまして、わたしもミサに参加して誓願を立てる人と一緒にミサの中でお祈りしてきました。

わたしは常々思うのですが、身分はどうであれ、司祭よりも修道者の方が数段偉い人たちだと考えています。長崎教区を例にしますと、司祭に叙階された人は、だいたい数年のうちには主任司祭になりまして、どこかの教会に赴任してその小教区のすべてに責任を持つ人になります。

「主任神父さま」と言われるようにもなります。しかも30歳になる頃にはそう呼ばれるのです。

ところで、修道者の方々は、終生誓願という一生涯にわたる誓いを20歳代後半か、30歳代で立てるのですが、だからと言って30歳代で小教区の代表者になれるわけでもありませんし、「シスターさま」と呼ばれ

ることもありません。修道院では院長になることは、責任をまかせられた身分ですが、シスターたちがすべて院長になるかということはありません。

司祭は、ミサをささげる権限と、ゆるしの秘跡をおこなう権限が与えられます。修道者はこれといった権限が与えられていません。修道者が司祭の働きを支えるために働いてくださることはあっても、修道者の働きを支えるために司祭が働くなどということは聞いたことがありません。修道者の多くは、縁の下で力持ちで、本当に、神さまだけが知っている働きに自分をささげる人々です。

ほかにも見える違いがあります。誓願を立てる人は、清貧・貞潔・従順の3つの誓願を立てます。司祭は、教区司教に「貞潔と従順」を約束します。3つの誓願までは求められていません。今並べただけでも、「必ずしも表に立つ人になるわけではない」「ミサをささげることも、ゆるしの秘跡をおこなうこともない」それでも「3つの誓願を立てて一生をささげる」これが修道者の姿ですから、わたしは司祭よりも数段偉いのではないかなあと思っているのです。

さて、福音朗読に選ばれたのは洗礼者ヨハネの証しについて書かれた箇所です。彼が3つの誓願を立てていたかはわかりませんが、彼の暮らしぶりは「清貧・貞潔・従順」の3つの誓願を立てている修道者の生活を思わせるものです。

さらに言うと、洗礼者ヨハネは本来は表に立つ役割ではなくて、自分の後に来られる方に人々の心を準備させ、道を譲るために働いていました。表に立たないで、すべてを神にささげた洗礼者ヨハネの生き方も、修道者の生き方に通じると思います。

この洗礼者ヨハネは、自分が見たことを証言し、その方について大いに言い広めます。「わたしは、“霊”が鳩のように天から降って、この方の上にとどまるのを見た。わたしはこの方を知らなかった。しかし、水で洗礼を授けるためにわたしをお遣わしになった方が、『“霊”が降って、ある人にとどまるのを見た、その人が、聖霊によって洗礼を授ける人である』とわたしに言われた。わたしはそれを見た。だから、この方こそ神の子であると証ししたのである。」(1・32-34)

特に、洗礼者ヨハネの次の言葉に、誓願を立てる修道者の姿と重なる部分を感じます。「わたしはそれを見た。だから、この方こそ神の子であると証ししたのである。」司祭も修道者も、みずからが従う相手であるイエスに、何かを見たので、従おうと決めた人々です。

「何かを見た」と言う人は、もはやほかのものにこだわらない人に生まれ変わります。それは服装についても、あてはまると思います。司祭は普段着を着ることも多いわけですが、長崎教区の場合修道者は修道服をずっと着ています。わたしが普段着で青方に行って、エレナとかオサダにいても気づかない人も多いでしょうが、修道者に気付かない人は誰もいません。

修道者の方々は修道服を全く気にすることなく生活の中で着こなして、身なりで証しをしています。すごいことだと思います。修道者は偉いと、いろんな例を挙げました。けれども、ただ偉い人と言われるだけでは片手落ちです。誰かが、あのような生き方をしたいと考えるようになるこ

と。この動きがあって完成するのだと思います。

ちなみに、司祭を目指す神学生がいきなり増え始めたのは、教皇ヨハネ・パウロ 2 世が来日してからでした。圧倒的な存在感で、司祭職への憧れを種まきしてくれました。当時の教皇さまの動作 1 つ 1 つが、心を躍らせました。おそらく世界中で、同じような現象があったかもしれません。

「何かを見た」その確信を持っているなら、わたしたちも洗礼者ヨハネのように、教皇ヨハネ・パウロ 2 世のように、誰かの心にイエス・キリストを届けることができるのではないのでしょうか。司祭も、修道女も、それぞれ、自分の持っている確信をどのように伝えるか、考えることにしましょう。ぜひ、浜串小教区出身の司祭・修道者を神さまから頂けるように、年間主日の初めに当たり、願いましょう。

年間第 3 主日(マタイ 4:12-23)

年間第 3 主日 (マタイ 4:12-23)

小さくされた者にイエスは目を向ける

説教の前に、車の運転のことでお詫びをしておきたいです。1月21日金曜日、朝7時半ころ、後浜串のカーブを下ってきて、上って来るわたしとすれ違った軽トラックの人、ごめんなさい。よそ見をされていて、正面衝突しそうになって、死ぬほど驚いたと思います。申し訳ありません。ついでに言うと、同じ日の夜6時に、鯛ノ浦からの裏道でわたしが運転中ぼんやりしていて、衝突しそうになったツーシーターのスポーツカーの人も、ごめんなさい。

水曜日から木曜日にかけて、熊本の帯山教会にいる神父さまを訪ねに行きました。わたしが初めて赴任した浦上教会の、当時の主任神父さまが、今は帯山教会に派遣されています。今年、司祭叙階50周年、金祝を迎えているので、あちこちでお祝いを受けているでしょうが、この神父さまのもとで助任司祭として働いた後輩たちで、お祝いしてあげようということになり、駆けつけたのでした。

この神父さまは現在の帯山教会に7年、その前には天草の崎津・大江・本渡の3つの教会で7年勤めて来た方です。司祭生活50年のうち14年を、福岡教区にささげています。福岡に行く前は、浦上教会主任、その間司教総代理も務めた神父さまです。ちょっと言えば、そんなに偉い神父さまが、どうして長崎教区で晩年働かずに、福岡教区に送り込まれたのだらうと今になって考えるのです。

現在長崎教区は、他の教区に派遣している司祭が9人、東京と福岡の神学校に合計5人、留学している人が2人と、たくさんの司祭を送っています。今はこんなにたくさん派遣されていますが、その先頭に立って出向いてくださったのは、14年前に派遣されていった、帯山教会の神父さまだったわけです。

この大先輩の神父さまが他の教区に派遣されていったのは、長崎教区からの1つのしるしだったと考えています。それは、もし兄弟である他の教区が司祭不足で本当に困っているとき、長崎教区は協力を惜しみません。必要であれば、どんなにベテランの司祭でも、教区の重責を担った司祭でも、兄弟である教区のために派遣します。そういうしるしだったのではないかと思います。

実際、この大先輩の司祭が派遣されていってから、わたしから見て先輩司祭も後輩司祭も続々と派遣されていくようになりました。そして、派遣された先の教区で、また小教区で、喜び迎えられて働いています。

さて、福音朗読は、イエスがガリラヤで伝道が始める場面が選ばれました。今週の朗読箇所は、ガリラヤでの伝道だけを読む短い形と、四人の漁師を弟子にする場面以降も読む長い形とがありますが、短い形の朗読に絞ってお話したいと思います。

イエスは、ガリラヤで伝道を開始しました。ガリラヤがどういう場所かというと、ユダヤの国の中で、外国勢力に占領された北部の土地で、宗教的にも正統ユダヤ教から見れば異教にけがされた不浄の地と思わ

れていました。

ですからしばしばガリラヤは人々からさげすまれていたということになります。そのガリラヤから、イエスの活動は始まります。これは、神の目が、どこに向いているかを物語っています。神の目は、華やかな場所、例えばエルサレムに住む人々ではなく、小さくされ、人々の目が向かない場所、軽蔑され、忘れ去られた場所に住む人々に向けられているということです。

イエスは、ガリラヤを最初の伝道の場所を選びました。四人の漁師を弟子にしてから、ガリラヤはエルサレムとは違うから、君たちが宣教しなさいと派遣することも可能だったかもしれませんが。けれどもイエスは、みずから、ガリラヤに遣わされて行ったのです。小さくされた民にとっての「大きな光」「射し込む光」として現れ、伝道なさったのです。

神の目は、どんなに小さくされた場所も忘れずに見ておられる。むしろ小さくされた場所に、大きな慈しみのまなざしが注がれている。イエスのガリラヤ伝道はそのことを教えているわけです。

わたしたちの宣教の働きも、ここにヒントがあるのかもしれませんが。大きな場所、効率のよい場所ばかりを活動の場にするのではなく、見放され、忘れられ、見捨てられているような場所、小さくされた人々に目を注ぐ。そんな宣教の形を基本として考える。それが、イエスと同じ方向を向いた宣教の形なのだと思います。

小さくされた場所、そこに住む人々に目を向けるというのは、とても能率の悪い方法のように思うかもしれませんが。それでも、イエスが最初にそのような方法を選んだことは、忘れてはいけないと思います。わたしたちが取り組もうとしている一つ一つのことが、いちばん効果的になるにはどうすればよいかと、社会が考えるような方法を重視しているとしたら、ちょっと立ち止まって考えてみましょう。

イエスはいちばん効果のある方法とか、そのようなことを考えただろうか。神さまが最初に目を向けた場所を見ずに、わたしたちがイエスにもっともよく従っていると考えるなら、考え違いをしているかもしれません。

イエスがガリラヤから伝道を開始したという事実を、この1年のわたしたちの活動に、取り入れることにしましょう。効率と、効果ばかりを狙っていないか、よく考えて、イエスの望む方法に少しでも近い方法で小教区の活動を進めていくことができるように、ミサの中で願うことにしましょう。

年間第 4 主日 (マタイ 5:1-12a)

真福八端を通してイエスを現存させる

先週の木曜日と金曜日、マリア文庫の責任者という立場で、視覚障害者の施設に携わる責任者の情報サービスに関する全国研修会に参加してきました。

簡単に説明しますと、視覚障害者のためにボランティアで活動しているマリア文庫が、全国の視覚障害者団体の中でどのような位置づけにあるのか。全国の視覚障害者団体としてはどのような方向に進むことを目指していて、マリア文庫はその目標に向かってできていることは何か、これから必要なことは何か。

また、今後増えてくる視力に不自由を感じる方々、糖尿病で視力を失った人もこの中には含まれますが、こういった方々に、より多くのサービスを提供する可能性の高い取り組み（「サピエ」と言います）についての説明、そういったことでした。

研修は以上の内容ですが、せっかく大阪まで行ったので、お笑いを見てこようと思ひまして、難波グランド花月に行ってお笑いのステージを見てきました。

面白かったですね～。若手芸人もいましたが、ベテランの芸人、たとえば「今いくよくるよ」さんとか、「オール阪神巨人」さんとか、大御所の舞台も見ることができました。これも、ミサがなくてさびしいのを辛抱してくださった皆さんのおかげだと思っています。ありがとうございました。

さて、今週の福音朗読箇所は、山上の説教と呼ばれる個所で、26 聖人殉教者をたたえる記念ミサでも朗読される大切な箇所です。5 章 3 節から 10 節までで、幸いな姿を 8 つ取り上げることから、「真福八端（しんぷくはったん）」とも呼ばれています。この 8 つの幸いと呼ばれる姿を、まずイエス・キリストの中に見出すことにしましょう。

「心の貧しい人」これは、神に心を豊かにしてもらうことを願う人の姿です。イエスは、「『わたしにはあなたがたの知らない食べ物がある』」（ヨハネ 4・32）と言われました。ここから、御父が御子イエスを満たしてくださることが伺えます。「悲しむ人々」これはラザロが亡くなって、イエスがラザロのために涙を流したこと（ヨハネ 11・35）を思い出すことができます。

「柔和な人」イエスは、「わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。」（マタイ 11・29）と仰いました。「義に飢え渴く人」イエスは「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。」（マタイ 6・33）と仰いました。

「憐れみ深い人」たくさん例がありますが、今回は「大勢の群衆を見て、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた」（マルコ 6・34）を挙げておきましょう。「心の清い人」については、姦通の現場で捕まった人を、イエスが「『わたしもあなたを罪に定めない』（ヨハネ 8・11）と言ってゆるしてくださる場面

が思い出されます。

「平和を実現する人」イエスは平和をもたらす人でした。「わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える」（ヨハネ 14・27）と仰っています。「義のために迫害される人」裁判の席に連れて行かれ、兵士の平手打ちを浴びた時、イエスはその兵士に「何か悪いことをわたしが言ったのなら、その悪いところを証明しなさい。正しいことを言ったのなら、なぜわたしを打つのか。」（ヨハネ 18・23）と答えました。

こうしてみると、イエスには「真福八端」の教えのすべてが、この地上での生活の中で実現されていました。ですから突き詰めて考えると、イエスが幸いであると教えてくださった生き方は、まずイエスご自身の中にある、ということです。

けれども、真福八端の生き方をイエスの中に見つけ出しただけでは、わたしたちには何ももたらしてくれません。そこで、わたしたちとの結びつきを考えてみましょう。わたしは、それをひとことで言うならば、イエスの生き方を見習うこと。それが、真福八端の生き方だとまとめたいと思います。

イエスの生きざまを聖書の中に探せば探すほど、わたしたちはそれが真福八端の生き方を探ることになることが分かるでしょう。この生き方は他の人には特別な生き方に見えるかもしれませんが、けれども、イエスの生き方の中には全く普通のこととして現れています。

イエスの生き方を見習うことと、真福八端の生き方を実践することとは、表裏一体の関係にあると思います。つまり、わたしたちが自分の心を神に満たしてもらいたいと願い求めるなら、それはイエスの生き方を見習うことになる、ということです。真福八端の1つだけでなく、いくつかについて真剣に求めていくなら、わたしたちの生き方はイエスの生き方にさらに近づいて行くのです。

もっと大胆に言いましょう。わたしたちが真福八端の生き方をどれか1つでも実践しているなら、特にその生き方を徹底して貫くなら、この生き方を先頭に立って生きられたイエスが、今ここに、この時代に生きていると、言えるのではないのでしょうか。イエスをこの時代に証しすることは何にもまして大切な使徒職活動ですが、真福八端の生き方を貫くことは、今の時代に有効な証しの姿です。

年間第 5 主日 (マタイ 5:13-16)

神が「地の塩」「世の光」を使って世界を変える

今日、上五島地区で「信徒の集い」が開催され、浜串小教区も練習の成果を披露しに行きます。昨日の朝ミサでお知らせしていたんですが、大人の方で信徒の集いを見に行きたい方は 11 時半に車を出してくれるそうですから、どうぞ見に行って、発表する子供たちを応援してほしいと思います。ちなみにわたしも、ペトロに扮装して舞台に上がることになっています。

さて今週の福音朗読も、とてもよく知られているお話です。「あなたがたは地の塩である。」(5・13)「あなたがたは世の光である。」(5・14)説教の材料をいろいろ集めていたら、今までとは違った発見がありました。皆さんと分かち合いたいと思います。

今週の福音朗読を考えるために、まず身近な例から考えることにしましょう。皆さんの家庭には、蛍光灯や白熱球など、家の中を照らすものがあちこちにあると思います。わたしたちが知っている照明器具は、必ず電気をもとにして明るく照らすものばかりです。

これは今週の福音朗読を考えるのに大事な例題になります。蛍光灯も、白熱球も、それ自体は光を出さず、電気をもとにして光をつくります。ですから、蛍光灯の棒を持ってまわっているからと言って、あるいは白熱球を持ち歩いているからと言って、夜道を明るく照らして歩くことはできないのです。

イエスは弟子たちに、「あなたがたは地の塩である」「あなたがたは世の光である」と仰いました。わたしはこのイエスの言葉も、先ほどたとえに出した「蛍光灯」「白熱球」と同じようなとらえ方をしたほうがよいですよと、強く勧めたいのです。

「地の塩」「世の光」と呼ばれた弟子たちは、自分自身のよい行いだけで、塩の役割、光の役割を果たすことができるとは思いませんでした。弟子たちがイエスに深く結び付いていることで、またイエスによって注がれる聖霊に満たされることで、本当の意味で弟子たちを「地の塩」「世の光」にしてくれる。彼らはそのように理解していました。

初めに例として引いた蛍光灯や白熱球も、それだけでは周りを照らすことはありません。自分を光らせる場所に設置して初めて、蛍光灯も白熱球もその役割を果たすわけです。同じように弟子たちも、自分たちがイエスに深く結び付いているときに初めて、「地の塩」「世の光」として働くことができるのです。

そこで、わたしたちにもイエスの呼びかけを当てはめてみましょう。「あなたがたは地の塩である」「あなたがたは世の光である」だから、その良さを発揮して、世に対して証しとなりなさいと、イエスは期待しています。

けれども振り返って考えると、自分はとても「地の塩」「世の光」とは言えないと感じてしまうかもしれません。自分自身の良い行いだけでは、とてもこの社会を福音の教えで味付けするとか、社会を福音の光で照ら

すのだと、そこまでの勇氣は湧いてこないでしょう。

ここで思い出してほしいのは、弟子たちも同じことを感じた上で、自分たちが「地の塩」「世の光」となれるのは、イエスに深く結び付いているからだと理解していた点です。ですからわたしたちも、イエスに深く結び付いているならば、「地の塩」「世の光」となれるということです。では、どのようにして生活の中でイエスと深く結び付いていくことができるのでしょうか。弟子たちは、イエスと一緒に寝起きし、イエスの言葉、わざ、すべてを目の前で見てイエスとの深い絆を保っていました。わたしたちはどのようにして、イエスとの絆を深めるのでしょうか。

3つ、考えてみましょう。「祈り・聖書の学び・隣人愛」です。礼拝も含めて、祈りを生活に取り入れる人は、確実にイエスの照らし・導きを受けますから、イエスとの絆を深める人です。主日のミサに参加し、恥ずかしがらず誰にも遠慮することなく祈るなら、それは社会にイエスの福音を染み込ませ、消えることのない光として輝くことになります。

聖書の学び。聖書に日ごろから親しむ人は、神の言葉に常に耳を傾ける人ですから、イエスとの絆を深める人です。神の言葉をたえず受け入れるなら、それはいつか、溢れて人々に注がれるでしょう。人は、心の中にあるものを語るからです。長崎教区で取り組んでいる「聖書愛読マラソン」も、神の言葉に耳を傾けるよいきっかけです。

隣人愛を常に心がける人は、イエスとの絆を深める人です。わたしたちはやみくもに隣人を愛そうと思っても実行できません。隣人愛の土台となっているのは、知らず知らずに学んできたイエスの教えです。

たとえば、「わたしの隣人とはだれですか」との問いかけに答えて話してくださった「良いサマリア人のたとえ」や、兄弟をゆるすように促す「放蕩息子のたとえ」など、わたしたちが隣人愛を実践する土台は、しばしばイエスの教えから来ています。ですから、隣人愛はそのまま、あなたがイエスという「地の塩」「世の光」を表すことにつながります。

結局、わたしたちが「地の塩」「世の光」であるのは、イエスに結ばれてこそその話なのです。お話した3つの取り組みでわたしたちがイエスに堅く結ばれる生活をすれば、わたしたちは「地の塩」「世の光」であり続けます。そして、この「地の塩」「世の光」を、神は世の中で使って味を付け、真理の光を照らしてください。

わたしたちも、イエスに堅く結ばれることで「地の塩」「世の光」となります。あとは、神が必要な場所ですべてくださるように、自らを覆い隠さないことです。神がこの世界を導く道具としてわたしたちをどうぞお使いください。そんな気持ちをこのミサの中でおさげたいでしょう。

年間第 6 主日 (マタイ 5:17-37)

神の望みに叶うように、この1つを心に

今週の福音朗読は、律法学者やファリサイ派の人々に、ご自分の考えをはっきりと示し、宗教指導者たちの陥っている過ちを真っ向から反論しています。イエスの考えの土台になっているのは、「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためである」(5・17) というものです。

まずは、「廃止する」という言葉を、できるだけもとの言葉に近い形で考えることから始めましょう。ここで使われている「廃止する」は、もともとは「ばらばらにする」を意味しているそうです。ですから、律法や預言者(これは旧約聖書全体を表します)が本来持っていた精神を忘れ去り、宗教指導者たちはそれをばらばらにしまいました。そこへイエスがおいでになって、「律法を廃止するためではなく、完成するために来た」と仰ったのです。律法本来が持っていた精神を現わすように、律法に新たないのちを吹き込もうとされたのです。

では律法本来の精神とは、どのようなものでしょうか。律法はもともと、神への愛と隣人への愛を表す手段でしたが、人間に都合のよいようにさまざまな解釈が加えられ、本来の姿を失っていました。

例として、マルコ福音書の7章9節から13節を引用してみます。「あなたたちは自分の言い伝えを大事にして、よくも神の掟をないがしろにしたものである。モーセは、『父と母を敬え』と言い、『父または母をののしる者は死刑に処せられるべきである』とも言っている。それなのに、あなたたちは言っている。『もし、だれかが父または母に対して、「あなたに差し上げるべきものは、何でもコルバン、つまり神への供え物です」と言えば、その人はもはや父または母に対して何もしないで済むのだ』と。こうして、あなたたちは、受け継いだ言い伝えで神の言葉を無にしている。また、これと同じようなことをたくさん行っている。」

宗教指導者たちは人間の都合に合わせたたくさんの解釈をはさんで、神の掟を神の掟の価値から引き下げていました。ですからイエスの反論は相当に厳しかったのです。イエスが完成させようとしたのは、人間の都合でばらばらにされてしまった律法を、神への愛と隣人への愛を表すというただ1つの方向に秩序付けることでした。

ただ1つの方向に秩序付ける。この考えで今週の福音朗読を読み返してみましょう。イエスは「これまではこのように命じられていた。しかし、わたしは言うておく。」と反論して、事細かに説明しています。さらに複雑になるではないかと思っておられるかもしれませんが、よく読み返すとイエスの反論がなるほどと理解できるようになります。例えば殺すなという掟については、凶器を使った殺人だけではなく、人のいのちを、神から引き離してしまう行為はすべて神に反するのだということを明らかにします。兄弟に腹を立てる、「ばか」と言う、これらは隣人をおとしめるものですから、すべて責任を問われるので

す。

姦淫するなという掟については、神が与えてくださった結婚の尊さを軽視し、破壊する行為は、思い・望みを持つこともすでに神の望みに反するということです。肉体的な行為だけに限られるというような人間の解釈は、神が用意した掟の崇高な価値を引きずり下ろすことになるのです。

他にもイエスは具体的に掟のあるべき姿を説明されますが、大切なのは、人を神への愛と隣人への愛に向かわせるはずだった掟を、本来の姿に立ち返らせようとしたということです。

そしてすべてを本来の姿に立ち返らせようとしたイエスの思いは十字架上で完成されました。わたしたちが、生活のすべてを神の望みに合わせるには、わたしたちの力では全く足りませんでした。そこで、イエスが十字架にはりつけになって、わたしたちを神の愛に結び合わせようとしたのです。

「すべてを神の望みに合わせようと努力するのは不自由で窮屈だ」と思う人もいるかもしれませんが。けれどもイエスははりつけにされた十字架上で、「成し遂げられた」と仰ったのです。人間を、神の愛に結びつける。その救いのわざが、十字架によって完成されたと言っているのです。

はりつけにされた姿は、まったくもって不自由な姿です。けれども、イエスが、御父への愛のためにはりつけにされていることを考えてみる必要があります。御父への愛のためにはりつけにされているイエスは、本当は完全な自由を手に入れていたのではないのでしょうか。神の望みに、完全に結びあわされた生活を人が志すことは、本当の自由を手に入れる道だと思うのです。

今週の朗読の最後、「あなたがたは、『然り、然り』『否、否』と言いなさい。それ以上のことは、悪い者から出るのである。」(5・37)というイエスの言葉があります。神が掟に込めた思いを、人間の都合であれこれ解釈するのではなく、「生活全体を、神さまが喜ぶ方向に向ける」この1点にわたしたちは心を砕く必要があります。ただ1つの原則で生活する。この決意を新たに、今週も過ごしていきましょう。

年間第 7 主日 (マタイ 5:38-48)

霊が注がれ、人は新しい生き方を歩む

今週の福音朗読箇所は、先週の朗読箇所と一続きになっています。先週の朗読箇所ではイエスは「昔の人はこう言っていた。しかしわたしは言う・・・」という形で律法学者やファリサイ派の主張を反駁（はんばく）しましたが、今週の朗読箇所でも同じように「昔の人はこう言っていた。しかしわたしは言う。」という形で、イエスが人々に求めていることを明らかにします。

一続きと言いましたが、先週の朗読箇所とは違いもあります。先週の部分でイエスは、掟が神の本来の望みからずたずたに引き離されていたのを、元に戻すことに力を注いでいました。それが、今週の部分ではもっと進んだ取り組みに人々の目を向けようとしています。ひとことで言うとそれは、「新しい生き方への導き」です。

では、「新しい生き方への導き」とはどういうもののでしょうか。それは、律法が教える生き方を超える生き方のことです。律法が「目には目を、歯には歯を」と教えるとき、悪人に手向かわない生き方をイエスは教えます。

当時の人々は、損害を被ったとき、同じだけの損害を相手に与えることは普通のことと考えていたわけですが、イエスはそれをゆるしませんでした。イエスは具体例を出して、とことん相手と向き合う新しい生き方を示します。

「だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。あなたを訴えて下着を取ろうとする者には、上着をも取らせなさい。だれかが、一ミリオン行くように強いるなら、一緒に二ミリオン行きなさい。求める者には与えなさい。あなたから借りようとする者に、背を向けてはならない。」(5・39-42)

これらの勧めだけでも、とても実行できそうにないのですが、イエスはさらに難しい勧めを与えました。「わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。」(5・44) 当時の人々は「隣人を愛し、敵を憎め」という生き方を当然のことと考えていたのです。ですからイエスの勧めは、とても受け入れられないものでした。

わたしたちにとっても同じです。わたしたちに「隣人を愛し、敵を憎め」というはっきりした掟はないかもしれませんが、気持ちには理解できるはずです。わたしたちにとっても、敵は憎むべきもの、倒すべきものと思っているでしょう。それを、「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」と命じるのですから、「なぜ？」と問い返したくなるのです。

イエスの勧めは、今の時代にあっても「新しい生き方」です。復讐してはならない、敵を愛しなさいというのですから、人々の考えを超える生き方です。果たしてそれは可能でしょうか。もし可能なら、どんな人に求められる生き方でしょうか。

中田神父は、正直に言うと、不可能だと感じます。仕返しをするな、と言いますが、これまでしばしば、「やられたらやり返す」そんなつもりで生きてきました。言葉尻をとらえて、「やられたら四倍にして返す」そんなことさえ考えて生きてきたのです。

もし、不可能と考えていることが可能になるとしたら、それは、なぜイエスがわたしたちに新しい生き方を求めてくるのか、そのことを考えないと答えは出ないと思います。イエスは、なぜこうした新しい生き方を求めるのでしょうか。

それは、過ちの繰り返しを断ち切るためではないでしょうか。「復讐しても、また新しい復讐を生む」「敵を憎んだら、憎しみが返ってくる」確かにそうなのです。過ちを繰り返し、歴史が繰り返されていきます。そこへイエスは、過ちを繰り返さないために、新しい生き方を持ち込んでくださったのです。

新しい生き方は、誰かが生きて初めて、その生き方を見習うことができます。復讐しない生き方、敵をも愛していく生き方を最初に生きてくださったのは誰でしょうか。疑いもなく、それはイエス・キリストです。

平手で顔を殴った人に手向かうことなく、衣服を奪い合う人にすべての衣服を手放し、ゴルゴタの丘まで三度倒れながらも歩き通したイエス・キリストが、わたしたちに新しい生き方の模範を残してくださいました。ご自分を迫害する者のために、十字架の上で祈り、悪人にも善人にも、救いの道を開いたイエス・キリストが、新しい生き方を最初に生きてくださったのです。

新しい生き方を見習って生きるとは困難を伴います。慣れている道ではないからです。けれども、日本人のわたしたちには、すでにたくさんの先祖たちの模範があります。26 聖人がそうですし、205 福者殉教者や、188 福者殉教者がいます。彼らは、イエスの歩いた道をまっすぐに歩き通しました。

新しい道を選ぶことは、難しすぎると感じるかもしれません。けれども、イエスの霊が注がれると、わたしたちはこの道を選ぶことができるようになります。それはたとえて言えば、決心つかない事柄に、誰かから背中を押してもらって、決断するようなものです。わたしたちが新しい道を選ぶ力を、聖霊は必ず与えてくださいます。新しい生き方に、大きく舵を取りましょう。復讐しない、敵をも愛する生き方に、永遠の命に至る道が続いているのです。

年間第 8 主日 (マタイ 6:24-34)

病気の時も健康の時も「思い悩むな」

こちらに赴任してから、月に2回病人訪問に回っています。行った先の教会でまちまちですが、毎週お見舞いに行く習慣のある教会もあれば、月に一回お見舞いに行く教会もあります。そしてお見舞いして、病人の聖体拝領をします。

皆さんのほとんどが、病人の聖体拝領を受けたことがないでしょうから、少し説明しておきます。病人の聖体拝領は、ミサを、ぐっと短くしたような形になっています。最初に招きがあり、回心の祈り「全能の神と、兄弟の皆さんに告白します・・・」と唱え、聖書を朗読します。聖書朗読の後、ご聖体の容器を開いて、一緒に主の祈りを唱えます。

そして聖体拝領するときには、「神の子羊の食卓に招かれた者は幸い」「主よ、あなたは神の子キリスト、永遠の命の糧、あなたを置いて誰のところに行きましょう。」という受け答えをして聖体を拝領します。最後は拝領祈願みたいな祈りを唱えて、祝福の祈りを唱えて終わります。ほぼ、ミサの流れに沿っています。

この中で、聖書朗読の部分がありますが、儀式書には5通りの朗読箇所が用意されていて、実はそのいちばん最初に、今週の福音朗読箇所が選ばれているのです。もちろん、いちばん最初に載せているからと言って、司祭がほとんどこの「空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。・・・」(6・26以下)を選んでいるとは限りませんが、わたしも時々この箇所を読みます。

ここから何が見えてくるかというと、病人訪問を受ける人たちにとって、今週の福音朗読箇所はとてもよくわかる箇所、自分のこととして身近に感じる箇所になっているということです。病気で、心もからだも弱っているときに、「あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。」という言葉は、神さまが病気の自分にも目を注いでくださっていることをよく感じさせてくださると思います。

または、「今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか」(6・30)という言葉も、命の危険を感じている人にとって、力強い言葉ではないでしょうか。

今週の朗読箇所でイエスがいちばん言いたいのは、「思い悩むな」ということです。そして、この朗読を生活でいちばん身近に聞く人は病人訪問を受けている人と言ってよいでしょう。すると、病気で、心もからだも弱っているときにいちばんイエスが言いたいことは、「思い悩むな」ということになります。

実際には、病院に入院している人がいちばん思い悩むことの多い人のはずです。わたしが見舞った人の中には、家族のある人がたくさんいます。配偶者であるとか、子供たちであるとか、きっと家で待っている人のことが、心配でたまらないはずです。

それでも、イエスは「思い悩むな」と呼びかけ、イエスに深い信頼を寄

せることを教えようとするのです。「あなたがたのうちだれが、思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。」（6・27）とも言っています。病院に入院している人にとっては、「思い悩んだからといって、退院をわずかでも早めることができようか」ということかもしれません。

入院している人、自宅で病氣療養中の人は、いつか退院し、健康を取り戻す日が来るでしょう。入院中の不自由な思いに比べれば、療養中の不自由さを思えば、解放された喜びはひとしおだと思います。

そんなとき、もしかしたら入院中のことを思い出すかもしれません。辛かった時のことを振り返るかもしれません。でもイエスは、病氣の時、つらさを味わっているときから、変わらない態度でわたしたちに呼びかけています。それは、「思い悩むな」ということです。

ですから、あなたが入院中または病氣で自宅にいる間に「思い悩むな」というイエスの言葉を深く学んだのであれば、退院後、病氣からの回復後も変わらずイエスの「思い悩むな」という言葉に忠実であるべきでしょう。

イエスは変わらない態度でわたしたちに接してくださいます。わたしたちは、イエスに、変わらない態度を保つことができるでしょうか。思い悩むに違いない、そういう時に「思い悩むな」と呼びかけるイエスを、今のわたしは信頼できるだろうか。あらためて自分に問いかけてみましょう。

なかには、病氣の時はイエスの言葉に信頼を寄せようと必死になっていたのに、健康を取り戻すとその時の熱意を忘れてしまうという人もいます。そうではなく、「わたしは、病氣の時も健康の時も、変わらずイエスに信頼します」と答えることができるよう、力を願いましょう。

年間第 9 主日 (マタイ 7:21-27)

初聖体の 2 人は、イエスさまを土台に置きました

今日は、初聖体を受ける保育園の年長さんが 2 人います。この子たちには、お話の最後に、ご聖体を受けるにふさわしい準備ができているか、試験をしたいと思います。ケータイ電話でおうちの人に答えを聞いたりしたらダメですからね。お話が終わるまで、ちょっと待ってください。今日は説教を 7・8 分で切り上げたいと思っていますが、試験のために待たされる 2 人には、果てしなく長い時間を感じるかもしれません。ご苦労さまです。さて、福音朗読箇所、イエスが特に念を押しているのは、「わたしのこれらの言葉を聞いて行う者」(7・24)「わたしのこれらの言葉を聞くだけで行わない者」(7・26)とあるように、イエスの言葉を土台にして信仰生活を成長させていくことの大切さです。

イエスがたとえに引いたのは、家と土台についてです。しっかりした土台の上に建てた家、砂の上に建てられた家、どちらが災害の時に耐えられるかはだれもが分かることです。滅多にないことですが、わたしも前任地で司祭館を建てるチャンスに恵まれました。すでにある家を改築するのと、新たに建て直すのと、あんまり変わらない見積もりでしたので、新築しようよと促して、司祭館を建てたのです。

立派な司祭館がたちあがりまして、後の神父さま方に 1 つはお役に立たたかなあと思っていますが、設計を引き受けてくださった事務所の社長さんが、古い司祭館から、1 つだけ新しい司祭館に取り入れたものがあると行ってそれを見せてくださいました。

70 年も 80 年も経った司祭館に、使える材料などあるのだろうかと思っていましたが、示されたものを見て、あーなるほどと納得したのです。それは、基礎・土台の石でした。設計事務所の社長は、この基礎の石が表に見えるように、玄関の部分に利用してくださったのです。

もちろん、古い材料など 1 つも使わなくても、新しい司祭館を建てることはできたでしょう。けれども、この場所に 70 年も 80 年も司祭が生活した証しを、新しい司祭館に引き継ぐことは、それなりに意味があると思うのです。

いろんな人の努力の上に、古い司祭館が建っていた。そして、その人々の努力を忘れることのないように、未来の人のために基礎の石を引き継いだわけです。これはさすがだなあと感心しました。3 月 27 日には伊王島大橋も開通するわけですが、開通後に予定している巡礼の時には、もう一度司祭館を眺めてみたいと思っています。

今日、2 人の年長さんが初聖体を受けます。ご聖体には、イエスさまがおいでになります。そしてご聖体をいただくときには、「アーメン」と答えて拝領します。「アーメン」は、「そうです、その通りです」という意味がありますが、聖体拝領でのアーメンの意味を補うと、「イエスさまをいただいて、わたしたちはイエスさまに育ててもらいます。イエスさまという土台の上に、わたしたちはすくすく成長していきます。その通りです」という意味だと思うのです。

イエスさまははっきりと、「わたしのこれらの言葉を聞いて行こう」ことが何より大切と仰いました。イエスさまの言葉、行い、そしてイエスさまそのものであるご聖体を土台にして信仰を積み上げていかなければならないのです。そうしない人々は、どれだけ見栄え良く教会とつながっていても、イエスさまが土台にないので、積み上がっては崩れて、何も形に残らないのです。

初聖体を受ける2人が、これからいつもいつもミサを楽しみにしてくる子どもでいてほしいと思います。おうちの人にしつこくこう言ってください。「わたしたちはいつミサに行ってもご聖体拝領できるんでしょ？今度もミサに行けるんだよね？今度の日曜日も、いちばん最初にご聖体を受けるんだよね？」と、執念深く聞き返してほしいと思います。2人の願いだったら、おうちの人はどうな努力をしてもかなえてくれるはずです。

今日から2人は、ミサにあずかって、ご聖体に養われて、岩の土台の上に信仰のお城を建てていきます。神父さまも、2人がこれからイエスさまの恵みを土台にしてどんなふう to 成長していくか、本当に楽しみにしています。これから少なくとも数年間、中田神父さまを喜ばせてください。そしてこれからずっとイエスさまの土台の上で成長していくことで、浜串小教区の皆さんを喜ばせる人であってほしいと思います。

では、初聖体のためのテストをします。

四旬節第 1 主日 (マタイ 4:1-11)

イエスに従うときわたしの物語が始まる

四旬節を迎えました。イエスの死と復活を準備するための大切な日々です。有意義に過ごしたいと思います。

一つ、豆知識を提供したいと思います。知らないでいるのと、知っているのとではやはり明らかな違いが出てきますので、ぜひ知っておいてほしいのです。

「四旬節」という言葉は、「40 日の期間」という意味です。灰の水曜日から、御復活の前日まで、確かに 40 日なのか、その豆知識です。四旬節は第 5 主日までと受難の主日（枝の主日）の 6 週、それに灰の水曜日から「水・木・金・土」（指を折って数える）の 4 日間あります。

すると、6 週と 4 日間で、単純に計算すると $7 \times 6 = 42$ 、それに 4 日加えて 46 日ということになります。では四旬節は、だいたい 40 日あるからそういう呼び方になったのでしょうか。

そうではありません。ここに、四旬節の独特の数え方があります。四旬節は、日曜日を数えないのです。日曜日は、いつでも「主の日」「復活を祝う日」として、日数から除外されるのです。すると、1 週間をまるまる 7 日間で数えるのではなく 6 日間で数えることになりますから、 $6 \times 6 = 36$ 、それに灰の水曜日からの 4 日間を加えて、ぴったり 40 日間ということになります。「四旬節の 40 日とは、どう数えて 40 日か」という豆知識として、記憶しておいてください。

では福音朗読に入りましょう。イエスが、荒れ野で誘惑を受ける場面が選ばれています。この、荒れ野での誘惑の物語ですが、イエスさまがどんな誘惑を受けて、どのようにそれを退けたのか、そのことだけを学ぶために物語が選ばれているのでしょうか。わたしはそうは思いません。イエスの歩みを通して、受難と死と復活に至る歩みを、わたしたちにも身近なものとする。そういうことも、狙いとしてあるのではないのでしょうか。

つまり、イエスが歩まれた道は、わたしたちの生活の中で、自分たちが歩いていく道でもあるということです。たとえばそれは、イエスさまの誘惑を退ける姿から、わたしたちが生活の中で起こる誘惑を退けるヒントを見つけて、「わたしたちの四旬節物語」とすることも、狙いとしてあるのだと思っています。

ですから今年の四旬節と復活節は、救いを完成させるイエスの物語としてだけでなく、「わたしたちの物語」となるような工夫を、説教の中に盛り込んでみたいのです。イエスが、救いを完成させてくださったというだけでなく、イエスによって、確かにわたしは救われた、イエスによって確かにわたしの生活はすばらしいものに変えられた。そういう体験を、四旬節から復活節の間に積み上げることができたらと思っています。

では、福音の学びに入りましょう。3 つの誘惑が描かれています。それぞれ、パンの誘惑、神を試みる誘惑、悪魔を礼拝する誘惑としておきま

す。パンの誘惑では、「パンを食べれば、あなたは生きていけるじゃないか」と誘惑しているのですが、イエスは、神の言葉を食べなければ、本当に生きていくことはできないと言って退けます。

ここで、わたしにとっての誘惑を退ける場面を考える必要があります。悪魔はわたしにこう言うのです。「祈りをしなくても、そして教会に行って罪のゆるしを受けたり、ミサの中で神の言葉に触れたり聖体を拝領したりしなくても、あなたは生きていけるじゃないか」と誘っているのです。

あなたはこれに、どう答えるのでしょうか。神との関わり、教会との関わりを1日食べなかったとしても、それは影響ないかもしれません。ですが、半年1年、あるいは5年10年15年食べずにいたら、神の与える恵みが長く補給されていない状態で、本当に生きていると言えるのでしょうか、ということです。

イエスは、「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」（4・4）と仰います。靈魂に語りかける、神の一つ一つの言葉で、わたしたちは生きるのです。いろんな時に心に響く声が、わたしたちを生かしてくださっているのです。

次に悪魔はイエスをエルサレム神殿の屋根の端に立たせてこう言います。

「神の子なら、飛び降りたらどうだ。」（4・6）これも、わたしにとっての誘惑を退ける場面を考えることにしましょう。ある人は、祈りをする意味が分からないかもしれません。ミサに行く意味が、全く分からないかもしれません。悪魔はそこで、こう言うでしょう。「いっそのことこの信仰生活から飛び降りて、縁を切ってはどうか。」

わたしはこれにどう答えるのでしょうか。信仰生活から飛び降りても、怪我一つ負わなくて済むかもしれません。ですが、飛んだ場所に、自分で戻ることはほとんど不可能に近くなります。

イエスはこう答えています。「あなたの神である主を試してはならない。」（4・7）祈りの効果が感じられない日、ミサの恵みが感じられない日があるとしても、誠実に続けていくことは、いつか、誘惑を跳ね返す力になり、イエスの物語から「わたしの物語」を作り上げるのです。最後の誘惑、悪魔を礼拝する誘惑は、イエスを、父なる神以外の何かにひれ伏すように仕向ける働きかけです。この場面を、わたしたちに当てはめると、どうしてもやめられない良くない習慣が、わたしたちにないでしょうか。

楽しみのためにお金を使うのも、生活を困らせるほどお金を使い込んでいるなら、やめられなくなっている証拠です。家庭で暴力をふるうことも問題になっていますが、やめられないという人も中にはいます。お金や、暴力、あるいは権力から離れられない状態は、わたしたちが信じる神以外のものを礼拝しているのと変わりません。

自分の言うことを聞かせようとお金や暴力や権力を振り回す人に、イエスは「退け、サタン。」（4・10）と喝を入れます。そこで目が覚めて我に返るなら、その時から、「わたしの回心物語」が始まるのです。

今日、イエスが体験した誘惑の場面を自分自身に当てはめ、「わたしの物語」を始めましょう。四旬節の福音朗読の中に「わたしの物語」を見つけたことができるなら、わたしたちはイエスと共に、救いを完成させ

るエルサレムへの旅を続けることができます。

四旬節第2主日(マタイ 17:1-9)

四旬節第 2 主日 (マタイ 17:1-9)

今は、光り輝く姿の意味を熟考する

ガックリ疲れています。黙想会を4日連続でこなしましたが、ずっとずっと話し続けるとやはり疲れます。来年は、ぜひ説教師の神父さまをお呼びして、黙想指導をしてもらおうと思います。

今日の福音朗読は、考えるヒントがあります。それは、「最初の言葉」です。皆さんが手元に持っている「聖書と典礼」では、ミサの朗読箇所として使うために、新約聖書に書かれているはずの「最初の言葉」を省略して、「その時」という言葉に置き換えられています。これでは「最初の言葉」が何なのかわかりません。

今手元に新約聖書を用意していますが、この新約聖書の今週の朗読箇所に当たる部分をそのまま読むと、「六日の後、イエスは、ペトロ、それにヤコブとその兄弟ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。」(17・1)となっています。つまり、わたしが言う「最初の言葉」というのは、「六日の後」という言葉なのです。

「『六日の後』という言葉が一体どうしたのだ」と思うかもしれません。これは、六日前に何かがあったのだということ、そして、六日前にあったことと重ね合わせて、今日のことを考えなさいという合図です。そこでわたしたちもていねいに、六日前に起こったことからさかのぼって考えてみることにしましょう。

六日前に起こったこと、それは2つの出来事です。1つは、ペトロがイエスへの信仰を言い表すという出来事、もう1つは、イエスが、弟子たちにご自分の死と復活、御自分が必ずエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっているということを打ち明ける出来事でした。

「六日の後」で考えるべきことがもう1つありました。それは、「六日前の出来事と重ね合わせて、今日の出来事はどういう意味があるのか」ということです。そのために、六日前の出来事をよく考える必要があります。

ペトロは、立派に信仰を言い表しました。イエスさまからも立派な答えであると認めてもらいました。ただ、イエスが「あなたにこのことを現したのは、人間ではなく、わたしの天の父なのだ。」(16・17)と言っておられるのに、ペトロは言い表した信仰が自力で言い表したものだと思っていたかもしれません。

その証拠に、「あなたはメシア、生ける神の子です」(16・16)と答えたにもかかわらず、イエスがご自分の死と復活を予告すると、言い表した信仰に自信が持てず、動揺してイエスをわきへお連れしていきめたのでした。「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません。」(16・22)

こういう出来事があって、今日の「イエスの姿が変わる」という場面につながっていくのです。イエスは、立派に信仰を言い表したペトロでさえ、自分の信仰が揺らいでしまったのを見て、復活につながる姿

を弟子たちに示して、彼らを勇気づけようとされたのではないでしょう
うか。

復活につながるような、輝く姿は、弟子たちに大きな希望を持たせた
でしょう。この方は、やはり「メシア、生ける神の子」なのだ、そう
いう実感を持ったことでしょう。そこへ、光り輝く雲が彼らを覆い、
声が聞こえます。「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。
これに聞け」(17・5)

「イエスに聞け」と声は命じました。たとえペトロが、「あなたはメ
シア、生ける神の子です」と立派な信仰告白をしたとしても、それを
あたかも自分の力で言うことができたと思いをしないために、
「イエスに聞く」必要があるのです。わたしたちがいちばん苦手な、
「よく聞く」ことが、この場面で必要なのです。

本心は、有頂天になって人々に言いふらしたいところです。「主よ、
わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。お望みでしたら、
わたしがここに仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一
つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」(17・4)と言っ
ているように、人々にその輝く姿を見せびらかしたいところです。で
すが、弟子たちに求められるのは「イエスに聞く」ということでした。
わたしたちは黙想会で、「声」として生活の中で証しすることを考え
てみましょうという学びを得ました。わたしたちが「声」になるため
には、やはり声の持ち主にどんな声であってほしいか、何を語ってほ
しいか、「聞く」必要があるのではないのでしょうか。

イエスは、この物語の中でわたしたちにどういう態度を取ってほしい
か、語っています。「人の子が死者の中から復活するまで、今見たこ
とをだれにも話してはならない」(17・9)これから復活のその時まで、
わたしたちには聞くことに専念してほしいのでしょうか。しっかり聞いて、
すべてを噛みくだいて、復活の喜びが来たら、わたしたちにも語
ることを期待しているに違いありません。

イエスの光輝く姿、復活の姿が何なのか、わたしたちもこれからじっ
くり考えましょう。ご復活の喜びの時に、答えが見つかったなら、そ
の時は大胆に証しをしましょう。わたしたちが熟考して見つかった答
えは、復活のその時からきっと証しの力になるはずです。

四旬節第 3 主日 (ヨハネ 4:5-42)

主よ、その水をください

3 月 25 日日本時間の夜 8 時、バチカンでは 25 日の正午ですが、教皇ベネディクト 16 世は、高松教区と大分教区の新しい司教さまを発表なさいました。高松教区には、大阪大司教区の諏訪榮次郎師が、大分教区には長崎大司教区の浜口末雄師が選ばれました。本当に喜ばしいことだと思います。

長崎大司教区から選ばれた浜口末雄師とは、大曾教会時代に、神学生としてお手伝いをさせてもらったことがあります。小学生の黙想会の手伝いでした。わたしの指導力が足りなかったために、もっとしっかり準備をして子どもを指導しなさいと、あの時は叱られたような覚えがあります。

浜口末雄師は、長崎のカトリック神学院の院長や、高松教区に派遣司祭として出向いて、高松教区事務局長の重責を担いました。それらの働きが、教皇さまの目に留まったのだと思います。ふだんはつまようじをはさんでいる木枯らし紋次郎のような風貌なのですが、司教に選ばれましたと、中央協議会のホームページに掲載された写真は、つまようじをはさんでいませんで、りりしい恰好で写っていました。

わたしは、浜口師が非常に勉強熱心な方であることを知っています。絶対に表には見せませんが、上五島での聖書講座などで準備に費やした時間は、講座に与かっているだけでは分からないくらいのものすごい量でした。ある時は、外国語の参考資料をていねいに読みこんでいるのを見たこともあります。そう考えてみると、なるべくして司教さまになったのかなあと納得しております。

さて、今週の福音朗読は、「イエスとサマリアの女」という物語です。イエスに少しずつ導かれて、サマリアの婦人はイエスを信じるようになります。そして、サマリアの婦人は町に戻って、人々にイエスのことを告げ知らせ、多くの人もイエスを信じるようになるという物語です。途中、弟子たちと「生きた水」についての対話もあります。

わたしが注目したのは、サマリアの婦人が、イエスにたくさんの質問をぶつけて、その疑問に答えを求めるのですが、その中に、1 つだけ、質問をぶつけるのではなくイエスに請い求める部分があります。「主よ、渇くことがないように、また、ここにくみに来なくてもいいように、その水をください」(4・15) という部分です。

さまざまに質問をぶつけているとき、サマリアの婦人にはまだ心の中に警戒心があったと思います。けれども、「主よ、その水をください」と言った時には、もはやイエスを警戒する気持ちではなくなっていたはずです。この人だったら、すべて心を開いて自分の願いを受け止めてくださる。そして、この水汲みの苦労から解放してもらえる。そう思ったのかもしれませんが。

当時の水汲みは重労働でした。何十リットルもの水を、井戸のある場所まで歩いて行って、持ち帰る必要があったのです。彼女が水汲みに

来たのは、正午ごろと書かれています。普通は、朝早くか、日が傾いてからの労働のはずですが、彼女は人目を避けるように、最も日が高く上っている時間帯にやってきたのです。ですから、彼女の願いは切実だったでしょう。

次第に彼女は、飲み水のことを言っているのではないということに気づいていきます。飲み水は、どれだけ飲んでもいつかは乾きます。そうではなく、彼女の中で求めていた別の渇きを、イエスが満たしてくださるという理解に、導かれていったのです。

「その水をください。」そう言ったときは、まだ飲み水のことを考えていたでしょう。ある意味で、まだ十分理解していないときに声を上げたので、正しい答えに導かれていったのかもしれませんが。このサマリヤの婦人の態度は、わたしたちも学ぶ必要があります。わたしたちも、分かってから求めるのではなく、まだ分からないながらも、真剣に願い求めるなら、いつか正しい答えに導かれていくのではないでしょう。

中田神父も、いつも週末になると考えます。「主よ、説教で苦しむことのないように、また、週末になって毎度毎度頭を悩ませなくてもよいように、これで完璧という説教をわたしにください。」けれども、その願いはいつも当てが外れます。1度準備したら何回使っても飽きのこない説教など、どこにもないのです。そして、わたしがイエスに求めるべきものも、そういう類のものではないのだと思います。

そうして、「主よ、今週も何でもいいですから、説教をわたしに与えてください」と願い続けるうちに、何か、信者の皆さんの心の奥の渇きに潤いを与える水が与えられるのだと思います。「主よ、その水をください。」この願いが、わたしたちの心の渇きを潤す突破口なのだと思います。

いつまで大分教区は司教さまが与えられないのだろうか。そんなことを心の中で呟いていましたが、神さまは必ず、わたしたちの心の渇きをいやす水を与えてくれるのだと今回知りました。わたしたちが目の前の水ではなく、心の渇きを満たす水こそ大事なのだと徹底的に教えてくださり、それからイエスは命の水を与えてくださるのだと思います。命の水を今週も与えてくださるイエスに、感謝してこのミサを続けてまいりましょう。

四旬節第 4 主日 (ヨハネ 9:1-41)

だれもがイエスに種蒔かれ、呼び戻されている

3月31日と4月1日で、上五島地区の神父さまがずらっと入れ替わりしました。あと1人、地区長となる青方の主任神父さまが8日に赴任してきますが、思いっきり若返りました。11人の司祭のうち、30歳代と40歳代が8人になりました。

あと3人は、先輩とはいえ70歳にはとても見えないダンディーな神父さまと50代の神父さま2人ですから、最強のメンバー構成と言ってもよいかもしれません。大司教さまも若手をたくさん上五島に配置してくださって、気前がいいですね。

今回おいでになった神父さま全員が、上五島に赴任することを手放しで喜んでいるか、わたしは分かりませんが、上五島の神父さまの団結力や絆を知ったときに、あー、この地区に赴任してよかったなあときっと思ってくれると思います。

新しく入ってこられた神父さま方が、上五島に魅力を感じてもらえるように、転勤のなかった浜串・鯛ノ浦・土井ノ浦・真手ノ浦の4人の司祭は、上五島地区の魅力を示す必要があるでしょう。

さて、今週の福音朗読は、生まれつき目の不自由な人がいやされる場面が選ばれています。この人が身に受けている障害は、イエスの言葉の通り、「神の業がこの人に現れるため」(9・3)でした。イエスは、人々が神の働きを知り、神をたたえるためにこの人を使っておられるということになります。神は、いろんな場面で人を使います。

まず、朗読箇所を大きく見渡すために、ヨハネが組み込んだ仕掛けを読みとりましょう。この物語に、ヨハネは3つの場面を組み込んでいます。

第1の場面は、生まれつき目の不自由な人とイエスが出会う場面です。イエスは奇跡をおこなって、目が見えるようにしてくださいました。

第2の場面は、ファリサイ派の人々が、いやされた人と、ここでは省略されていますが、その両親を問い詰める場面です。当時の宗教指導者であったファリサイ派の人々は、奇跡によって心の目も開かれ、イエスを信じ始めている人を完全に否定しようとします。そしていやされたその人は、町の外に追い出されてしまいます。

第3の場面は、再びイエスと出会う場面です。「あなたは人の子を信じるか」(9・35)とイエスが語りかけると、いやされた人はその場でイエスを救い主と信じ、イエスにひざまずきました。

この3つの場面は、ヨハネが物語に組み込んだ「仕掛け」として働いています。かいつまんで話すと、「ある人にイエスとの出会いがあり、イエスを信じ始めたその人は迫害を受け、町の外に追い出されるが、イエスと再び出会い、イエスへの信仰を固めてもらう」というものです。

これがなぜ「仕掛け」なのかと言うと、この物語の登場人物、「生まれつき目の不自由な人」だけが、イエスとこのような出会いを果たすのではなく、イエスを信じるすべての人が、同じ道を通る。そういうことを考えさせるために、物語の中に仕込まれているからです。

つまり、「ある人にイエスとの出会いがあり、イエスを信じ始めたその人は迫害を受け、町の外に追い出されるが、イエスと再び出会い、イエスへの信仰を固めてもらう」この一連の流れは、わたしたちにも起こりうる物語だということです。神は、このわたしの人生の中にも、今週の福音朗読の登場人物と同じ「仕掛け」を、組み込んでおられるのではないのでしょうか。

たとえば、限られた地域では次のようなことがあるかもしれません。教会活動に熱心だった人が、ある時から教会に寄り付かなくなっていて、何年も姿を見せなくなるというようなことです。

教会に寄り付かなくなった原因はいろいろでしょうが、特に主任司祭と折り合いが悪くなって、教会に近づかなくなっていくことはよくあるのだと思います。本当に、この点では司祭は反省をしなければならないはずです。わたしも含め、信徒の方への対応がまずかったために、救えるはずの人を救えなかったり、信徒のやる気を失わせたりするのです。

恐らく今日が上五島での最初の説教をしている神父さまもいるでしょう。お互い、過ちを犯す可能性があること、それが、信徒に対して躓きになってしまったときに、信徒はもう教会を信頼できなくなっていていってしまうことを、肝に銘じたいと思います。

何らかの理由で歩んできた信仰が試練に遭い、教会の外に出てしまい、自分で戻ることをできないくらい教会との距離を感じてしまったとしましょう。こんな時、まずは司祭がしっかり手を打たなければなりません。司祭が、問題の原因であれば、教会の信徒も間に入ってあげるのは難しいかもしれません。

そうなったとき、その信徒はどうなるのでしょうか。イエスは、こんな厳しい場面に立たされた信徒を、探し出してくださいます。信仰の歩みを1歩ずつ歩み始めていたのに、じゃまもの扱いされたり、迷惑がられたり、熱心さがかえって妬まれたりして、教会に居場所がなくなって遠ざかってしまう。

そんな人を、イエスはもう一度探し出して、「あなたは人の子を信じるか」(9・35)と言われるのです。イエスはあなたがどこにいても、必ず探し出して、もう一度教会の家族につながとめてくださいます。

すべての人が、イエスによって信仰を種蒔かれたのだから、迫害や、試練や、信仰にむなしさを感じて一時期離れていても、最初に種蒔いてくださったイエスが、もう一度探し出して連れ帰ってくださるのです。

そうして教会家族に呼び戻されたら、恐れずに信仰を表してほしいと思います。しばらくの試練を乗り越えたあなたは、イエスに呼び戻された人なので、もはや何も恐れる必要はありません。生まれつきの障害を乗り越えた今日の登場人物のように、日々言葉と行いで「主よ、信じます」と信仰を証ししていきましょう。そのための力と恵みを、このミサの中で願いましょう。

四旬節第 5 主日 (ヨハネ 11:1-45)

人の死の場面でも、神は寄り添ってくださる

四旬節もいよいよ大詰め、来週は受難の主日を迎え、ご復活へと進んでいきます。福音朗読は、ラザロを生き返らせる場面でした。これはいわゆる「奇跡」の物語なのですが、ヨハネ福音書が取り上げている奇跡は6つあります。覚えておくためになりますので、取り上げている順に並べてみたいと思います。

まず、カナの婚礼で、水をぶどう酒に変える奇跡です。次いで、役人の息子をいやす奇跡、ベトザタの池で病人をいやす奇跡と続き、五千人に食べ物を与える奇跡があつて、先週朗読した生まれつき目の不自由な人をいやす奇跡と、今週のラザロを生き返らせる奇跡です。

人間の苦しみに無関心でいられない神は、さまざまな奇跡を通して人間に深くかかわり、神の栄光を現わします。ヨハネ福音書が取り上げた6つの奇跡は、神が人間により深くかかわる様子が順を追って描かれているように思います。

カナの婚礼で水をぶどう酒に変える場面では、マリアに「ぶどう酒がなくなりました」(2・3)と声をかけた時、「わたしとどんなかかわりがあるのですか。わたしの時はまだ来ていません」(2・4)と答えて、かかわり方はそれほど深くないように思われます。

役人の息子をいやす時にも、「あなたがたは、しるしや不思議な業を見なければ、決して信じない」(4・48)と仰るし、直接出向くことはなくてイエスの言葉を信じて帰ると、奇跡が起こって役人の息子は元気になりました。

ベトザタの池で病人をいやす時には、イエスはこの病人が三十八年間という長い間病気であることを知って、一人の人生全体にかかわろうとしています。さらに、五千人に食べ物を与える奇跡は、数え切れないほど多くの人の苦しみを放っておけない神の姿が現れました。

生まれつき目の不自由な人のいやしの場面では、いやされる人は生まれてくるときからの障害のため、本人が罪を犯したからとか、両親が罪を犯したからとか、いわれのない非難を浴びて、苦しみを抱えて生きて来たのでした。この物語では、障害に加え、いわれのない罪まで背負わされた深い悲しみに、神が寄り添う姿を現しています。

そして、今週のラザロの生き返りの場面です。周囲の人々はこんなことを言っていました。「盲人の目を開けたこの人も、ラザロが死なないようにはできなかったのか」(11・37)この言葉は、たとえイエスであっても、死という絶望を味わうような人間の場面では、寄り添うことはできないだろうという考えです。

イエスは、人間の絶望的な場面こそ、神が深くかかわることを証明します。大声で叫びました。「ラザロ、出て来なさい。」(11・43)こうして、ヨハネ福音書が書き記した6つの奇跡の場面は、限られた中でのかかわりから始まって、絶望的な場面にも、神が深くかかわるということを順を追って説明しているのです。

ヨハネ福音書が6つの奇跡で示そうとした人の苦しみに無関心でいられない神の姿は、だれのためのもののでしょうか。直接には、ヨハネが福音書を書いた当時の共同体のためだったでしょう。けれども、当時の共同体のためだけであれば、書物に書き残す必要はありません。

書物に書き残したということは、後の時代の人々に、イエスが人の苦しみに無関心でいられない神を生き生きと示しているのだと伝えたかったのではないのでしょうか。後の時代の人々、すなわち、ヨハネ福音書を読むすべての人に、神はどんなお方であることを示そうとするイエスを告げるためにも、書き残しているということです。

当然、ヨハネ福音書を読むすべての人の中には、わたしたちも含まれています。四旬節の大詰めを迎える今日、イエスはラザロの生き返りを通して、わたしたちにも「絶望的な状況にあっても、神はあなたのそばにいて寄り添ってくださる」と語りかけているのです。

イエスはラザロを生き返らせた後、ベタニヤで香油を注がれ、エルサレムで人々の歓迎を受けます。エルサレムでは、「イエスがラザロを墓から呼び出して、死者の中からよみがえらせたとき一緒にいた群衆は、その証しをしていた。」(12・17)とありますから、イエスをたたえる群衆の中には、ラザロの生き返りを目の当たりにした人々も加わっていたのでしょう。

わたしたちも、受難とご死去、ご復活につながっていくエルサレムに、イエスと共に向かいましょう。今週ラザロの生き返りから「絶望的な状況にあっても、神は寄り添ってくださる」ことを学びました。今週の学びは、わたしたちにも人々に証しする機会を与えてくれます。わたしにも、証しを立てようとしているあの人にも、神は寄り添ってくださる。そのことを、多くの人に知らせましょう。

受難の主日（枝の主日）（マタイ 27:11-54）

今は恵みの時、今は救いの日

今日、受難の主日のために、福音書が2度朗読されました。最初の朗読は、エルサレム入城記念です。イエスは、最後の日々をエルサレムで迎えるために、お入りになります。預言者の言葉が引き合いに出されています。その中で、王であるイエスは華やかな王ではなく、「柔和な方」です。

また、「荷を負うろばの子、子ろばに乗って」とあります。「荷を負う」のは、今も昔も変わらないかもしれませんが、身分のある人、王の務めではありません。王の僕が、通常であれば荷を負うはずです。荷を負う仕事は、苦しみを伴う仕事だからです。

するとイエスは、柔和な方であり、荷を負う方であり、荷を負うことで苦しむ方であるということになります。その決意のもとに、エルサレムに入られるのです。このことを踏まえて、二度目の福音朗読を考えてみましょう。

朗読はマタイが描く受難の場面です。イエスはほとんど口を開きません。弁明をしない姿は、最後まで柔和を保った姿です。十字架に貼り付けにされている姿は、荷を負う姿、苦しむメシアの姿です。わたしたちは、十字架の上から問いかけているイエスと、向き合わなければ鳴りません。イエスを取り囲む群衆がいます。彼らの態度は真っ二つに分かれています。柔和な姿、荷を負う姿、苦しむメシアの姿をしたイエスを見て、心をかたくなにする人々と、心を開き、イエスにより頼もうとする人々で

す。

イエスは問いかけています。あなたは、わたしのこのような姿を見て、心をかたくなにするのですか、心を開き、わたしにより頼もうとしますか。最後まで柔和に、荷を負い、苦しむイエスはわたしたちの救い主ですと、今まさにより頼むことができるでしょうか。

イエスに倣って、わたしたちも生活の中で柔和を保ち、進んで荷を負い、苦しみを逃げませんと、正面向いて答えることができるでしょうか。今日はそのことが問われていると思います。イエスに倣って生きますと答える人に、イエスはまことの自由、まことの解放をお与えくださいます。

聖木曜日(ヨハネ 13:1-15)

聖木曜日 (ヨハネ 13:1-15)

弟子をすべて、愛し抜かれた

今日は聖木曜日、主の晩餐を祝う日です。イエスは2つの奉仕をなさいます。食事を用意してくださることと、弟子たちの足を洗うことです。どちらも、今日の朗読の冒頭に書かれている弟子たちへの愛が、根底にあります。「イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。」(13・1)

イエスによる食事の用意は、御自分を与え尽くす愛です。食事は、パンとぶどう酒のごくありふれた食べ物を通して、イエスの御体と御血を、弟子たちに与えます。イエスはこれまでに数々の教えを与えてくださいましたが、この場面ではイエスご自身を、すべて余すところなくお与えになるのです。

そして、一人一人弟子たちの足を洗います。足を洗う仕事は、奴隷の仕事とされていましたが、その奴隷の仕事の中でも、最も低い身分の奴隷にあてがわれていた仕事なのだそうです。自分がかawaiiければ、この仕事を最も低い奴隷に代わって引き受けることは決してできません。イエスは、弟子たちを深く愛して、最も低い身分に与えられる務めを引き受けたのでした。

今日、わたしもこの出来事に倣って洗足式をいたしますが、あらためて、洗足式の心構えを考えさせられました。イエスが、最下層の奴隷の身分にまで降りていった。そこに自分も留まる。そういう覚悟を新たにして

います。

イエスの、食事を通して示された「与え尽くす愛」、弟子たちの足を洗うことで示された「愛し抜く姿」を、イエスを信じるわたしたちも受け取りましょう。わたしたちの身の回りでも、「与え尽くす愛」「愛し抜く姿」を求められている場面があるのではないのでしょうか。

今日までは相手をゆるすけれども、明日になったらもうゆるすことはできない。今日までは愛情を示すつもりがあるけれども、それももうおしまい、あすからは決して愛すつもりはない。そんな困難な場面にも、イエスは御自分の模範を示そうとします。「わたしに倣いなさい」と。

最大限努力して、世話をしてきたけれども、疲れ果ててその場を投げ出したい、その場から逃げ出したい。そんなあなたを、イエスは呼び寄せて、聖体の秘跡で養い、あなたの足を洗って困難な場面から救い出してくださいます。

ある人は、「わたしの足など、決して洗わないでください」（13・8）と言うかもしれません。「教会に行っても前に座れるような人間ではないのです」と、考えている人がいるかもしれません。

けれども、イエスは今日の夕食の席で、だれも裁いたりはしないのです。全員を愛し抜こうとしておられるのです。ですから足を洗わないでくださいと拒んでいるあなたも、イエスは愛し抜こうとしておられるのです。イエスの招きに、すべてをゆだねましょう。イエスが愛し抜いた人は、変えられていきます。イエスの愛によって変えてもらい、この世の罪な生き方に死んで、命に満ちた生き方に生まれ変わることができるように、

主に願ひましょ。う。

主の受難(ヨハネ 18:1-19:42)

聖金曜日 (ヨハネ 18:1-19:42)

十字架はすべての人にいのちをもたらす

わたしたちの救いのために、わたしたちを罪から解き放つために、イエスはこの日、死に渡されました。今年の聖金曜日は、息を引き取るときにそばにいた人々に注目して、黙想してみたいと思います。

ヨハネ福音書によれば、十字架上のイエスのそばにいてイエスの最期を見守った人々の中に、「イエスの母と母の姉妹、クロパの妻マリアとマグダラのマリアとが立っていた」(18・)とあります。また、イエスの愛する弟子が、そばにいたとあります。この、母マリアと愛する弟子が十字架のそばにいたことに、注目したいと思います。

イエスは確かに苦しんでお亡くなりになりました。そのイエスのそばに、母と愛する弟子とがいたことには意味があります。母は、子を産む苦しみとその後の喜びを現わす姿です。ですからイエスの十字架上の死は、新たないのちを産む苦しみであると、イエスのそばにいるマリアを通して現わそうとしているのです。

また、愛する弟子が母マリアのそばにいました。イエスが母マリアに、「婦人よ、ご覧なさい。あなたの子です。」(19・26)と示した通り、この愛する弟子はイエスが十字架を通して生み出した新たないのち、苦しみの後に生まれた喜びです。

こうしてイエスは、十字架上の出来事が、息絶えてすべてが消える滅びの出来事ではなく、新たないのちをもたらす、豊かさを秘めた出来事であると身をもって示したのです。

かつて見たことがあるでしょうか。死ぬことが、いのちをもたらすということを。いのちをもたらす死など、だれも説明できませんでした。それをイエスは、十字架のもとにたたずむ人々の目の前で、証明したのです。

わたしたちはこの出来事を前にして、何が必要でしょうか。それはただ、イエスがもたらすいのちを受け取る。その準備だけだと思います。イエスが十字架の上で死に、新たないのちをもたらすことを、感謝してそのまま受け取ることです。

この説教の後に、十字架の礼拝をいたします。十字架を礼拝するのは、イエスが十字架の上で死に渡されて、わたしたちにいのちをもたらしてくださったからです。ぜひ、この十字架の礼拝の時に、「わたしたちに救いのいのちを与えてくださるイエスに、感謝します。」その気持ちで十字架の前に立ちましょう。

礼拝は二人一組で行います。イエスが苦しみと死を通して与えてくださるいのちを全身で受け止めるために、きちんと動きを止めて礼拝いたしましょう。

復活徹夜祭(マタイ 28:1-10)

復活徹夜際 (マタイ 28:1-10)

イエスがわたしたちの行く手に立っておられる

皆さん主の復活、おめでとうございます。今年の聖週間を貫くテーマは、復活は死からの解放であり、神は信頼に足る解放者であるということでした。枝の主日から聖木曜日・聖金曜日・復活徹夜祭と連続して典礼にあずかった人は、そのことに気づいたでしょう。

すべてに参加できなかった人のためにも、この一週間の説教を一冊にまとめたプリントを入り口に置いてありますので、どうぞ持ち帰って、この一週間の豊かな典礼の補いにしてください。

今年の復活の喜びを黙想するために、わたしは婦人たちと復活したイエスがどのようにして出会ったかを振り返りたいと思います。マタイ福音記者は、「マグダラのマリアともう一人のマリアが、墓を見に行った」（28・1）と記しています。

婦人たちが墓で出会ったのは、主の天使でした。「その姿は稲妻のように輝き、衣は雪のように白かった。」（28・3）番兵たちが、恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになる。表現のしようのない光景だったのでしょう。

それでも、婦人たちはイエスと出会うことはありませんでした。いかに主の天使の登場が驚きであっても、婦人たちの心を満たすものではなかったのです。

けれども、主の天使の言葉は婦人たちを少しずつ動かします。お会いしたいただ一人のお方、イエスに、主の天使の言葉が導いて

いくからです。「恐れることはない。十字架につけられたイエスを捜しているのだろうが、あの方は、ここにはおられない。かねて言われていたとおり、復活なさったのだ。さあ、遺体の置いてあった場所を見なさい。それから、急いで行って弟子たちにこう告げなさい。『あの方は死者の中から復活された。そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる。』確かに、あなたがたに伝えました。」（28・5-7）

婦人たちは、「恐れながらも大いに喜び、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行った。」とあります。お会いしたいお方のところに、心も体も動き出しました。まだイエスにはお会いできていません。けれども、ガリラヤに行けば、弟子たちと一緒にイエスに会えるだろうと思って、動き出したのです。そのとき婦人たちはイエスと出会います。「すると、イエスが行く手に立っていて、『おはよう』と言われた」（28・9）ここでようやく、婦人たちは会いたいと思っていたただ一人のお方に会えたのです。

婦人たちが復活したイエスに会ったのは、どの時点だったのでしょうか。墓に出向いたときではありません。主の天使が言った「イエスは復活なさった」「弟子たちにイエスが復活したこと、ガリラヤでお目にかかれると告げなさい」という言葉を信じ、動き出した。その時点で、婦人たちは復活したイエスにお会いしたのでした。

この一連の流れは、弟子たちにも当てはまります。弟子たちも、婦人たちの言葉を信じ、ガリラヤに行くことで復活したイエスに会うことになります。続く物語でこのように書かれています。「十一人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスが指示しておかれた山に登った。そして、イエスに会い、ひれ伏した。」（28・16-17）同じことは、弟子たちだけに留まらず、わたしたちにも当てはまります。わたしたちも、四旬節を通して準備をととのえ、今復活したイエスに会いたいと願っています。わたしたちが復活したイエスに会えるとすれば、それは、わたしたちに告げられるメッセージを信じ、行動を起こしたそのときなのです。

すでにわたしたちは、一つの行動を起こしています。普段よりもさらに遅い時間に、聖堂に集まりました。聖書の朗読を5つ聞きました。神の言葉を信じて行動を起こした者にイエスは現れることも学びました。

わたしたちは行動を起こしたのですから、必ず復活したイエスに会うことができます。まずは聖体の中のイエスさまを通して、さらに、あなたの生活を支え、導く力となって、そして、イエスの言葉を信じる人々に注がれる聖霊を通して、復活のイエスは出会ってくださいます。

神の言葉を信じ、行動する人に復活したイエスは現れます。イエスの存在は恐れや不安を解放する力です。イエスを信じてこの信仰に留まって、あるときは肩身の狭い思いをしている人もいるか

もしれません。信仰だけは捨てないと頑張って、気持ちが張り詰めていた人がいるかもしれません。

そんなあなたに、復活したイエスは先回りして、必ず会ってくださいます。だれにも言えない恐れや不安を、解放する方として、今出会ってくださいます。恐れながらも大いに喜んだ婦人たちのように、今日のミサを終えて家路につくとき、喜びつつ帰りましょう。わたしたちの行く手には、必ず復活したイエスが先回りして、恐れや不安を解放するために立っておられるのです。

復活の主日（日中）（ヨハネ 20:1-9）

復活の主日（日中）（ヨハネ 20:1-9）

イエスは復活し、愛を残してくださった

あらためて、主の御復活おめでとうございます。高井旅教会の皆さんにとっては、いよいよ待ちに待った復活の喜びの日です。昨晚の復活徹夜祭でも話しましたが、イエスの死と復活は人間に解放を告げるというのが今年の説教の主眼点ですが、今日の福音朗読にもそのことは表われています。

マグダラのマリアが墓に行きました。「朝早く、まだ暗いうちに」（20・1）とありますが、「暗闇」は、実際の時間帯と同時に、マグダラのマリアの心の状態も表していると思います。彼女は、イエスが十字架の上で亡くなったことで、恐れにとらえられていたのです。墓から石が取りのけてありましたが、それを遠くから眺めるだけで、近づく勇氣は持てなかったのでしょう。すぐに弟子たちのもとへ報告に戻ります。

シモン・ペトロと、イエスが愛しておられたもう一人の弟子は、マリアの知らせにすぐに応じて墓へ急ぎました。身をかがめて中をのぞき、亜麻布が置いてあるのを見つけました。それでも、もう一人の弟子は墓に入ろうとはしませんでした。墓に入ることが怖かったのではないのでしょうか。墓に入り、遺体を確認すれば、あらためてイエスが死んでもういないのだと打ちのめされることになります。また、墓に入る様子を他人に知られたら、自分たちの身も危険にさらされると考えたかもしれません。シモン・ペトロは恐れを振り払って、墓の中に入りました。「墓に入り、亜麻布が置いてあるのを見た。イエスの頭を包んでいた覆いは、亜

麻布と同じ所には置いてなく、離れた所に丸めてあった。」（20・6-7）となっています。

この場面について、つい先日、長崎で貴重な写真展と講演を聞くことができました。イタリアのトリノには、「聖骸布」というものが存在します。この布は、イエスのご遺体を包んだ布だと考えられています。この布について 50 年以上研究しているサレジオ会のコンプリ神父さまが、長崎で聖骸布を撮影した写真の展示と講演会をしておられたのです。18 日（月）に、参加しました。

この聖骸布が、確かにイエスのご遺体を包んだ布であると、だれも証明することはできませんが、たくさんのデータがこの布から出ているそうです。背中の部分には 100 発以上の鞭打ちの跡が残っていますし、手首と足首に釘跡が残っています。また、膝や、鼻の部分に、倒れて付着したと思われる土が発見されていますが、この土はエルサレムの土と成分が同じなのだそうです。いろんなデータがあって、大いに興味をかき立てました。

その中で、最も興味を引いたのは、アメリカの N A S A がある時期調査をして、この聖骸布から立体的な輪郭を描き出したという研究です。もしも、人間の遺体を包んだ布が、遺体が腐敗したあとも包んでいたとすれば、布に残された痕跡から、立体的な輪郭は描けなかっただろうと思ったのです。腐敗する前の状態を包んで、その痕跡が残ったので、聖骸布から立体的な姿を描くことができたのだろうなあと思いました。

コンプリ神父さまは、日本語の新共同訳聖書が、この場面での大切な言葉をうまく訳しきれていないと残念がっていました。「亜麻布が置いてあるのを見た」（20・6）となっているのですが、もとの言葉は「横たえる」という意味があるそうです。亜麻布が置いてあるだけでは、遺体を誰かが盗みに来て、亜麻布はそこに置いて帰ることも可能でしょう。

けれども、横たえられていたというのは、第三者が意図的にできるものではないのです。その場を動かさず、横たえた状態のままであった。その点が、墓に入って確かめた弟子たちに、イエスの復活を感じさせたのではないのでしょうか。

布についての興味深い話も含めて、シモン・ペトロとヨハネが思い切って墓の中に入った時、彼らはイエスの復活を信じることができました。恐れのために、墓を遠くからしか眺めなかったマグダラのマリア。墓をのぞいてみたけれども、中には入らなかった弟子。恐れにとらえられていた人間が、ありのままの墓の中を見た時に恐れから解放されたのです。

恐れを解き放ったのは、そこに残された亜麻布でしょうか。そうではないと思います。亜麻布が横たえられていた、その状態で残してくださった方が布の向こうにおられるのです。横たえられていた亜麻布を通して、弟子たちの心を解き放ち、本来思い出すべきこと、イエスが亡くなられる前に残してくださった言葉に導いてくださったのです。

弟子たちは、イエスの復活に気付き、恐れから解放されたときに何を思ったのでしょうか。わたしは、聖木曜日のことを思ったのではないかと考えました。つまり、「イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。」（13・1）この場面です。

イエスは、復活なさって、自分たちをこの上なく愛し抜かれたことを証明してくださった。十字架上の死は、自分たちを見捨てたのではなく、この上なく愛しておられた証しだった。弟子たちはイエスの深い愛を、思い出していたのではないのでしょうか。

もしそうであるなら、わたしたちもイエスの復活を喜びながら、わたしたちを愛し抜かれたことを思い出す必要があります。イエスの復活は、弟子たちにも、わたしたちにも、名誉も権力も財産も何も残しませんでした。ただ一つ残してくださったのは、罪から逃れられないわたしたち一人一人を、この上なく愛し抜かれた、その愛です。

イエスはその復活によって、わたしたちも解放します。イエスの愛を、あなたを愛し抜いたその愛を、人々に知らせに行きなさい。見捨てられている人、孤独にある人、ちょっと周りの人から外れている人。だれにでも、イエスが愛してくださったことを知らせに行く。イエスはわたしたちの心を解き放って、証しを立てる人へと変えようとしています。

神のいつくしみの主日（ヨハネ 20:19-31）

神のいつくしみの主日 (ヨハネ 20:19-31)

神のいつくしみはわたしたちを離れない

復活節第2主日が故ヨハネ・パウロ2世の意向で「神のいつくしみの主日」と呼ばれるようになったのも、ずいぶん馴染んできたと感じています。今年は、福音朗読からは逸れてしまいましたが、まず急死したヨゼフ松永正勝神父さまのことを追悼して、最後に福音に戻りたいと思います。わたしは松永神父さまに借りがありました。1999年に故島本大司教さまがイスラエル聖地に青年たちを30人連れて行く第1回巡礼が実施されました。各地区から青年が選ばれ、地区の司祭も青年に同行することになり、わたしは佐世保地区の同行司祭として巡礼に参加しました。

当時わたしは太田尾小教区だったのですが、日曜日をまたいでの巡礼だったので、どうしても日曜日のミサを誰かにお願いしなければなりません。それで、対岸の出津小教区の助任司祭だった松永神父さまに、よろしく頼むと、お願いして出発したのです。

ミサの借りは、ミサでしか返すことはできないと思っています。けれども、わたしが松永神父さまの代わりにミサのお手伝いに行くことはとうとうかないませんでした。その代わりに、松永神父さまの通夜のあと、司祭たちが徹夜でミサをささげる中で、夜中の3時半からの時間を申し込み、松永神父さまのために通夜の会場である浦上教会信徒会館で、ご遺体のそばでミサをささげました。

わたしにとって、その時のミサは借りを返すためのミサでした。けれども、こんな形で借りを返すのはつらいと感じました。こんな形で、借りは返したくなかった。そう思いました。

彼は、御復活の日曜日を終えて、月曜日に亡くなりました。年間の典礼行事の頂点である聖週間、その中の聖なる三日間という大きな務めを果たしてから眠りについたこと、それは、せめてもの慰めになります。ここに、神のいつくしみを見ることもできると思います。

ただ、どうしても飲み込めない思いがあるのです。なぜ、40歳にもならない松永神父さまを神さまはみもとに召されたのだろうか。通夜の会場で、とても亡くなったとは思えない彼の姿を見て、納得できないわけです。息をひそめているだけじゃないのだろうか。間違いじゃないだろうか。考えても考えても、納得できるだけの材料は見つかりませんでした。通夜が終わったのが夜8時で、夜中3時半のミサまで時間がありましたので、何か彼のために話してあげようと考えました。彼は何を残してくれたのだろうか。彼は司祭職のどんな面を、わたしたちに教えてくれるだろうか。あれこれ考えて、布団をかぶったものの、眠れませんでした。しばらく考えているうちに、先週の説教のことを思い出したのです。先週わたしは、たまたま自分が出席した聖骸布の展示会と講演会に触れました。聖骸布とは、イエスの姿を写し取った布だと言われているわけですが、わたしはそこで思い付いたのです。司祭は、ある意味で、聖骸布なのではないかと。

叙階の秘跡で確かに司祭となった方々は、イエス・キリストを写し取っ

ているのではないのでしょうか。もちろん完全に写し取っているとは言えません。完全に写し取っているなら、その人はイエス・キリストですが、そういうことではありません。不完全ながらも、イエス・キリストを写し取っている。そう考えると、司祭は聖骸布であると言ってもよいと思うのです。

司祭は欠点があり、理解が不足している部分があり、過ちも犯します。ですからイエス・キリストを写し取っているとは言っても、それは一部分かもしれません。

それでも、イエス・キリストにしかできないわざ、パンとぶどう酒をイエス・キリストの御体と御血に変化させることとか、罪をゆるすこととか、他のだれにもできない部分を写し取っています。棺の中に横たえられている松永神父さまを見て、彼は、イエス・キリストを写し取った聖骸布なんだと、確信しました。

だから、司祭としての年数がたとえ短かったとしても、イエス・キリストを写し取ったことに変わりはない。横たわっているその姿から、時間で測れない素晴らしい部分を持っていることを、あらためて教えられました。

神さまは、わたしたちには分からない計画の中で、松永神父さまを呼び戻しましたが、聖なる三日間を無事に果たさせてくださったこと、司祭はその存在が聖骸布のようなものだということ、この2つはわたしたちに模範として残してくださいました。それは、神のいつくしみの成せる業だったと思います。

最後に、福音朗読の中から、一つの点を示して結びたいと思います。イエスは、弟子たちが戸に鍵をかけて家に閉じこもっているとき、現れてくださいました。さらに、最初はトマスがいなかったので、あらためてトマスも一緒にいるときに、やはり戸に鍵をかけている家の中に現れてくださいました。

どのように現れたかに注意しましょう。弟子たちの真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われたのでした。弟子たちはほかのすべての人を恐れ、心の面で外部と一切関係を断ち切っていたわけです。心の中心を失い、何も頼るものがない状態になっていました。

そこへ、イエスが来て真ん中に立ったのです。中心を失い、閉じこもっていた弟子たちに、「わたしが、あなたがたの中心にいるよ」と、態度で示してくださいました。これは、神のいつくしみを示す一つの態度ではないのでしょうか。

わたしたちにも、同じ呼びかけをイエスはしていると思います。長崎教区司祭も、本当に若い司祭を失って、神さまの計画はどこにあるのだろうか、肩を落としてしまいます。そんなとき、イエスはわたしたちの真ん中に立って、「あなたたちの中心は、わたしだ。心配しないで」と、声をかけてくださるのです。

神のいつくしみは決してわたしたちから離れない。どんなにつらいことがあっても、神はわたしたちを見捨てたりしない。もう一度信頼の心を呼び起こして、歩みを進めたいと思いました。

復活節第 3 主日 (ルカ 24:13-35)

イエスはパンを割いて、御自身を現してくださる

(導入・・・「千の風になって」を一部分歌う)

気持ちよく歌わせていただきました。一時期、本当に流行りました。ただ、わたしにはちょっと違和感があります。「そこにわたしはいません。眠ってなんかいません」と言われても、そこに骨はあるし、眠っているじゃないかと返したい思いがあります。

ある亡くなった方の納骨式で、遺族の方からこの歌を歌わせてほしいと言われたことがあります。止めはしませんでした。わたしは一緒に歌う気持ちになれませんでした。たった今納骨したお骨がそこにあるのに、「そこにわたしはいません」と言えなかったからです。もちろん、歌いたい気持ちは分かります。でも、「死んでなんかいません」と歌うのは、死んだ人に対してどうなんだろうと思ったことは確かです。

ただ、今日は歌いました。イエスに限っては、この歌は見事に当てはまると思ったからです。イエスのお墓の前で婦人たちは泣いていました。「泣かないでください。そこにわたしはいません」イエスに限っては、これはそのまま当てはまるのです。今週の福音朗読で登場する二人の弟子。彼らも墓に心を残していた人々でした。「天使たちが現れ、『イエスは生きておられる』と告げた」(24・23) この意味が理解できないでいました。彼らはエリコに向かって行くあいだ、「イエスは生きておられるとはどういうことだろうか」とあれこれ考え込んでいたのかもしれませんが。そこへ、イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められました。復活したイエスが二人になさったことが2つあります。1つは、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを解き明かしてくださったということ。もう1つは、パンを割いてお渡しになったということです。

この2つの働きを通して、エマオに向かっていた二人の弟子は、一緒におられる方がイエスだと分かりました。そして、婦人たちが天使に告げられた「イエスは生きておられる」その意味が理解できたのです。

二人は、墓に心を残してきたことが間違いであったとようやく理解できました。イエスは生きておられるからです。「道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」(24・32) イエスが生きておられるのでなければ、どうして心が燃えたりするのでしょうか。イエスが墓に眠ったままで、どうしてパンを割いたときにイエスだと分かるのでしょうか。

彼らは急いでエルサレムに戻ります。六十スタディオンも離れていたのに、距離を感じないほどに興奮していたのかもしれませんが。そこではすでに、「十一人とその仲間が集まって、本当に主は復活して、シモンに現れたと言っていた」(24・33-34)とあり、十一人の弟子たちも声を弾ませていたのです。

もう一度確認します。「イエスは生きておられる。」このことに二人の弟子が気付いたのは、「聖書を説明してくださったとき」また「パンを裂いてくださったとき」でした。実はわたしたちも、「イエスは生きておられる」と証しするためには、2つの経験が必要です。1つは、「聖書を説明してもらうこと」1つは「パンを割き与えていただくこと」です。

「パンを割き与えていただくこと」は、毎週確実に実行しています。では、「聖書

を説明してもらふこと」はどうでしょうか。そこで、今年の聖書愛読マラソンに先駆けて、浜串教会と福見教会は5月の残りの期間と10月の朝ミサの前に、高井旅教会は6月と9月の前晩のミサの前に、浜串小教区の「聖書に耳を傾ける集い」を行い、聖書を通して、「イエスは生きている」という体験を持ちたいと思います。

浜串教会と福見教会のために5月と10月を選んだのは、聖母月とロザリオの月で、必ず夕方にロザリオをします。ですから、朝の時間は必ずしもロザリオでなくてもよいと考えました。高井旅教会は、一日のうちに2回ロザリオをする機会がないので、月をずらしました。

取り組み方は、次のようになります。まず、お世話する人を選びます。お世話する人が、20分ほどの聖書朗読を録音したCDを流します。参加者は、録音CDの朗読に合わせて、聖書のページを追っていくというものです。これまで、2つの小教区で取り組んできまして、一定の効果が上がっていますので、こちらの小教区でも実行したいと思っています。

もう一度、念を押しますが、わたしたちが信仰を確実に保つためには、「イエスは生きている」という実感が必要です。生活を支え、導いておられるイエスが、今も生きている。だから、わたしはこの信仰を続けることができる。この確信がなければ、信仰を保ち続けることは無理です。

昔起こった出来事をいつまでも大切に守る。それは、今この時代に、意味のあるものでなければならぬのです。昔は意味があったけれども、今は何の意味もないものを、守り伝えることはできないのです。

当然、みなさんにも多少の苦勞をかけるかもしれません。ですからわたしも、今まで以上に苦勞したいと思います。1つは、早起きすること、1つは、録音聖書を途切れずに準備することです。皆さんは、録音聖書CDをプレーヤーに入れて、再生させるだけでこの活動に参加できます。

イエスは生きている。生活の中で一人一人がこの信仰を証しできるように、それぞれの分に応じて御言葉に触れ、照らし・導きを受けたいと思っています。

千の風になって

私のお墓の前で 泣かないでください	千の風に
そこに私はいません 眠ってなんかいません	千の風になって
千の風に	あの大きな空を
千の風になって	吹きわたっています
あの大きな空を	
吹きわたっています	千の風に
	千の風になって
秋には光になって 畑にふりそそぐ	あの大きな空を
冬はダイヤのように きらめく雪になる	吹きわたっています
朝は鳥になって あなたを目覚めさせる	
夜は星になって あなたを見守る	あの大きな空を
	吹きわたっています
私のお墓の前で 泣かないでください	
そこに私はいません 死んでなんかいません	

復活節第 4 主日 (ヨハネ 10:1-10)

御言葉を浴びるほど聞く

船舶免許が 6 月で期限切れになるため、先週 5 月 8 日に更新講習を受けに上五島備蓄記念会館に行きました。知らない人ばかりだとどうしようと思っていましたが、浜串のお父さんとか、高井旅のお父さんとかも一緒に来ていて、ちょっと安心しました。

講習を受ける前に、身体検査をすると聞かされていたのですが、実際には片目ずつ視力検査をするだけでした。こんな簡単な検査で、講習の時間黙って座っていれば、今後 5 年間の免許が与えられるというのは、ちょっと簡単すぎないかなあと思ったりしました。

自動車の免許は、70 歳を過ぎると特別な講習を受け、お年寄りであることを表すステッカーを貼り、いろいろ嫌な思いをしなければなりません。それに比べて船の免許は楽なものでした。けれどもそれもまた決まり事でしょうから、それを通して初めて、安心して船に乗ることができるようになります。

ただ、新しい免許が届くまで、5 日間は免許なしの状態になりますというのは納得いきませんでした。それはわたしたちのせいではなく、あなたたちの不手際でしょうと食ってかかりたい気分でした。改善してほしいと思いました。気分は良くありませんが、これも通らなければならない門なのでしょう。ちなみに、土曜日になっても免許証届いていません。今日の福音書には、羊飼いに導かれて、門を出入りする羊の姿が描かれています。まずは、決められた人の案内で、決められた門を出入りすることが、求められているわけです。聖書朗読に耳を傾け、「今もわたしたちを照らし、導くイエスが生きておられる」という体験を積もうと呼びかけました。今のところ、いろいろな都合で浜串教会しか実施できていません。残る 2 つの教会は、6 月と 9 月、ミサの前に取り組む予定です。

さて、このイエスが導いてくださる羊の門を出入りする姿は、御言葉に導かれて日々の生活を送ることに通じると 생각합니다。羊は羊飼いの声を聞き分けます。わたしたちも、御言葉に十分親しむことで、羊飼いであるイエスの声を聞き分ける者となります。

羊飼いの声を十分知るようになると、わたしたちを呼び出すイエスの声には従い、ほかの声には決してついていけないように訓練されていきます。いろんな声に振り回されて、歩むべき道を見失うのではなく、どんな生き方の中でも、ただ 1 人の羊飼いであるイエスの声だけに、本当の導きを願う人に育っていくのです。そのためにも、「聖書朗読に耳を傾ける集い」に、たくさんの方が参加してくださることを願います。

「羊はその声を聞き分ける」ということで思い出したことがあります。皆さんは、「頭では分かっているけれども」とか、反対に「体が覚えていた」とか言うことがあると思います。わたしが以前助任司祭だった時、結婚した夫婦を通して、印象深い経験をしたことがあります。ご両親は当時教会の評議会で大きな働きをしていた方でしたが、この方の娘さん

が結婚することになり、結婚講座が始まりました。

結婚相手はカトリック信者ではありませんでしたので、教会での結婚を結ぶためには、書類を調える必要がありました。カトリック信者の側が、カトリックの信仰を忠実に守り続けることと、生まれてくるすべての子供が、カトリック教会で洗礼を受け、信仰教育されるように最善の努力をすることです。

このときに問題が起きました。カトリック信者である娘さんのほうが、「わたしは子供に洗礼を授ける気持ちはそれほどない」と言うのです。さらに結婚相手である男性も、「男の子が生まれたら、洗礼を授けるのは困る」と言いだしました。

カトリック信者でない男性側が、条件に納得できないと言う場面はよく聞きます。けれども、その男性に同調して、カトリック信者の女性まで、子どもに洗礼を授けるのに気乗りしないと言うのです。これには困りました。あれこれ説明して、不承不承同意したような感じで、結婚式をしたのを覚えています。

ところが、結婚後に事態は急展開します。子供を授かり、予想通り洗礼のことで揉めているという話が聞こえてきました。やっぱりか、と思ったのですが、よく話を聞くと、お母さんになった女性が、洗礼を授けると言っても聞かないのだと言うのです。これには驚きました。

「体が覚えていることがある」と、先に話しましたが、これはまさに、「体に染み込んだイエスの声に、体が覚えていたイエスの声だけに、聞き従った」ということではないでしょうか。こんな、予想外の話は、いつでも歓迎したいですね。

「体が覚えている」というような体験は、どんな時に起こるのでしょうか。それは、やはり数え切れないほど繰り返し覚えたという経験からではないでしょうか。祈りにしてもそうですし、ミサの流れについてもそうです。そのような、「体が覚えている」と言えるほど、聖書の御言葉をたくさん聞く機会を、わたしたちはどこかで持つ必要があるのではないのでしょうか。

聖書を持ち歩いて、真のイエスの声を語らず、異なるイエスの声を語り聞かせる人たちもいます。わたしたちは、ちゃんと見分けることができるのでしょうか。ちゃんと聞きわけることができるのでしょうか。

どうぞ、今回の「聖書朗読に耳を傾ける集い」を、神の言葉を浴びるほど聞くきっかけにしてください。朗読 CD は、それぞれの教会に備品として残したいと思います。そうすることで、何人かの集まりで教会に来て、都合のいい時間にいつでも、いくらでも聞き続けることができます。最初のきっかけを用意しますので、ぜひ自分たちで活用してもらえたらと思います。

イエスは、「わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。」（10・10）と言います。御言葉をたくさん味わうことで、豊かな命をはぐくむことができるように、御言葉の力により頼むことにいたしましょう。

復活節第 5 主日 (ヨハネ 14:1-12)

イエスは御父に人々を導く確かな道

今日、聖母行列をしてからの主日のミサでした。わたしは、行列をしながら、自分たちがどこに向かっているのかを考えながら行進していました。岬のマリアから出発して、わたしたちはどこへ向かったのでしょうか。もちろんそれは、教会のほうに向かったのです。

もっと、意味を汲み取って言うと、わたしたちはマリアから出発して、イエスに向かったのです。さらに踏み込んで言うならば、マリアから出発してイエスに向かい、父である神のもとにたどり着く道のりを歩いたのです。

今日の福音朗読で、イエスはわたしたちのこの歩みを見事に言い表しています。「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない。」 (14・6)

聖母行列を、たんなる行列で終わらせてはもったいないことです。聖母はいつも、御子イエス・キリストを指し示す方です。この聖母月に、熱心に聖母に祈りをささげ、取り次ぎを願って来たのは、イエスに願いをかなえてもらうためです。マリアはわたしたちの祈りを確実に取り次ぐ方としておられるのです。

今日はさらに、岬のマリア像まで 700～800 メートル、そこから折り返してきたので約 1.5 キロ、行列のために歩きました。十分に祈りをささげました。この歩いた道が、イエスを知り、愛する道につながるのです。マリアを通して願ったので、わたしたちは真理といのちをイエスからいただきます。

ここであらためて、かつてマリアが歩いた道について考えてみましょう。マリアはヨセフとともに、人口登録のためにベツレヘムに向かいました。そこでマリアは月が満ちて男の子を産みます。マリアは、旅先でイエスに出会ったのです。

マリアとヨセフは、幼子を神殿に奉獻に行きます。ここでマリアは、幼子がだれも予想できないような運命をたどることをシメオンとアンナ、両預言者によって知らされました。神殿に奉獻に行ったことで、自分たちの知らないイエスに出会ったのです。

また、ユダヤ人は過越祭に必ずエルサレムに旅をしていました。その旅の中で両親はイエスを見失い、三日をかけて神殿にいるイエスを見つけます。ここでイエスは、「わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか。」と言いました。父なる神の子であると、はっきり話すイエスに出会います。他にも、カナでの婚礼の場面、イエスの十字架上での場面など、どれもマリアが歩いた先に、イエスがそこにおられたのです。

聖母行列から、今週の福音朗読を振り返ることは良いアイディアだと思います。マリアが、イエスを指し示しているように、イエスは、御父に至る確かな道です。イエスに倣ってこの人生を歩むなら、住む所がたくさんあり、わたしたちを喜んで迎えてくださる御父のもとに、確実にた

どり着きます。

この道を一步一步確かに歩いて、御父のもとで、イエスと共にいることができます。わたしたちが家にたどりついたときほっとするように、どんなに贅沢な場所でも得られない、どんなに珍しい場所でも得られない、そんな安らぎの場にたどり着く道、それがイエス・キリストなのです。もうしばらく、聖母月の日々が続きます。この期間に、マリアを通してイエスにたどり着く知恵を学びましょう。そしてイエスが、わたしたちの御父に出会わせる確かな道であり、イエスの中に真理があり、豊かな命があることに気づくことができるように、このミサの中で続けて祈ることにいたしましょう。

復活節第 6 主日 (ヨハネ 14:15-21)

復活節第 6 主日 (ヨハネ 14:15-21)

わたしたちをみなしごにはせず、弁護者を遣わす

今週の福音朗読で、「わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない。」(14・18)というイエスの御言葉に注目してみました。弟子たちは、イエスがこの世を去って御父のもとへ行くことに不安を覚えていました。先週の福音朗読で、トマスは自らの不安を打ち明けます。「主よ、どこへ行かれるのか、わたしたちには分かりません。どうして、その道を知ることができるのでしょうか。」(14・5)

ですから、今の段階では、「わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない。」と言われても、なかなか「分かりました」とは言えない状況でした。わたしたちも、何か重なりあう体験がなければ、同じく信頼するのは難しいでしょう。「わたしたちをみなしごにはしておかない」そういう体験をどこかでしているのでしょうか。

わたしは一度、「決して一人にはしておかない」という強烈な体験をしました。知らない土地で迷ってしまい、大変迷惑をかけた末に見つけてもらったことがあります。それは高校を卒業した直後に自動車免許を取りに行った春休みのことです。

わたしは縁あって、佐世保の自動車学校で免許を取りました。わたしの父も教習を受けた先生のいる学校で、1ヶ月間佐世保の親戚の家に下宿して、自動車学校に通い、免許を取ることになったのです。

親戚の家から自動車学校までは結構な距離があって、自動車学校が出している送迎バスに乘せられて学校に行きました。初日、入校式などいろんな手続きを受け、6時頃に送迎バスに乗って6時半に朝乗せられた場所で降ろしてもらいました。

この日は2月の中旬で、6時半と言えばもうすっかり暗くなっている時間です。わたしは降ろしてもらった場所から歩き出しましたが、初めての夜道で道が分からなくなり、10分くらい歩いては降ろしてもらったバス停に戻り、また別の方向に10分歩いてはバス停に戻りといったことを何度も繰り返したのです。

そのうちに完全に迷ってしまい、どうにもならなくなって思い付いたたった一つのことは、「自動車学校に戻ってみるかなあ」ということでした。今になって考えると、近くの公衆電話から五島の実家に電話をかけて、親戚の家の電話番号を聞き出し、迷子になりましたと電話をかければ済んだことなのですが、子供だったわたしはそこまで頭が回らなかったのです。

3時間ほど歩き続けたでしょうか。夜の12時過ぎた頃に下宿させてもらうおじさん夫婦が車でわたしを見つけてくれて、すぐに車に乗せて連れ帰ってもらいました。「寒かったやろう」と心配してくれて、その日のことは何も咎められることはありませんでした。結局学校を卒業して免許を取るまで、けっしてあの時のことを責められたりはしませんでした。

どれだけ探しただろうかと、今になれば痛いほどよくわかります。けれ

ども当時は、迷子になり、一人ぼっちになった不安で、頭の中は真っ白になっていました。保護者の代わりをしてくださるおじさん夫婦にしてみれば、行方不明になるなど決してあってはならないことです。どんなことがあっても探し出さなければと、何度も何度も通学路を探したのではないのでしょうか。

きっと、わたしが誰かを預かったとしても、もしその子が司祭館に帰着かなかったら、どんなことをしても探し回ると思います。決してみなしごにはしておかない、そう思うと思います。こうした気持ちは、みなさんにもよく理解していただけるでしょう。

イエスは同じように、弟子たちに呼びかけました。「わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない。」この御言葉に、弟子たちが全面的に信頼を寄せるなら、「父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてくださる。」(14・16)という約束も信頼して待つことができると思います。

わたしは、「あなたがたをみなしごにはしておかない」という御言葉を、十分信頼できます。かつて自分が途方もない時間をかけて探してもらった経験と、今だったらわたしも同じことをするだろうということを重ねると、イエスは必ず約束を果たしてくださると信じることができます。イエスは、弁護者を遣わすという形で約束を果たして下さいます。弟子たちは、弁護者、真理の霊である聖霊をまだ実感していません。イエスの約束を確信するには、聖霊降臨を待たなければなりません。わたしたちも、聖霊降臨の祭日を、期待をもって待ち望みますが、わたしは今でも、弁護者、真理の霊を実感できるのではないかと考えています。

例を挙げておきましょう。先週の浜串での聖母行列、本当にこの日だけ天気に恵まれて、無事に外での行列を果たすことができました。わたしは、何人もの人から、「神さまはいるんだなあと感じた」と言っているのを聞きました。ふだんの生活で、神さまを心から感じる事ができた時、その人には弁護者、真理の霊である聖霊が働いているのではないのでしょうか。

生活の中で感じる「神さまはいるんだなあ」という感覚を大切にしましょう。それは、イエスがあなたがたをみなしごにはしておかないしるしです。そして、弁護者、真理の霊を遣わして、いつまでも一緒にいるようにしてくださる証しでもあります。

主の昇天(マタイ 28:16-20)

主の昇天(マタイ 28:16-20)

疑う弟子たちに近寄って力強い言葉をかける

今日は、「主の昇天」の祭日です。土曜日に、太田尾小教区の信徒の方 24 人が浜串教会を訪問してくれました。太田尾小教区は、この前亡くなった松永正勝神父さまがおられた教会で、わたし自身も初めて主任司祭に任命された小教区です。24 人の巡礼団の方々は、松永神父さまのおられた土井ノ浦教会などを訪ねて、その足跡をたどり、祈るためにやって来たのだと思います。その中で、かつて赴任していたわたしのところにも、表敬訪問してくれたのだらうと想像しています。太田尾小教区巡礼団の訪問を受けて、わたしは別のことを思い出しました。そう言えば、太田尾小教区ではご昇天の祭日に決まって山登りをして、山の上でミサをして、遠足を楽しんでいたなあということです。今年、その楽しい思い出を巡礼団が来てくれたことで思い出しました。

では福音朗読に入りましょう。弟子たちはガリラヤで指示されていた山に登り、イエスに会い、ひれ伏しました。ところがそこに、マタイはもう 1 つのことを書き加えました。「しかし、疑う者もいた。」(28・17) というのです。

この「疑う者もいた」という書き込みは、非常に気になります。というのは、弟子たちにとって、またこの福音書を読み、聞く人々にとって、もっと言うと後世のすべての人々にとって、都合の悪い出来事だからです。復活したイエスと出会っているのに、みながみな心からイエスを信じ切れていないというのですから、場合によってはその事実を伏せておけばよかったはずです。

マタイはなぜ、この「疑う者もいた」ということを書き残したのでしょうか。この点から今週は出発したいと思います。ここで、「疑う」と日本語に訳された言葉は、もとの意味をたどると「2つの方向に歩む。人の中に2つの思いがあり、分裂した状態」を表すのだそうです。

同じ「疑う」場面は、湖で嵐に遭遇した時にも体験しました。弟子たちが舟を漕ぎ悩んでいるときにイエスが湖の上を歩いてこられ、ペトロに「来なさい」と言います。ペトロは湖の上を歩き始めますが、波に気付いて恐ろしくなり、助けを求めました。イエスの「来なさい」という言葉を信じたいのだけれども、現実には振り回されて心が2つに分かれている。この状態を「疑う」と表現しています。心が2つに分かれ、信じたいけれども信じきれない。こういう状態が「疑う」という意味でしたら、それは、信仰に至るきっかけとなり得ます。信じたいけれども心を邪魔するものがあって、神にまっすぐに心を向けることができない。これは誰にでも起こりうることですし、何か力をいただければ、迷いを断ち切って一心に神に助けを願う人に生まれ変わることができるわけです。

実は今日の出来事に、そのヒントがあります。「疑う者もいた」その弟子たちに、イエスは何をなさったのでしょうか。イエスは近寄って来て、言葉をかけました。

「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にきなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは

世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」（28・18-20）

わたしはこの場面で、プロ野球の試合を重ねて考えました。ピッチャーが打者に連続して打ち込まれたり、フォアボールを立て続けに出したりするとき、よく監督が飛んで行って、何か一言二言声をかけると、そのピッチャーが立ち直ってピンチを切り抜けるということがあります。

これはまさしく、近寄って来て言葉をかける場面です。監督が何を言うのか知りませんが、技術云々ではなく、きっと「お前に任せただから、お前を信じているぞ」そういった力強い一言ではないでしょうか。

イエスも、近寄って来て声をかけ、なかなか信じ切れない弟子たちを力づけるのです。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている」「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」ともすれば自分の学んだ知識や経験に頼りがちな弟子たちを、イエスに全面的に信頼するように、御言葉が導いていくのです。

しかしながら、弟子たちも人間です。イエスの言葉を聞いて決して右にも左にもそれない人物にすぐに生まれ変わったのかと言うと、そうではないと思います。それはご昇天をお祝いしているわたしたちも同じことです。イエスの言葉は力強いのですが、わたしたちはそれを聞いてもなお、十分信じきれないという過ちを犯したり御言葉への信頼を忘れたりするわけです。

心が2つに割れることなく、真にイエスを信じて歩めるようになるためには、わたしたちは失敗も犯し、もう神に頼る以外に道はないというところまで追い込まれる必要があるのかもしれませんが。プロ野球のたとえを話しましたが、追いつめられてからの監督の一言は、何にもまして効果がある、これに似ています。

では最後に、弟子たちはご昇天の時に最後にガリラヤの指示された山でイエスにお会いして御言葉に力を得たのですが、現代のわたしたちはどこに行けば同じような体験を積むことができるのでしょうか。

わたしは、現代におけるイエスが指示された場所は「教会」だと思います。復活して昇天なさるイエスが、近づいて声をかける場所は、教会ではないでしょうか。弟子たちはガリラヤの指示された山ですべての民を弟子にするように、また洗礼を授け、掟を守るように教えることを命じられました。

イエスはわたしたちにも、教会で必要な命令を授けてくださいます。それは、「神を愛し、隣人を自分のように愛する」という新しい掟を自分自身が生きて、またそれを守るように人々に教えることです。この新しい掟を守るならば、その生き方を見た人が信仰に入り、洗礼を受け、弟子となるでしょう。わたしたちも弟子たちと同じように、イエスの言葉に力づけられた宣教者となるのです。

もちろん、すぐにわたしたちが完成されるわけではありません。失敗もするし、挫折することもあります。それでも、繰り返し現代の指示された山である教会に来ることで、「わたしは天と地の一切の権能を授かっている」「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」という御言葉に力づけられ、実を結ぶことができるのです。繰り返し、現代の指示された場所である教会に足を運び、宣教するための土台を固めていただくことにいたしましょう。

□聖霊降臨(ヨハネ 20:19-23)

聖霊降臨の主日 (ヨハネ 20:19-23)

聖霊が注がれ、神のいのちを思い起こす

雨になりました。聖霊降臨は恵みの雨が降ると聞いたことがあります。雨を必要としている人もいます。もちろんすべてではないでしょうが、聖霊の望むままに、雨を通して恵みが注がれると考えたいです。黙想会を終えて帰ってきました。説教師は、函館トラピスト修道院の高橋重幸神父さまでした。聖書の日本語訳にも関わっている神父さまから、深い学びを分かち合ってもらいました。ただ話はなかなか聞いてすぐわかるものではなかったもので、かなり忍耐を要求されました。何度か居眠りし、ノートパソコンでメモを取っていたのですが、何ページもスペースキーで空白を入れている時間もありました。

学識のある人は、話がそれた時の余談も気が利いています。学びの足りないわたしなどは、説教師の余談がむしろ興味深く聞くことができました。いくつかありますが、その中で唸らされた話があります。

多くの人の前で話をする時、次のことをわきまえておきなさいと言われました。集まった会衆のうち、話を聞いているのが半分、話を聞いている人のうち、注意して話を聞いている人がその半分、注意して話を聞いている人のうち、理解できる人がさらにその半分、話を理解できる人のうち、なるほどと同意してくれる人がその半分。

なるほどと言ってくれる人のうち、話を覚えて帰るのはまたその半分。最終的に、ミサが終わって話を覚えて帰る人はミサに参加した人の32分の1だけだそうです。これには司祭一同思い知らされました。高橋神父さまの説教をわたし自身今年の糧にしながら、司祭としての働きに活かしていきたいと思います。

さて、今年の聖霊降臨の学びとして、「いのち」を切り口にして考えてみたいと思います。大きな試練を経験した方々、たとえば大震災を経験した方々は、何もかも失ってしまった中で、「いのち」だけはとりとめた、「いのち」が助かったから、またやり直すことができる。そういう難しい場面に立たされたのだと思います。

ここで「いのち」と言ったのは、体のいのちもありますが、神から与えられた永遠のいのちを考えることがより大切だと思います。体のいのちは、残念ながら無くしてしまった人々もたくさんおられます。それでも、すべての人は、神から与えられた永遠のいのちを失うことはないと思うのです。

福音朗読で、イエスはユダヤ人を恐れて家の中に閉じこもっていた弟子たちに現れ、「あなたがたに平和があるように」(20・19)と言われました。さらに弟子たちに、御自分の手とわき腹とをお見せになりました。

「手とわき腹の傷を見せる」というのは、イエスが、体としては確かに死なれたということです。死ぬことがなければ、復活もないわけです。けれども、イエスは体は死んでも、神のいのちは一瞬も失うことはありませんでした。この「神のいのち」に、はっきりと目を向けるように、今日イエスは弟子たちに言葉をかけるのです。「聖霊を受けなさい。だ

れの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」（20・22-23）

「聖霊を受ける」これは聖霊降臨の出来事を思い起こさせます。使徒言行録にあるように、弟子たちには炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまりました（使 2・3）。これは、「いのち」という切り口で考えると、「神のいのち」をはっきりと意識する出来事だったのでないでしょうか。

弟子たちは、聖霊降臨まで宣教活動の時を待っていました。聖霊が注がれると、宣教に打って出たわけですが、その弟子たちの働きは「神のいのちに奉仕すること」だったのです。体のいのちについてはだれでも配慮していましたが、神が与える永遠のいのちに心を配るように、弟子たちは外に向けて声を上げたのでした。

今日の福音朗読では、「罪のゆるし」について奉仕するようにと弟子たちを促します。罪がゆるされていのちを取り戻すのは、体のいのちではなく永遠のいのちです。ここでも、聖霊を受けたなら、神が与える永遠のいのちのために奉仕しなさいと呼びかけているわけです。

わたしたちにも、聖霊降臨は同じことを呼び掛けます。聖霊が注がれ、心の目が開くとき、わたしたちはみずからの神のいのちに心を配っていたらどうかと考えが及ぶようになります。神が与える永遠のいのちを滅ぼさなければ、どんな人にも道は開ける。そのことを聖霊は気付かせてくれます。

自分自身が、聖霊に照らされて神のいのちを大切に考えるようになったなら、次は周りの人にも同じ配慮をしてほしい。わたしたちに注がれる聖霊は、次の目標を教えてくれるのです。

神が与える永遠のいのちに、心に向ける。聖霊はあらためてそのことをわたしたちに教えようとします。恵みを受けて、永遠のいのちを養い、いのちを保つならば、どんな場面にあっても次の道は開けます。わたしたちに注がれる聖霊が、最も大切なものを教え導いて、証しへと結び付けてくださるように、引き続きミサの中で祈ってまいりましょう。

三位一体の主日（ヨハネ 3:16-18）

三位一体の主日 (ヨハネ 3:16-18)

「神ご自身」が最高の贈り物

短い朗読箇所でした。今週の朗読から、三位一体の主日に合わせて、御父・御子・聖霊の栄光を等しくたたえたいと思います。

今日の朗読から三位一体の神様を考える鍵を探しましょう。冒頭の「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。」(3・16)

ここから、何かをつかみたいと思います。

わたしは、「与える」という言葉に注目してみました。ものを与えるというときのことを考えてみましょう。そこには与える人とそれを受ける人がいて、与えるものがあります。何かを「与える」時、必ずこの3つが必要になってくるでしょう。

では、「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」この語りかけの中では、先に示した3つの条件は、御父が与えるお方で、独り子を与えます。受け取る相手はこの世にいるわたしたち人間です。そこで、「何かをお与えくださる神」について、次いで「独り子をお与えくださる神」について、考えを進めましょう。

まず、神は「与えてくださる神」です。わたしたちは神を思い描く時に、まずはじめに「与えてくださる神」だということに信頼し、期待してよいのだと思います。

神はどのように与えるのでしょうか。わたしたちは人から何かを頂く時、そのほとんどが良いものだと思いますが、結果的にいらないものであったり、同じ物が増えたりということもあるのではないのでしょうか。

神が与える時はどうでしょう。神が人間に何かをお与えになる時、結果的には必要ないもの、すでに持っていて二重になるものをお与えになったりするのでしょうか。わたしは、それはあり得ないと思っています。神は、わたしたちが今必要なもの、すでに手に入れているものなどすべてをご存知です。わたしたちは、神が与えてくださる一切のものに信頼を寄せてよいのです。

また、神がお与えくださるものには、等級というものはあるのでしょうか。あの人は特別に大切な方だから、デパートで買い物をして贈り物を用意しよう、あの人は気心知れた人だから、同じものでも少し安く手に入れて贈り物にしよう。わたしたちはそんな使い分けをしています。

神はどのようなのでしょうか。神には、そのようなことも考えられないと思います。人間に命をお与えになる神は、いろいろ等級に差を付けて与えたりするはずがありません。すべての人間に、かけがえのない命を、一つひとつ最上級の命を、お与えくださるのではないのでしょうか。

次に「独り子をお与えになる神」の姿を考えましょう。神は、ご自分の独り子を、二つとないものとしてお与えになり、またすべての人に公平にお与えになります。

この点について、わたしたちはこれまで、御子イエスキリストがこの世においでになったことを、二つとない出来事として、またすべての人に与えられる大切な出来事として、考えてきたのでしょうか。

神がお与えになった独り子は、絶対に必要なもので、すべての人に公平に与えられることを話しましたが、もっと踏み込んで考えると、わたしたちに与えられた御子キリストは、神がお与えになるものの中でいちばんすぐれたもの、いちばん良いもののはずです。

「いちばんすぐれたもの」と言う時、わたしたち人間の世界ではいろいろあるものの中でいちばんすぐれたものかも知れませんが、神にとっていちばんすぐれたものとは、「神ご自身」以外にありません。御父が与える独り子は、いろいろあるものの中でいちばんすぐれたものではなく、唯一無二の、すぐれたものなのです。

そうであれば、神がこの世にお与えくださった独り子は、神ご自身でもあることになります。イエスが弟子たちに話してくださった通り、「わたしと父とは一つである」（ヨハネ 10・30）ということなのです。

御父と御子がまったく一つで、神が与える最高のものは神ご自身なので、御父と御子は唯一の神であるということです。そして、最愛の御子をこの世にお与えになりますが、与える相手であるこの世も、この上なく愛しておられたことになります。

なぜなら、神がお与えになることのできる最高のものを、この世に与えてくださったからです。この最高の愛もまた、神の思いそのもの、神ご自身ということではないでしょうか。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」という招きの言葉は、「与える」ことに注目すると、父と子と聖霊が唯一の神であることを学ぶ手がかりともなることがわかります。

神は与えようとご計画されたこの世に対して、最高のもの、神ご自身をお与えになりました。与えようと計画された神の思いもまた、神ご自身と言えるものですから、御父・御子・聖霊はこの世に最高のものをお与えになる唯一の神ということなのです。

最後に、私たちの生活の中から一点振り返りの場面を持つことにしましょう。ふだんわたしたちは大切な人から何かをいただいた時、お返しを考えますが、神に対しても何かお返しのようなものを考えても良いのではないかと思います。

何を神に返すことができるでしょうか。本来は返すことのできるものなど何もないのかも知れませんが、この与えられた命を、最後にお返しとして用意するのがふさわしいのではないかと思います。

お返しはできるだけ良い状態で届けるのが筋です。高級な品物の中には、長い時間をかけて完成される物があります。そのように、わたしたちも与えられた人生という時間を使って、より完成されたものとなって神に自分をお返ししたいものです。

何度も試練や誘惑を乗り越え、神に喜ばれる言葉と行いを身につけて、精一杯お返しできるものになりましたと、神に最後に申し上げる人生でありたいと思います。

神ご自身を与えてくださる三位一体の神を今日のミサの中でたたえつつ、わたし自身はお返しとして最後に神のものとなれるように、日々の生活を見直す一週間といたしましょう。

キリストの聖体 (ヨハネ 6:51-58)

取って食べ、いのちをいのちとして受ける

大分の叙階式にどうしても未練があつて、6時45分からミサを開始しました。知らずに7時においでになった方はお許してください。ここまで協力してもらったのに、船が出るのかどうか、説教書いた時点では保証はありませんで、説教している時間にはきっと決定しているでしょう。今日はキリストの聖体の祭日です。ミサで祝われる聖体の秘跡について、どうしても話したいことに絞って話を進めます。イエスを信じることができないでいるユダヤ人たちは、「どうしてこの人は自分の肉を我々に食べさせることができるのか」(6・52) このことにこだわって、その先に進むことができないでいます。

わたしはこう考えます。「イエスが、天からおいでになった方で、世を生かす方であれば、きっと何かの方法で、御自分を食べ物として与えてくださるに違いない。」これは、イエスを信じているからたどり着く考えです。イエスを信じることができないユダヤ人たちは、どうしてもこのように考えることができないでいます。ですから先へも進みません。イエスの言葉を信じる者が、世を生かす食べ物にたどりつきます。最後までイエスを信じ続けた弟子たちには、「どうやって食べさせることができるのか」を知ることができました。最後の晩餐の席で、パンとぶどう酒の形のもとに、イエス・キリストがとどまって、弟子たちをはじめイエスを信じる者すべてに、イエスは食べ物になってくださいました。パンとぶどう酒のもとにイエスがとどまる聖体、わたしたちの食べ物となってくださった方が、「世を生かすためのわたしの肉」となるためには、もう1つわたしたちからの協力が必要だと思います。それは、イエスの食卓に連なるということです。

イエスの食卓に連なる者に、ミサの中で司祭は次のように呼びかけます。「神の子羊の食卓に招かれた者は幸い。」もちろん聖体拝領のことを直接には指していると思いますが、神の子羊の食卓は、御言葉の食卓と、聖体の食卓と、両方を忘れてはいけません。御言葉の食卓にも、「世を生かす」力があるのです。

この、「イエスの食卓に連なる努力・工夫」を、わたしたちは続ける必要があります。日曜日(主日)のミサに参加する努力・工夫はもちろんですが、平日のミサに参加する努力・工夫も、イエスの食卓に連なるためにとっても大切だと思います。なぜなら、平日のミサに参加する努力・工夫を忘れない人は、主日のミサに参加する努力・工夫を忘れないと思うからです。

食べ物、飲み物は、眺めているだけでは食べ物、飲み物になりません。手に取って食べ、飲むのでなければ、世を生かすことはいけません。イエスを信じることでイエスの食卓までたどり着き、とって食べることで「世を生かすためのわたしの肉」といたしましょう。また、「わたしはこうやって、この世を生きている」と証しする者となりましょう。

年間第 14 主日 (マタイ 11:25-30)

年間第 14 主日 (マタイ 11:25-30)

軛はイエスが共に担ってくださる

復活節と、その後のいくつかの主の祭日が終わって、年間の主日が巡ってきました。また、今年に限って言えば、今日は7月3日、使徒トマスの祝日で、わたしの霊名の祝日でもあります。後でお祝いしていただけるそうで、ありがたいなあと思っています。

ちなみに、「聖トマ」と言ったり「聖トマス」と言ったりするのは、どっちが本当かと聞かれたりしますが、ラテン語聖書は「トマ」ギリシャ語聖書は「トマス」と表記しますので、どちらも間違っていない。いちおう、教区には「トマス」と届けています。

3年前からわたしは、霊名のお祝いの少し前に、健康診断を受けるようにしました。社会保険に加入しているので、健康診断を受けるのは当然と言えば当然なのですが、実際には健康状態に気を配らない司祭が多いのです。わたしもそうでした。ですが、父が亡くなってからは健康診断を受ける気になりました。

今年は、去年厳しく注意された数値が目に見えて改善されていて、診察して下さった先生から「続けて健康維持のために食事と運動に気を配ってください」と言われました。食事を考えてくださるシスターと、ミニバレーに誘ってくださる婦人会の皆さまのおかげだと思います。感謝しております。

さて今週の朗読箇所から、「軛」（くびき）について考えてみたいと思います。「軛」は簡単に言うと、「牛や馬のくびにあてる横木」のことです。この軛を動物に取り付けて、人間は動物を操り田畑を耕します。動物を苦しめたりはしませんが、ちょっと不自由を味わうことになります。

この軛を例にして、イエスはわたしたちを導こうとします。「わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。」（11・29）

ここには2つのことが言われています。「わたしは柔和で謙遜な者である。」イエスが柔和で謙遜であると言うとき、それは人柄として柔和謙遜であると考えよりも、御父の前にひれ伏して教えを請う態度を表します。

ですから、続く「わたしの軛を負い、わたしに学びなさい」と呼び掛けるわけです。もし素質のことなら、たとえば「わたしは運動神経が良いから、わたしに倣って運動神経が良くなりなさい」という招きになり、お手本にできなくなります。そうではなく、イエスが率先して、御父に謙虚に教えを請う姿を学びなさいと言っているのです。

軛が、イエスに倣って御父の前にひれ伏して教えを請うということであれば、この軛は何をもたらすのでしょうか。人間を自在に操り、ある程度の不自由を強いるということでしょうか。そうではありません。御父の御旨にまっすぐに従い、父なる神が望むように生きる真の自由が与えられます。

最後にイエスは、「わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである」（11・30）と仰いました。「負いやすい」「軽い」とはどういうことでしょうか。軛は、いつの場合でも負い難く、重荷なのではないでしょうか。

ここでもう一度、軛を負う姿を考えてみましょう。イエスが求める軛につながれているのは、わたしだけでしょうか。御父に教えを請う謙虚な姿を軛と言うならば、イエスが先に、軛を負ってくださっているのではないのでしょうか。

わたしの軛には、わたしだけではなくて、イエスがそばにいてくださる。イエスが共に、軛を担ってくださる。それが分かれば、「わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽い」と言っているのも分かります。御父のお望みのままに生きようと望むのは、わたし一人の努力なのではなく、イエスがそばにいて、一緒に担ってくださっているのです。

今日わたしは、霊名の祝日を迎えて、もう一度「わたしの軛を負い、わたしに学びなさい」と招くイエスさまの声に耳を傾けたいと思います。自分に都合のよいことばかりではなく、イエスと一緒に、御父に教えを請う生き方を歩き通すことができるように、ミサの中で願いたいと思います。

年間第 15 主日 (マタイ 13:1-23)

年間第 15 主日 (マタイ 13:1-23)

イエスの御言葉はわたしの中で 100 倍になる

本日から、ミサ前のロザリオの時間に聖書の朗読 CD を流し、お一人お一人は手元に聖書を用意して、目で追っていくという形で、聖書愛読マラソンの取り組みを行うこととしました。これから約半年間、日曜日ごとに続けていきますので、ふだんよりも早めにおいでになって、聖書を続けて読む取り組みに参加してもらいたいと思います。

浜串教会の場合は、5 月の平日に少し取り組み始めていましたので、今日朗読した箇所はマタイ福音書の最後あたりから、マルコ福音書に入る朗読となっていました。マルコ福音書から始めたのだと思っても結構ですし、最初から参加している人は、半年でどこまで読み続けられるか、楽しみにしてください。

では福音の学びに入りましょう。今週の、種蒔きのたとえから、「良い土地」について考えてみたいと思います。「ところが、ほかの種は、良い土地に落ち、実を結んで、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍にもなった。耳のある者は聞きなさい。」(13・8-9)

「良い土地」について考えてみようと思った理由があります。実を結ばなかった土地については、割合具体的な事情が書かれていました。道端に落ちた種が、鳥に食べられてしまうとか、石だらけで土の少ないところに落ち、根がないために枯れてしまうとか、茨の間に落ちて、茨が伸びて種をふさいでしまうとかです。

これに対し、実を結んだとされる「良い土地」については、「良い」と書かれているだけで、どのように良いのか書かれていないのです。たいへん興味をそそられました。そこで、この「良い土地」について詳しい説明をしてくれる本を探しましたが、あいにくそのような本が見つからないのです。

目の付けどころは悪くないと思うのですが、どうしても「良い土地」について手っ取り早い説明が見つからないので、自分なりに考えることにしました。「良い土地」を考えるために、まず「百倍、六十倍、三十倍」について考えを示しておきたいと思います。

給料で考えてみましょう。月収 15 万円の人、珍しくないと思います。その 30 倍となると、月収 450 万円です。もしかしたら、町内に 1 人はいるかもしれません。60 倍となると月収 900 万円ですが、町内にはいないとしても、県内にはいるかもしれません。100 倍だと月収 1500 万円で、こんな人は国内に数人しかいないかもしれません。でも、いないわけではありません。

今話したのは、人間が手に入れることのできる収入で、ある人と別の人では、収入に 100 倍の差が開くことがあり得るということを考えてみました。では、ある人と別の人で 100 倍の差が開くのは、環境によるものなのか、本人の努力や素質によるものなのかを考えてみましょう。

100 倍の収入を得る人は、必ず都会に住んでいるのでしょうか？わたしはそうは思いません。地方に住んでいて、都会に住んでいる人の何十倍

も収入を得ている人はいると思います。ところが、努力と才能のない人で、けた外れの収入を得ている人はいないのではないか。わたしはそう思いました。

つまり、イエスが話したたとえ話で、種が「良い土地」に落ち、実を結んで、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍にもなったというのは、人間の努力とか、持っている才能のことではないかと思ったのです。

まとめると、イエスが蒔いてくださる種は、どんな環境であっても、努力する人、才能を持っている人の中に蒔かれると、豊かに実を結ぶ。そういうことなのではないでしょうか。

「努力する人、才能のある人」と言いましたが、才能は、注意力や、判断力、分析力と置き換えてもよいでしょう。注意深く観察するとか、なぜこうなるのだろうかと考えることは、だれにでもできることです。

ただ、どれくらい注意深いかは、人によって違うと思います。100倍注意深いということもあり得る話です。マリアは、イエスの話を注意深く聞いて、心の中で思い巡らしました。マリアの注意深さは、わたしたちの100倍であっても不思議ではありません。

こうしてみると、イエスが蒔いてくださる種は、わたしたちが注意深く聞くなれば、100倍の実を結ぶ可能性があると思っています。これから、日曜日のミサ前は聖書朗読が続きます。わたしたちが注意深く聞くなれば、イエスの蒔いた種のどれかが、あなたの中で100倍の実を結ぶはずですよ。

注意深く聞き、自分にとってどういう意味があるのかを慎重に判断し、驚くほど実を結んだ姿をイエスに報告することができるよう、このミサの中で照らしと導きを願いましょう。

年間第 16 主日 (マタイ 13:24-43)

忍耐の道を教えるために、神は御子を遣わされた

先週は「マリア文庫」、「よきおとずれ」と公務が立て続けに入って、まともに説教を準備する時間が取れませんでした。皆さんにお配りした説教集「とって食べなさい」をもう一度読み返して、今週は説教しております。

今日の朗読で関心を引いたのは、イエスがお話しになったたとえ話の中で、「敵が毒麦を蒔く」という場面を置いていることです。イエスが「敵の仕業」について触れたというのは、イエスの中で「敵の仕業」というものは十分にあり得ると考えておられるということではないでしょうか。

たとえばそれは闇の力とか、悪の力と言ってもよいかも知れませんが、そうしたものが力を振るうことがあるということなのでしょう。今日は少し、この「敵の仕業」という切り口から福音の学びを得て、わたしたちの信仰生活に活かしてみたいと思います。

たとえ話の流れからすると、よい働きに混じって敵は自分たちの悪い行いを仕掛けてくるということになります。イエスがこの世においでになっても変わらずに「敵の仕業」は形になって現れます。しかし神が御子イエス・キリストをお遣わしになったということは、たとえ「敵の仕業」が存在するとしても、神は決して敵の業を放っておいたりはいしない、必ず焼き払われるということでもあるのです。

そうであれば、わたしたちの時代が抱える矛盾にも、今日のイエスのたとえは一定の答えを与えてくださるのではないのでしょうか。イエスがおいでになってからすでに 2000 年が経ちました。

こんなに長い時間教会共同体は途絶えることなく、信仰は受け継がれてきたのに、悪は絶えません。現代でも「敵の仕業」はそこここで行われています。けれども神は、この時代にあっても決して悪をお許しにならず、お認めにならないのです。悪を許さないのですから、それらは必ず焼き滅ぼされるのです。

この点を理解し、受けとめるのに、わたしたちの信仰が試されていると思います。神さまが試すということではないのですが、信じる力を鍛える必要が出てくると思います。僕たちの言葉「行って抜き集めておきましょうか」をよく考えて、もっと適切な答えを出すように求められているのです。わたしたちは、よくよく注意が必要です。それは、神よりも早く裁きを下したり、神よりも出過ぎたことをして、それでいて自分のとった態度は神に当然喜ばれると思う危険があるからです。

「毒麦のたとえ」で登場する主人は、父である神を写している人物です。主人が取った唯一の方法は、「刈り入れまで、両方とも育つままにしておきなさい」ということでした。「忍耐し、最後の日まで様子を見届けなさい」ということです。ですが僕に代表されているわたしたち人間は、どうしても早く手を打ち、結果を見たがるのです。先回りして、神に任せられていることにさえも手を出してしまいがちです。

ここで、主人が取った方法、「最後まで忍耐し、結果を見届ける」態度をあらためて考えましょう。主人が取った態度は、本当に正しかったのでしょうか。唯一の、適切な方法と言えるのでしょうか。ほかにもっと良い方法、たとえば僕が提案したように、早めに抜き取ることは考えなかったのでしょうか。

たとえの説明と照らし合わせて考えてみましょう。父なる神は一つの決定的な形で、これが唯一の方法であり、神が選ばれた道であることを示されました。それは、御子イエス・キリストをこの世に遣わすということでした。

神は御子イエス・キリストに人間の救いを託されたのですが、イエスが取られた道はまさに、「忍耐し、赦すことで人間を救う」という道でした。十字架での最後の場面がその極みです。十字架は人間を救うために示された最高の忍耐の証・赦しの証でした。

ほかに取るべき方法があったかも知れませんが、一切の方法を脇において、イエスは十字架にかかって、どこまでも忍耐と愛を示してくださったのでした。こうして、父なる神は人間の救いのために、「最後まで忍耐し、結果を見届ける」道が唯一の方法であると、示されたのです。

「忍耐の道」は、ともすると「弱い者の選ぶ道」「最も愚かで見込みのない手段」と受け取られるかも知れません。ですが、わたしたちがどう説明づけようとしても、父なる神が御子イエス・キリストを通して示された「十字架を通しての救い」のほかは、正しい答えは見つからないのです。

この道は、いったんは御子イエス・キリストが「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください」（マタイ 26:39）と避けようとした道でしたが、最終的には受け入れました。考え抜いた挙げ句に、最後まで忍耐することを選ばれたのですから、わたしたちがこの道を別のものに置きかえることはできないのです。

ここに、わたしたちの信仰が問われています。忍耐し、最後まで見届ける方法は回りくどいように思えるのですが、これがわたしたちの信じるイエスによって示された唯一の道であれば、わたしたちも受け入れよう。この信仰が必要になってきます。

活動が実を結ばないと結果を見守る気持ちになれないものです。最後まで忍耐するよりも、被害を最小に食い止めたいと思うこともあります。人間として思うことはいろいろあるでしょう。ですが、忍耐によって努力を積み上げることが、まずは神が示された道であるし、わたしたちにも必要な心構えなのです。

神は悪をほうってはおかれませんが、忍耐しておられるのです。神の変わらぬこの態度がわたしたちの限られた心の広さではなかなか理解できません。忍耐して努力し続ける大切さと、悪を最終的には焼き尽くされるのだという固い信頼を保つことができるよう、ミサの中で願いましょう。主はわたしたちに、「忍耐によって、あなたがたは命を勝ち取りなさい。」（ルカ 21:19）と招いておられます。

7月22日（年間第16金曜日）復活の主を見る喜び

マグダラのマリアも恋い慕う人を見つける

週の初めの日、イエスを感じることでできる場所は「墓」しかありませんでした。マグダラのマリアは、「朝早く、まだ暗いうちに」墓に行きます。「朝早く」だけでなく「まだ暗いうちに」と説明が加えられています。イエスを死に追いやった人々を避ける狙いもあるでしょうし、主を失ったという彼女の「心の闇」を表すのかもしれませんが。

墓に向かったマリアにとって、イエスの時間は止まったままです。イエスは十字架上で息を引き取り、墓に埋葬され、横たえられているはずでした。時間が止まったままのイエスと対面できるはずでした。ところが、主は墓から取り去られていました。

死んでしまったとはいえ、マリアが恋い慕う人は墓に納められているはずなのに、見つけることができません。シモン・ペトロとイエスが愛しておられたもう一人の弟子のところへ走り、彼女はイエスを求め続けます。

「主が墓から取り去られました。」（二十2）

再び墓へ戻ると、白い衣を着た二人の天使に出会います。この時、マグダラのマリアはペトロともう一人の弟子に報告した時よりも思いを傾けて訴えています。「わたしの主が取り去られました。」（二十13）

そして遂に復活したイエスが現れると、「わたしが、あの方を引き取ります」（二十15）と、彼女に考えられる限りの最善の方法でイエスとの絆を保とうと願ったのでした。イエスとの時間が止まったままでも構わない、イエスの形見を欲しいということかもしれません。

復活したイエスはついに彼女の心を開きます。「マリア」と声をかけ、止まっていた時間を進めてくださいました。「彼女は振り向いた」とありますから、イエスは過去にすがるようにしていたマリアの心を決定的に方向転換させ、希望と喜びへと向けさせてくださったのです。

「わたしの兄弟たちのところへ行って、こう言いなさい。『わたしの父であり、あなたがたの父である方、また、わたしの神であり、あなたがたの神である方のところへわたしは上る』と。」（二十17）その喜びはどれほどでしょう。止まっていたはずの時間の流れが、だれも止めることのできない永遠に続く時間に変えられたのです。振り返ることしか残されていなかったイエスとの様々な場面が、生き生きと証しできるものになったのです。

イエスとの新しい時間が動き出しました。マリアは弟子たちのところへ急ぎます。彼女がイエスを見たことを弟子たちに告げたので、弟子たちの止まっていた時間も動き出します。イエスの復活は、イエスの思い出にすがりつこうとしていたすべての人を揺り動かします。

今日、マグダラのマリアに奉獻された聖堂でミサをささげます。彼女が恋い慕う人に出会った喜びを、復活の主を見た喜びを、皆で共にすることが出来ますように。

年間第 17 主日 (マタイ 13:44-52)

あなたの生活の中に、宝が隠されている

今週イエスは、天の国を宝物を探す様子に例えています。畑に宝が隠されていて、宝を見つけた人は持ち物をすっかり売り払って、その畑を買います。または、商人が良い真珠を探していて、高価な真珠を一つ見つけると、持ち物をすっかり売り払い、それを買います。あるいは、網が湖に投げおろされ、良いものは器に入れ、悪いものは投げ捨てます。いずれも、貴重なものを見分け、見つけたら他のすべてをなげうって手に入れようとしているのが特徴です。わたしたちは、同じような体験をどこかでしているのでしょうか。わたしは、いろんな立場の人が、すでにたとえに出てくるような経験を積んでいると思います。

結婚する人は、似たような経験を積んだかもしれません。宝である配偶者を見つけた人は、持ち物をすっかり売り払って、配偶者だけを選んだことでしょう。修道者も、宝であるイエス・キリストだけを選びとって、持ち物をすっかり売り払った人々です。司祭も、イエス・キリストに従うことのすばらしさを理解し、ほかのものは投げ捨てた人々です。

こうして、いろんな立場にある人が、宝を見つけ、地上ではその宝が喜びとなり、この世を去ってからは宝を見つけたことで天の国に招かれることになります。ところで、地上にいる間に隠された宝をみつけ、天の国に招かれる人は、今話したような生き方だけなのでしょうか。

それは違います。もっとたくさんの人が、宝を見つけ、天の国に招かれます。わたしが思い付いたものを3つ紹介しておきましょう。1つは、聖書を読む方法です。ほかの1つは、祈る生活です。ほかの1つの方法は、聖歌を歌って賛美をささげることです。

今、浜串小教区内の3つの教会は、いずれも主日のミサ前に、聖書朗読にいそしんでいます。通常ロザリオが唱えられている時間に、聖書朗読の集いが開かれています。朗読CDを使って、ずっと新約聖書を読み続けています。この、読み続けている新約聖書は、いわば広大な畑です。この畑の中に、宝が隠されているのです。

わたしはこれまでに、わたしにとって大切な宝となったイエスの奇跡物語を2つ見つけました。1つは、生まれつき目が見えず、道端で物乞いをしていたバルティマイのいやしの物語です。ここで詳しい説明はしませんが、大声で、イエスに助けを求める場面が、わたしにとって大切な宝となりました。

もう1つは、ベトザタの池で38年間病気でいた人が、イエスによっていやされる場面です。イエスは38年間病気だった人に、「良くなりたいか」と尋ねました。この一言が、わたしの宝物となりました。

このように、広大な砂漠のように見える新約聖書でも、読み続ければ、聞き続ければ、きっと価値ある宝物を見つかることができます。ですから、今取り組みをしている聖書朗読の集いに、もっとたくさんの人の参加をお願いしたいと思います。

祈りの生活も、宝を見つける畑だと思います。わたしたちの小教区では、

朝の祈りとして「朝の祈り二」を唱えています、なかなか味のある祈りです。「恵みのうちに生きる」という祈りを例にとると、「わたしたちがきょう一日、愛のわざに励み、すべてにおいてみ旨を受けとめ、恵みのうちに成長することができるよう導いてください」とあります。わたしはこの部分だけでも、汲みつくせない宝が見つかると思いました。良くできている祈りです。

ミサの中で聖歌を歌い、賛美をささげることも、宝を見つける畑です。最近、典礼聖歌集だけでなく、一般の聖歌もありますし、また、短いことばを繰り返して歌う方法もあります。最近歌っているか知りませんが、「父よゆだねます、わたしのすべて。父よゆだねます、あなたの御手に」などは、繰り返しているうちに心の底から自分をゆだねてみようという気持ちになるのではないのでしょうか。聖歌という畑は、確実に宝が隠されています。

まとめると、わたしたちの生活は、イエス・キリストを見つけるための広大な畑なのです。結婚によって、かけがえのない人を見つけることも、司祭や修道者になって、自分をおささげすることも、聖書の中に宝を見つけることも、祈りの生活も、ミサの聖歌も、どれもイエス・キリストを見つける畑なのではないのでしょうか。

わたしたちがそれぞれの畑の中で、持ち物をすっかり売り払って、大切なものを手に入れる生き方をしていることを今週学びました。わたしたちの生き方はきっとイエス・キリストを知らない人に影響を与えます。ぜひ、イエス・キリストを知らない人にも、畑に宝が隠されていることを、生活を通して証ししましょう。証しのための力を、ミサの中で願ひましょう。

年間第 18 主日 (マタイ 14:13-21)

このパンを食べる人は永遠に生きる

先週今年の初泳ぎをしました。去年もそうでしたが、小学生の子供たちが司祭館のチャイムをピンポンピンポン鳴らして、「神父さま、一緒に泳ぎに行きましょう」と誘いに来ました。この小学生たちは保護者同伴でないと泳げないので、わたしは自分たちが泳ぐための「道具」だったんですけれど、それでも誘ってもらったおかげで泳ぐことができました。小さな子どもたちがほとんどで、浮き輪が頼りという状態でした。5人のうち浮き輪なしで泳ぐことができたのは1人だけ、その割には浮き輪2個に対して4人が群がる状態でした。次の時まで、わたしが浮き輪を2個買って、1回50円で貸そうと思います。

来週、小学生たちは上五島の11の教会が集まってドッジボール大会です。保護者の方、地域の方々も、応援に来てください。わたしはつい口を滑らせて、「優勝したら、ハウステンボスに行こうか」と言ってしまったので、決して優勝しないように、応援に来てほしいと思います。

今週朗読されたのはイエスが五千人に食べ物を与える奇跡物語です。ご存知かもしれませんが、このパンの奇跡の物語は、マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネ、四つの福音書すべてに記録されている物語です。その中で、マタイよりも早くに書き残された、マルコ福音書のパンの奇跡物語と読み比べると面白いことがわかります。

ほとんど、マルコとマタイの記述は共通しているのですが、イエスが五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで賛美の祈りを唱えた後、マルコは「パンを裂いて弟子たちに渡しては配らせ、二匹の魚も皆に分配された」(マルコ 6・41)となっているのですが、先ほどわたしたちが聞いたマタイ福音書では、「パンを裂いて弟子たちにお渡しになった。弟子たちはそのパンを群衆に与えた。」(マタイ 14・19)となっていて、魚のことは省略しているのです。

よくよく観察しているなら、パンのことに、魚のことも両方を書くのが自然だと思います。この違いは最後の結果にも表れていて、マルコは「パンの屑と魚の残りを集めると、十二の籠にいっぱいになった。」(6・43)ときちんとして書き残していますが、たった今読んだマタイ福音書は、「残ったパンの屑を集めると、十二の籠いっぱいになった。」(14・20)と、ここでもまたパンのことだけ書いているのです。

これは、次のように考えるのがよいでしょう。福音書の中でいちばん早い時代に書かれたマルコは、出来事に即して物語を書き残し、マタイは何か考えがあって、パンのことだけを強調して、魚のことは省略した、ということです。パンに、特別に注意を向けている点が大事です。

皆さんも、パンに集中する場面をしているはず。それはミサ、イエスが残された最後の晩餐の再現の場面です。祭壇の上には、パンとぶどう酒がささげられ、イエスの御体と御血になります。司祭はそれを両方とも拝領します。信徒の皆さんは、御体のみの拝領となります。御体に集中していると言ったほうがよいでしょう。

イエスさまが五千人に食べ物を与えた奇跡の場面、マタイはあえてパンだけを強調し、パンに人々の注意を向けさせようとした。それはきっと、最後の晩餐、イエスがわたしたちのために残された決してなくならないいのちのパンのことをこの時からすでに考えて物語を書いたのだと思います。

つまり、マタイはこのパンの奇跡を通して、人を満たすのは「町や村」に行ってみつける食べ物ではなくて、イエスが与える食べ物こそが、人を満たすのだと教えたいのです。パンや魚が要らないと言っているのではなく、たとえ「人里離れた所」であっても、イエスがそこにおられることで人を満たすことがお出来になる。イエスによって、わたしたちは本当の意味で満たされるというのです。

わたしたちは日々こう考えています。「食べていかなければ、後のことは何も始まらない」と。本当にそうでしょうか。わたしは小学生の時、食べ物は切り詰めているなあと感じることがありましたが、学ぶためには、ほかのすべてを切り詰めても工面してもらいました。

祈祷書を読み、祈りの難しい漢字を学び、漢字の試験では他の生徒より頭一つ抜けていました。「いととうとく」とか、「とこしえにしろしめしたもう」とか、小学生が誰も知らない言葉の意味を教わっていました。学校以上に教会から考え方や生き方を学び、道徳の時間に「人間は何のために生きるのですか」という題で話し合いになって、「人間は神さまの喜びとなるために生きています」と答えて、先生から変な顔をされました。

当時のことを振り返ると、わたしは神さまに育ててもらったのだと思います。栄養状態は良くなかったかもしれませんが。バランスの良い食事はなかったかもしれませんが。けれども、同学年の半分以上の人が知らないこと、さらには先生も知らないことを教会で学び、天の国の秘密を学んだ学者に育っていたのだと思います。

その少年時代を踏まえて言いたいと思います。イエスは共に手伝ってくれる人を通して、「あなたがたが彼らに食べるものを与えなさい。」(14・16)と仰るのです。イエスのもとに、本当の意味で人間を養う食べ物がある、なければならないで構わないものではなくて、絶対に必要な食べ物は、イエスのもとにあるのです。

ただ、上手に手分けして与えなければなりません。大人の方々には教会の評議会を通して、特に子どもたちには要理部を通して、食べ物をイエスから受け取って、与えなければなりません。さらに「すべての人が食べて満腹した」(14・20)となっています。わたしたちのお世話に問題があって、食べても満足できなかったから、ほかに食べに行こうと言われるようではいけません。工夫が必要です。

最後に、「残ったパンの屑を集めると、十二の籠いっぱいになった。」(14・20)とありますが、これはイエスをまだ知らない人のために残った食べ物ではないでしょうか。一人一人、さらに熱意を持って、イエスしか与えることのできないパンを、より多くの人に届けましょう。そのための力をミサの中で願いましょう。

年間第 19 主日 (マタイ 14:22-33)

イエスは手を伸ばして捕まえてくださる

先週、雲仙で開催された「召命フェスティバル」に、小学5・6年生の4人を連れていきました。もっと下の学年から連れて行ってもよかったのですが、司祭・修道者への神さまの呼びかけを真剣に考えるためには、今回の判断は適当だったと思っています。

もちろんすぐに司祭になりたい、シスターになりたいと言い出す子供はいないと思いますが、今回の集いで見たこと、考えたことは、これから召命を考える財産になると思います。

いろいろな修道会のシスターたちを見ましたし、司祭が身近なところできっかけをつかんで神学校に行くようになるということも、分かりやすく教えてもらったと思います。あとは、自分の身近なところで、神さまの特別な呼びかけを見つけてほしいと願っています。

今週は、ペトロが湖の上を歩くイエスに近づこうとする話です。弟子たちはイエスに促されて舟に乗り込み、向こう岸へ渡ろうとしています。舟は逆風のために波に悩まされます。舟はまた、「教会」の象徴とも言われています。嵐にほんろうされる舟は、教会の姿でもあるわけです。そこへイエスが、湖の上を歩いて弟子たちに近づきます。ペトロがイエスに信頼を置いて舟から湖に乗り出し、イエスに近づこうとしますが、強い風に気がついて怖くなり、沈みかけたのでイエスに助けを求めました。これも、降りかかる試練や迫害に怖くなって助けを求める教会の姿でもあります。

そんな信仰の薄いペトロを、イエスはすぐに手を伸ばして捕まえ、「なぜ疑ったのか」と声をかけました。イエスは、ペトロが怖くなったことを責めたりはしません。むしろ励ましました。ペトロは信仰を持っていなかったのではなく、信仰が薄かったので、励まして、本来の信仰に立ち返らせようとしたのです。

今もイエスは教会に手を伸ばし、「なぜ疑ったのか」と声をかけます。教会の民は信仰が薄いために怖くなることがありますが、「主よ助けてください」と呼び掛ける者には、すべて励ましの言葉を与えてくださいます。怖くなったことを叱るのではなく、怖くなっても信じ続ける信仰をイエスは求めているのです。

イエスへの信仰を持たないことと、信仰が薄いこととは違いがあります。イエスへの信仰がない人は、イエスに導いてもらうことをしませんが、信仰が薄い人であれば、イエスの導きを求めてきます。ペトロは、「主よ、あなたでしたら、わたしに命令して、水の上を歩いてそちらに行かせてください。」(14・28)と願いました。教会もまた、迫害や異端に悩まされたり道をそれた時、イエスに導きを願いました。

信仰がなければ、イエスに助けてくださいと叫ぶことはありませんが、ペトロは怖くなったときにイエスに助けを求めました。教会も、危険を前にして常にイエスに助けを求め、手を伸ばして捕まえてもらっています。わたしたちはみな、信仰を持っていないのではなく、信仰が薄いた

めに道をそれたり怖くなったりしているのです。

常に、一步を踏み出す必要があります。イエスがわたしたちに「来なさい」と呼び掛けるときは必ず、そばにいてくださるのです。怖くなり、沈みかけた時にすぐに手を伸ばして捕まえることができるように、近くにおられるのです。そのことを信頼し、常に一步を踏み出すことが、今週わたしたちにも求められているのではないのでしょうか。

家庭で、祈りの習慣が身につかないと悩んでいる人もいます。教会に足を向けてくれないと心配している保護者がいます。一步を踏み出す必要があるのです。あなたが一步を踏み出す時、もしも沈みかけて怖くなったら、イエスは必ず手を伸ばして捕まえてくださいます。信頼して、今日の一步を踏み出しましょう。

司祭を目指す子供たちが少ないと、教区全体でとても心配しています。召命フェスティバルに参加したことで浜串教会も一步を踏み出しました。思い悩んで沈みそうになったら、助けてくださいと正直に叫びましょう。きっとイエスが助けてくださいます。

わたしたちが、イエスへの信仰を生活の柱に据えて生きる。この決意で一步を踏み出しましょう。不安が生じ、怖くなった時は助けを求めましょう。いつもイエスは、手を伸ばして捕まえる距離を保って、わたしたちを導いてくださいます。

年間第 20 主日 (マタイ 15:21-28)

神の与えるパンに養われ導かれる

小学生の皆さん、ドッチボール大会は本当に惜しかった。予選 1 位通過が最初の関門だったけれども、予選 2 位通過になってしまって、ちょっとハウステンボスは届かなかったね～。代わりに、少し価値は下がるけれども、全員ソフトクリームを帰りに食べることができたので、良かったですね。来年、もっとレベルアップして、予選 1 位通過でもっと上位を狙いましょう。

イノシシの話は、もうすでに広まっているでしょうか。たぶん、噂が噂を呼んで、全員がこの話をご存知でしょうから、省略します。イノシシに車をぶつけてしまって、修理にかかった費用は 76230 円でした。

最近食べ物のことでわたしが気になることが 1 つあります。トウモロコシのことですが、最近のトウモロコシはなぜか甘いですね。果物みたいとは言いませんが、塩味のトウモロコシしか知らないわたしには、ちょっと違和感があります。しかも、生でもかじることができるくらい、やわらかい。

そこから話がつながっていくのですが、一般に、人は親が与える味付けの食べ物を食べるものです。とうもろこしにしろ、卵焼きにしろ、親がつけた味が、食べ物の味として子どもに植え付けられていきます。人は、親が与える「食べ物」を食べるのです。

今週の福音朗読に当てはめてみましょう。イエスがカナンの女に語ったたとえの中に、「パン」が出てきました。「子供たちのパンを取って小犬にやってはいけない」(15・26) 人は、親が与える「パン」を食べるものです。

ここで言われている「パン」はもちろん食べ物としてのパンもありますが、わたしは、「親が与える生き方、考え方」と考えてもよいと思います。人は、親から与えられる生き方、考え方を食べて育っていくのです。

イエスが念頭に置いて話している親子関係は、ユダヤ人社会の中での親子関係です。ですから、ユダヤ人の親が子に与える「パン」、言いかえるとユダヤ人が親から子に伝える考え方、生き方は、「神の望みにかなう考え方、生き方」のことです。

この「神の望みにかなう考え方、生き方」を、ユダヤ人の親がその子に与えずに、わが子を差し置いて外国人に与えるということは考えられない態度のはずです。わが子を神の望みに向かわせようとしないまま、外国人を神の望みに向かわせようとするのは物事の順序を外れています。ですから、「子供たちのパンを取って小犬にやってはいけない」とお答えになったのです。すべてのユダヤ人が、神の望みにかなう生き方を身につけてから、外国人にも同じ生き方の門が開かれるべきだと、イエスは原則を説いたわけです。

ところが、カナンの女性は見事に食い下がりました。「主よ、ごもっともです。しかし、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくので

す。」（15・27）イエスが諭された原則はもっともなのですが、外国人も、唯一の神の望みにかなう考え方、生き方を教えていただいて、唯一の神をたたえることはゆるされるはずです。カナンの女性はその点をイエスに認めてもらいました。

わたしたちにも、カナンの女性の信仰が必要です。機転の利いた答えばかりに目を奪われがちですが、その中心にある考え方は、「わたしたちは、神の望みにかなう考え方、生き方をいただいて養われたいのです」という願いです。

イエスに願うのは、今の苦しみから逃れたいとか、目の前の困難を避けて通りたいとか、初めはそうした願いかもしれませんが。けれども、目の前のことをいくつ解決しても、きりがありません。それは買い物と同じです。目の前の必要を満たす買い物をどれだけしても、買い物にきりはないのです。

むしろ、「今の困難の中で、神の望みにかなう生き方ができるよう、導いてください」と声を上げることが大事です。これが、カナンの女性の信仰につながっていきます。「どれだけ買い物してもきりがありません。物の多い少ないでわたしの価値は変わったりしないことを、教え導いてください」と、声を上げたいものです。

小学生の皆さん、ドッジボールで来年もっと上位になれるように祈ってください。あわせて、この大会で神さまはわたしをどこに導いてくださるのですか、もしかしたら神父さまやシスターになるように導いてくださいますかと、尋ねてみてほしいと思います。

神は今日、目の前のパンだけでなく、永遠の命に至るパンも与えようとしておられます。神が与えてくださるパンを食べ、神の招きに気付いて日々歩んでいくことができるよう、ミサの中で願いましょう。

聖母の被昇天(ルカ 1:39-56)

聖母の被昇天 (ルカ 1:39-56)

マリアに模範を仰いで今日を過ごす

聖母の被昇天の祭日を迎えました。福音は、マリアがエリザベットを訪問した場面と、その時にマリアの口からほとぼしり出た賛美です。わたしは、朗読された出来事の中に聖母被昇天を予感させる点があると考えました。

マリアは、先に身ごもった親戚のエリザベットを訪問します。他にも、エリザベットを訪ねて行った親戚がいたのかどうか、はっきり書いていませんが、少なくとも、マリアは自分のことを横においてでも、エリザベットの身の回りのお世話をすることを優先させました。自分のことを横において、人のことを優先する。これは言うのは易しいですが、実行するのは難しいのです。

マリアは、エリザベットと時を過ごしている間に、神が自分になさったことを賛美します。大胆に神をたたえたのです。心の中でつぶやくのではなく、神がなさったことはすばらしいと、だれもが耳にするようなはっきりした態度で、神をたたえました。これも、わたしたちにできそうでできない、立派な態度です。

これらを考え合わせると、マリアは、生きておられる時からわたしたちに優れた模範を示しておられたことがわかります。隣人を自分のように愛する姿、心をつくし、力を尽くし、思いを尽くして神を愛する姿。そのどちらも、わたしたちのお手本となってくださったのです。

ですから、マリアが天に上げられたというのも、人類にお手本として示された栄冠なのだと、わたしは考えました。人は皆、天の国の栄冠を目指しています。天の国はわたしたちが最終的に目指すところですが、マリアはその目指すべき場所におられるということです。

もっと大胆に言うと、わたしたちが目指すすべての場所に、マリアはおられるのではないのでしょうか。神を愛する、その最高到達点に、マリアがおられる。隣人を、自分のように愛するその最高到達点に、マリアがおられる。

わたしたちがたどり着くべきすべての場所に、マリアがおられる。わたしたちの目標のすべては、マリアをお手本とすべきだと、今日聖母被昇天のお祝いを通して、神は教えてくださっているのだと思います。

そこで、わたしたちのことを振り返ってみましょう。8月15日は、わたしたちにとってどんなことを思い出す日でしょうか。太平洋戦争が終わったということでしょうか。戦争が終わって、平和のありがたさを強調する日でしょうか。

わたしは今年初めて知ったのですが、同じ8月15日は、聖フランシスコ・ザビエルが日本に上陸した記念日なのだそうです。そうすると、今日というこの日は、わたしたちが宣教活動を意識する日と考えてもよいと思います。

いろいろ、意識する日があるわけですが、わたしたちが意識するすべてのことの理想、お手本として、今日マリアを思い出す必要があると思います。

ます。これまで考えて来たように、マリアはすべてのことにおいて、わたしたちのお手本として輝いています。今日 8 月 15 日をどのように意識し、過ごしていくか。その模範として、マリアを思い描くことは素晴らしいのではないのでしょうか。

わたしたちも、マリアに倣って神をたたえましょう。その中で、わたしたちの模範としてマリアを与えてくださったことを加えて神をたたえましょう。わたしたちが目指すべき天の国に、わたしたちのどんな目標の先にも、マリアは常にそこにいてくださいます。マリアに模範を仰いで、今日一日を過ごしましょう。

年間第 21 主日 (マタイ 16:13-20)

年間第 21 主日 (マタイ 16:13-20)

ゆるぎない信仰を見て、イエスは鍵を授ける

聖母被昇天の 8 月 15 日、今年は月曜日で翌火曜日が夕方のミサだったこともあってお休みを取らせてもらい、鯛ノ浦の実家に泊まりに行きました。実は末っ子でたった 1 人の妹がお産のために里帰りしておりまして、様子を見に行きたいという理由もありました。

妹はあと 1 カ月で出産の予定でして、よほどお腹が大きくなっているのだろうと見に行きましたら、わたしのお腹とたいして変りないくらいの大きさでした。わたしが適当に名前を付けてやろうかと妹に言いましたら、冗談じゃないと断られました。

さて今週の福音朗読は、ペトロがイエスへの信仰を言い表す場面です。ペトロが信仰を言い表した時の言葉と、イエスがペトロに約束してくれた天の国の鍵を授けることと、2 つについて考えてみましょう。ペトロはイエスへの信仰を次のような言葉で言い表しました。「あなたはメシア、生ける神の子です。」(16・16)

非常に短い信仰宣言です。一言で言い表した、と言ってもよいでしょう。そこには、「あなたはわたしにとってすべてです」という力強い信仰が込められているのだと思います。

もう 1 人、立派に信仰を言い表した弟子として、復活後のトマスを挙げることができます。彼は最初イエスの復活を信じなかったのですが、最終的に「わたしの主、わたしの神よ」(ヨハネ 20・28) と答えました。これも、「あなたはわたしのすべてです」という気持ちが込められていると思います。

ペトロの信仰告白を聞いたわたしたちは、まず、「あなたはわたしたちのすべてです」という信仰を表すことができるか、考えてみる必要があります。「イエスさま、あなたはわたしのすべてです」と言い表すことは、生活のすべての場面に、イエスさまへの信頼を優先させるということです。

家庭で、親が子供に何を第一だと教えるかは大切なことです。「勝つことがすべてだ」「何をしても自分が生き残ることがすべてだ」どんな原則を教えることも可能ですが、「イエスに信頼することがすべてだ」と教えることができたなら、どんなに素晴らしいことでしょう。

わたしも、大いに反省するところがあります。1 週間を区切りとして、「イエスがわたしのすべてだ」と考えて過ごしてきたかと振り返ると、実行できていないと恥ずかしくなります。釣りに行きたいなあと思えば鉄砲玉のように飛んでいくし、説教を今よりももっと時間をかけることができるのに、いよいよになるまで準備を後回しにするし、本当に恥ずかしい限りです。

わたしたちにとって、ゆるぎない確信のもとに「イエスさまこそわたしのすべてです」と言い切ることができるなら、わたしの生活は表面的には今のままでも中身がすっかり変わるのではないのでしょうか。

「イエスさま、あなたはわたしのすべてです。」このような信仰を言い

表したペトロに、イエスは天の国の鍵を授けてくださいました。この、天の国の鍵は、人々を天の国に入りにくくするための鍵ではなく、1人でも多くの人を天の国に案内するための特別な権能、そう理解してよいのではないかと思います。

わたしの中には、「この人の心をすっかり天の国に向かわせたい」と思っている人がいます。地上には目を奪われそうな魅力的なものがたくさんあって、わたしが思っているその人を特にひきつけているものが何であるかもおよそ分かっています。それでも、目を奪われている地上のものから離れて、天の国を見つめて生きる決心をさせたい人がいるのです。そのためには、わたしも、イエスから鍵を授けてもらう必要があると考えています。

「わたしはあなたに天の国の鍵を授ける。」この言葉を、わたしもイエスから掛けてもらいたいと思っています。天の国を一心に見つめて生きていくように導く魔法の鍵といいますか、そういうものを授けてもらいたい。そう思うのです。

そのためには、説教の初めに考えたことが深くかかわっていると考えます。すなわち、わたしの信仰です。「イエスはわたしのすべてです」と、揺らぐことなく言い切る。その信仰をイエスが受け入れてくださった時、わたしにも天の国の鍵が授けられるのではないかと考えています。

ペトロは、1人でも多くの人を天の国に導くために鍵を授かりました。わたしは、1人でも2人でも、天の国をひたすら見つめて生きる人を掘り起こすために、イエスから鍵を授けてもらいたいと切望します。そのためにも、いつも、どんな場面でもイエスが優先するという生き方を全うしたいと思います。

年間第 22 主日 (マタイ 16:21-27)

示された道はだれも選ばない道

最近いろいろとついてないです。大雨の中 250cc のバイクで走っていてバイクが故障し、業者に引き取ってもらおうと、その場で携帯電話から連絡を取っていたら、携帯電話も使えなくなりました。今バイクは何とか引き取ってくれる業者が見つかり、携帯電話は新しいものを手に入れましたが、ここ半年のデータを失ってしまいました。これ以上悪いことが続かないことを願っています。

バイクと言えば、道路を走る時、みなさんは前にだれかがいると邪魔だなあと思うのでしょうか。都合がいいなと思うのでしょうか。わたしはよほど急いでいるとき以外は、前にだれかがいるのは都合がいいなと思います。

なぜかと言うと、前の車が、いろんな情報を早めに知らせてくれるからです。障害物があって、それを交わさなければならない時、先にいる車やバイクが交わしている様子を見て、「あ、何かがあるのだな」と前もって知ることができます。速度を守るためにも、前の車についてけばかなり楽でもあります。そういうわけで、わたしは先に行く車がいた方が安心します。

長距離のロードレースに参加したことのある人は経験があるでしょう。長い道のりを1人で走り抜くよりも、だれか適当な人にくっついて走り、勝負どころまで力を温存させた方がはるかに楽に走ることができます。前に行く人の後ろにつくというのは、たくさんの点で有利なのです。

今週の福音朗読で、イエスはご自分の死と復活を予告し、それを聞いたペトロが「主よ、とんでもないことです。」(16・22)と答えました。

イエスはそのペトロを「サタン、引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思っている。」(16・23)とお叱りになります。この一連のやり取りは、「道に行くイエス」という見方で考えると、説教の初めに考えたことが生きてくると思います。

イエスがご自分の死と復活を予告したこと、これは、ご自分の歩く道を示したと考えることができます。復活に至る前に、十字架上で死ななければならない。このような道を示したのはイエスが初めてです。この先どんなことが待っているかわからないのですから、わたしたちの経験から言うと、イエスの後を従うことが大切です。

ところが、ペトロは「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません。」と答えました。これは、イエスに待っているこれからの道に、後についていく態度ではなくて、前に立ちばかり、道をふさごうとする態度だったのです。これから何が起こるかもわからないのに、イエスの前に立ちふさがっては、人は神の望みを全うすることはできないのです。

そこでイエスは、あえてペトロにきつい言葉をかけました。「サタン、引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思っている。」御父への道、救いの完成への道、復活への道を

歩き通すには、あなたはわたしに従うべきである。この道がどのように続くのか、わたしの歩く姿を見て、学びながらついてきなさいと諭しているのです。

イエスは明らかに、自分の後ろに引きさがれと求めます。イエスの後に従う時、イエスの思いを理解するようになります。なぜ、十字架上の死を通る必要があるのか、だれも分からないのですから、後に従って学ぶ以外にありません。

わたしたちは、イエスの後に従う生き方を受け入れることができるでしょうか。イエスの後に従う生き方が、御父の思いを知る生き方、イエスの思いを知る生き方だと、固く信じてついていくことができるでしょうか。

もしかしたら、イエスが示す道は、この日本で誰も選ばうとしない道かもしれないかもしれません。自分を捨てて、自分の十字架を背負ってついていく道です。誰も、喜んで選ばうとしないかもしれないかもしれません。

けれども、イエスが示す道を、イエスの後から従う人がいなければ、自分の命を救うこともできないでしょうし、多くの人の命を救うこともできません。だれか、イエスが示す道を選んで生きてみよう、と決心してほしい。心からそう願います。

本当に、だれも選ばうとしない道かもしれないかもしれません。だれかに相談しても、何でそんな生き方を選ぶの？そんなの間違っていると、ペトロのように心配してくれる人がいるかもしれないかもしれません。けれども、イエスが示す道は、確かにあるのです。

たとえばそれは、司祭を目指す道や、シスターを目指す道です。今この日本で、司祭やシスターを目指すと言ったらだれも理解してくれないかもしれないかもしれません。同級生も、学校の先生も、家族も、理解できないと言うかもしれないかもしれません。けれども、この道はイエスのために自分の命を失って、それを得る生き方です。

1人くらい、だれにも理解できない生き方を選ぶ人がいてもよいではありませんか。1人くらい、イエスのために命を失って生きる道を選んでよいではありませんか。だれも理解できない道を、もし選んでくれるなら、わたしはずっと応援します。物心両面で応援します。

そして、だれも選ばなかった道が間違っていないのだと、人々の前に証明しましょう。イエスが示した道を選んで、最後まで歩き通す人が現れるよう、ミサの中で願うことにしましょう。

年間第 23 主日 (マタイ 18:15-20)

受けた信仰、今いる教会のすばらしさを再認識しよう

最近ツキのないことがいっぱいですが、そんな中でも、嬉しいことが 1 つありました。木曜日は浜串教会と福見教会両方でミサをする日ですが、夕方の福見教会のミサで外国人がミサに参加していたのです。

わたしはてっきり、「あー、2 学期に入ったから、新任の英語教師がミサに参加しているのだな」と思いました。とても敬虔な人のようで、日本語のミサは理解できてなかったようですが、皆と一緒に立ったり座ったり、お辞儀をしたりしていました。

ミサが終わったので、わたしは「新任の英語教師ですか？」とだけ話しかけようと思いました。ところが、聖堂を出て来たその青年は、いかにも旅行者の格好をしていました。とっさに、「これは英語教師ではないな」と判断して「旅行者ですか？」と聞きますと、「自分は東京に住んでいて、日本のキリスト教の歴史を研究するために、長崎を回っている」という話でした。

もっと細かい話をしたのですが、この説教には直接関係ないので省略します。1 つ嬉しかったことと言うのは、わたしの英語が通じて、しかもその外国人から「あなたの英語はファンタスティックだ」と言われたことです。

実はわたしは英検 4 級しか持っていません。本当は 3 級を取る自信があったのですが、高校生の時同級生が 3 級を確実に受験しているのを見て、かっこつけて 2 級を受験したのです。ところが、1 次試験はパスしましたが、2 次の 1 対 1 での面接試験で舞い上がってしまい、1 点足りずに不合格になったのです。本当の力がないからです。

これでずいぶん凹んでしまい、以後英検を受けませんでした。そのため、資格としては 4 級止まりなのです。そんな 4 級しか持たないわたしでも、相手の質問を聞き取り、自分の言いたいことを何とか言うことができ、しかも通じたのですから、最近の不幸続きの中ではかなり嬉しい出来事でした。木に登りたいくらいの気分です。

この外国人の人との会話で、五島の教会の将来について、心配しているかという話が出ました。心配していると答えました。実例を挙げて、大変心配な状況であると話したかったのですが、わたしの言葉が足りず、うまく話せませんでした。そこは悔しかったです。その外国人とは、今後英語のメールでやり取りすることにしていますから、言い足りなかったことをきっちり伝えたいと、今は頭の中で言葉を探しています。

さて福音ですが、次のイエスの約束に注目してみました。「どんな願い事であれ、あなたがたのうち二人が地上で心を一つにして求めるなら、わたしの天の父はそれをかなえてくださる。」(18・19) わたしの今の願いは、五島に住んでいるカトリック信者皆が、五島でカトリックの信仰を守ることができて良かったと、心の底から言える信者になってほしいということです。

実は先の外国人との話の中で、五島の印象を尋ねたところ、彼は五島の

教会にいたく感激したと言っていたのです。彼も、キリスト教の信仰をすばらしいと理解していて、研究するだけではなくミサにも参加していたのですが、五島の教会の雰囲気、五島のカトリック信者の雰囲気には特別に感激したというのです。

信仰がすばらしいものだ理解することと、そのすばらしさからさらに感激するということとは違いがあります。信仰が立派なものだと理解していても、ちっともミサに来ない人はいくらでもあります。けれども、そのすばらしさに心を打たれた人であれば、たとえばミサに行かないで居続ける、祈りをなおざりにし続けることはできないのです。

そこで、なぜ五島に住んでいてカトリックの信仰を守ることがすばらしいことなのかを考えてほしいと思います。わたしたち五島のカトリック信者の祖先は、西彼杵半島の外海地方から来ている人がかなりいます。外海地方での迫害を逃れて、五島に移住してきたのです。

ではなぜ、五島に移住してきたのでしょうか。何か魅力があったから、何か惹きつけるものがあったから、五島に渡ったのではないのでしょうか。五島では迫害がないと聞いたのでしょうか？

鯛ノ浦にはキリシタン6人斬りの記録があります。他にもたくさんの迫害の言い伝えがあります。皆さん自身も、迫害を受けたかもしれません。下五島でも同じです。迫害がなかったわけではないと思います。

わたしが1つ考えるのは、外海では、産児制限を厳しく命じられていましたが、五島ではそのようなことはありませんでした。生まれたすべての子の命を考えて、五島に渡ったのではないか。そう思います。

もちろん、これがすべてではないでしょう。けれども先祖たちは、五島ではだれの命も見捨てることなく、信仰を守ることができることを心の底から喜んだのです。わたしたちにも、その気持ちは大いに必要なのではないのでしょうか。

五島にあって他にないものを、具体的に言葉にできる人になりましょう。わたしは五島で信仰を守ることができて本当に良かった。そう言える理由を、見つけましょう。わたしは40歳を過ぎてようやく、五島で信仰を養ってもらったので、司祭になれたのではないか。そう思えるようになりました。

五島にいる今の子供たちも、育ててもらった信仰は、五島だけのすばらしいものを持っているから、大事にきなさい、もしできるなら、偉大なことのために自分の信仰を用いなさいと言いたいと思います。

「どんな願い事であれ、あなたがたのうち二人が地上で心を一つにして求めるなら、わたしの天の父はそれをかなえてくださる。」道を探している子供たち、青年たちが、与えられた信仰のすばらしさを知り、偉大なことのために人生を用いるように、心を一つにして祈りましょう。

年間第 24 主日 (マタイ 18:21-35)

条件を付けずに人を赦そう

どうしてわたしたちは、人を赦せないのでしょうか。たとえそれが、仲間であっても、人を赦せないときがあるのはなぜでしょうか。わたしはいまだに、心の底から赦せていない仲間がいます。彼は今、県外にいて、わたしはその人ともう一度会うことができるかどうか分からないのです。すると、わたしは一生彼を恨みに思ったまま、わたしが死ぬか、彼が死ぬか、いずれにしても心から兄弟を赦さないまま、この世を去ってしまうことになるかもしれません。

その彼はもと大神学生で、わたしが記憶している限り、不仲になったきっかけは些細なことでした。大神学院で夕食後の休憩時間、広間でみんなテレビを観ていました。そのテレビの番組を、わたしがさんざんケチを付けながら観ていたのです。「そんなことが実際あるはずがない」とか、「そんなことができるのなら、だれだって実行しているはず」とか、番組を冷やかしながら観ていたのです。

すると彼は、相当がまんした挙げ句だったのでしょう。さまざまケチを付けていたわたしに彼が向き直って、「うるさい！黙れ！」と大声を上げたのです。大勢でテレビを観ているのですから、番組に対していろんな意見があるわけです。けれども、それをわざわざ口に出して、黙って観ている人たちの心を乱すようなことをすべきではなかったと思います。

なんと、それが原因で、わたしと、同級生のその彼とは、その後4年間も、一言も口をきかなくなりました。同じ大神学院に住んでいて、一言も口をきかずに、暮らす羽目になったのです。当然、一緒に行動することはなくなりました。仲間も別々、することも別々、一切口をきかずに済むような行動をそれぞれ取ったのです。

でもどこかでは、仲直りをしなきゃいけないなあと反省していました。同じ大神学生ですから。同じ、司祭を目指す仲間ですから。いつまでも仲違いしたままで生きていけるはずがありません。それはお互い感じていたと思いますが、なかなかチャンスが巡ってきませんでした。

仲直りのチャンスは巡ってきました。テニスをしていたときです。たまたま、練習相手をジャンケンで決めるときに、彼もそこにいました。そして、ボールを打ち合う相手に、彼が決まったのです。ほとんど、口をきくことはありませんでしたが、ボールを打ち合う中で、4年ぶりに相手を気遣いながら時間を過ごしたのです。

なぜ、こんなに簡単なことが今までできなかったのだろうか。そんなことを思いながらわたしはボールを打ち返していました。あるいは、彼はもっとずっと早くから、わたしのことを赦してくれていたのではないだろうか。そんなことも考えました。わたしの独り相撲で、彼は今も腹を立てている、そう思って仲違いをしたまま、ここまで来たのかもしれない。いろんなことを思いながら、長い時間テニスコートを挟んでボールを打ち合ったのです。

「人を失う」というのはとてつもなく大きな損失です。わたしは危うく、大神学院の同級生 10 人の中の 1 人を失うところでした。かろうじて、テニスボールを打ち合って、仲直りを果たしたのですが、本当のことを言うと、その時に仲違いの原因を詫びもしなかったし、これからまたよろしくねという簡単なあいさつさえも交わさなかったのです。

じつはそれが、一生の悔いになってしまいました。テニスをして長いわだかまりが解けたと思った矢先、彼は大神学院を退学し、家業を継ぐことにしたのです。夏休みが終わって大神学院に戻ってみると、彼の姿はありませんでした。わたしはどうとう、言葉で彼と仲直りをする事なく、卒業し、司祭になったのです。彼と会うことは、もう二度とないかもしれないと思うと、本当に申し訳なかったなあと悔やみきれません。きっと心の中では、お互いもう過去のことは赦していると思います。ですが、イエスの言葉は、わたしの心に突き刺さるのです。「あなたがたの一人一人が、心から兄弟を赦さないなら、わたしの天の父もあなたがたに同じようになさるであろう。」(18・35) ひとまずは、わたしと彼は赦された仲だと思っています。けれども、「心から」「心の底から」ということを考えると、そこまでではなかったかもしれない。そう思うのです。

たとえ話の中で、一万タラントン借金している家来が自分の仲間の百デナリオンの借金を赦さず、首を絞めた上に牢屋に投げ込んでいますが、その態度は、主人にとってははらわたの煮えくりかえるような思いだったことでしょう。日本のお金で数十億円の借金を赦されていながら、主人の恩を理解しなかったからです。

主人は、家来がこれからも自分の家来であることを大切にしていたので借金を赦してあげたのです。主人が赦さなかったら、多額の借金をした家来は、もはや絆を失ってしまうからです。主人と無関係の者、それは言い換えると、天の国と無関係の者になってしまう。そのことを哀れに思って、主人は借金を赦してあげたのです。

わたしは、過去のわたしの苦い経験と重ねて考えました。わたしの同級生は、わたしを何とか赦してあげようと思っていたのかもしれませんが。大神学生として、仲間外れにしたくなかった。けれどもわたしは、その思いを無視して、テレビを観ている全員の和を平気で乱そうとしていました。わたしを無関係な者にしたくなかったので、懸命にこらえていたのかもしれませんが。

けれども、「かわいさ余って憎さ百倍」と言いましょうか、ついに限度を超えたので、仲間として、わたしを諫めようとしたのだと思います。

「わたしがお前を憐れんでやったように、お前も自分の仲間を憐れんでやるべきではなかったか。」(18・33) わたしは今の今まで、自分を「仲間を赦さない家来」の立場に置いたことがなかったのですが、じつは今の今まで、わたしは「仲間を赦さない家来」だったのです。

何十億も借りのある人を赦してあげたのは、その人が天の国と無関係な者とならないためでした。わたしたちは、誰かを天の国と無関係な者にしてしまっていないでしょうか。お金絡みで、問題のある人が周りにいるかもしれません。お金の問題がない立場の人々が、もしその人を断罪してしまうと、その人は天の国と無関係な者になってしまいます。

「人を失う」ということはとてつもなく大きな損失なのです。
どうか、イエスがたとえ話で示された主人、父なる神の寛大さで、誰かを天の国と無関係な者にしないようにしていただきたいと思います。そのような態度は、いつまでも悔いの残る結果になってしまいます。天の父に倣って、わたしたちも心から兄弟を赦してあげることができるように、力を願うことにしましょう。

年間第 25 主日 (マタイ 20:1-16)

年間第 25 主日 (マタイ 20:1-16)

どんな人も神のぶどう園にかかわらせたい

今週の福音朗読から、おそらく、気付かずに読み飛ばしてしまうであろう一言を取り上げて、説教に充てたいと思います。それは、ぶどう園の主人が発した「友よ」(20・13)という言葉です。

ぶどう園の主人は、誤解している相手に対して、「友よ」と呼び掛けています。まる一日、暑い中を辛抱して働いた労働者の一人は、主人の思いを理解せず、不平を漏らしていました。その相手に、ぶどう園の主人は「友よ」と呼び掛けています。

福音書を調べてみると、「友よ」と呼びかけている場面が4か所ありました。そのうちの3か所はマタイ福音書の中に出てきます。あと1か所はルカ福音書で、「友よ、パンを三つ貸してください」(11・5)という言い方で、これだけがほかの3か所と違う使い方なので外します。

残るマタイ福音書の中の3か所ですが、1か所は今週の朗読部分です。2か所目は、「天の国をたとえる婚宴の物語」で、「友よ、どうして礼服を着ないでここに入って来たのか」(22・12)と王が婚礼の客に問いかける場面です。王の思いを誤解している相手に語りかけています。

3か所目は、イスカリオテのユダに対してイエスが語り掛けた言葉です。「友よ、しようとしていることをするがよい」(26・50)と言う場面で、ユダが兵士たちを従えてやってきて、イエスを捕えます。誤解しているユダに、イエスが語り掛けています。

つまり、マタイ福音書に限って言えば、「友よ」と呼び掛ける場面はどれも、誤解している相手に呼びかけていることになります。では、今週のぶどう園で雇ってもらった労働者は、何をどう誤解したのでしょうか。物語で不平を述べる労働者は、長時間働いた自分たちと、1時間しか働かなかった労働者とを同じ扱いにしたと言って不平を述べました。ぶどう園の主人が支払う賃金を、労働時間の報酬と見ていたのです。労働時間の報酬であれば、1時間しか働かなかった労働者が1デナリオンもらえるのであれば、自分たちはもっと多くもらえるだろうと考えるのは当然のことです。

ところがぶどう園の主人は、皆に分け隔てなく1デナリオンの賃金を支払っています。主人が賃金を支払う理由に考えたのは、どんな人も、ぶどう園の収穫にあずからせたい。すべての人を、ぶどう園で雇いたい。その証しとして、賃金を支払ってあげたのだと思います。

自分の考えに縛られると、人はしばしば違う人の考えを理解しなくなります。不平を言う労働者たちは、自分たちの考えに縛られて、ぶどう園の主人の考えが見えなくなっていました。わたしたちも、自分の考えに縛られると、わたしたちの唯一の主人である父なる神の考えが見えなくなる危険があります。

なぜイエスは、悪人も救おうとして十字架に磔になったのでしょうか。善人だけ救おうと思えば、十字架など必要なかったでしょう。でもこうした考えは、人間が自分たちの考えに縛られて、父なる神の考えが見えな

くなっているのです。イエスは、すべての人を天の国に招きたくて、十字架に磔にされました。だれも、天の国と無関係なものにしたくなくて、十字架に磔にされたのです。

なぜイエスは、「迷い出た羊」を探しに行くのでしょうか。「迷い出た羊」を探しに行く間、残りの九十九匹は多少危険にさらされてしまいます。それでも探しに行くのは、一匹でも自分の懐から、神とのかかわりから漏れる羊が出るのを望んでいないからです。

今週のたとえがわたしたちに求めているのは、自分の考えに縛られると父なる神の望みが見えなくなるから、十分注意しなさいということです。朝早くにぶどう園の主人に雇われていれば、後でいろんな時間に人が雇われて追加されているのが手に取るようにわかったはずです。

その時点で、ぶどう園の主人はどんな思いでおられるのかなと考える必要がありました。最後は1時間しか働かない人もぶどう園に送り込んだ。ぶどう園の主人の気持ちを考えるなら、ほんの少しの時間でも、ぶどう園にかかわらせたかったのだなぁと気づいたことでしょう。

現代には、ぶどう園の主人の思いを知ろうとする人は必要でしょうか。変わらず必要だと思います。何もしないで立っている人を、ほんのわずかの時間でもぶどう園に関わらせる、そんな働きをしてくれる人が現代にも必要です。

「この連中は、一時間しか働きませんでした。まる一日、暑い中を辛抱して働いたわたしたちと、この連中とを同じ扱いにするとはい。」(20・12) そう不平を鳴らす人に、「友よ、あなたに不当なことはしていない」とていねいに諭す人が必要です。

それは分かりやすく言えば、司祭や修道者たちです。ほんのわずかでも、何もしないで立っている人がぶどう園である教会に関わる人になるように働きかける。同じ扱いを不平に思う人に「友よ」と呼び掛ける。

これらは、ぶどう園の主人の思いのためだけに働く人でなければなかなかできない働きです。それができるのは、司祭や修道者たちです。今日のぶどう園の主人のように、みんなをぶどう園である教会に近づけてあげる人になりたいと願う子供たち・青年が手を挙げることを心から期待します。

またぶどう園の主人の思いを受け継ぐために子供の背中を押してくださる家庭に、心から期待します。今日は敬老者のためのミサですが、すべての人をぶどう園である教会に導こうと働くことは偉大な仕事だよと、子供や孫と一緒に語り合ってほしいと思います。

今、敬老者は年寄り扱いすべき人たちではありません。語り掛け、人を動かす十分な影響力を持っている人たちです。どうぞ、自分の身の回りで、偉大なことに目を向ける子供たちを応援してください。よろしくお願いいたします。

年間第 26 主日 (マタイ 21:28-32)

ぶどう園で働く素晴らしさをもう一度考えよう

わたしたちは目上の人に対して、3つの態度を取ることができます。1つは、「はい」と答えて、目上の人からの願いを受け入れること、2つ目は、「いいえ」と答えて、目上の人に反対する立場を取ること、そして最後に、「はい」と答えていながら、願いを聞いたふりをするということです。この3つの態度のうち、わたしたちは2つの態度を多く取っているのではないのでしょうか。「はい」と答えて、願いを受け入れる形と、「はい」と答えていながら、聞いたふりをするということです。「いいえ」と答えることは少ないのではないかと思います。

今週の福音朗読箇所は、ある人が息子二人にぶどう園へ行って働いてくれるように言った時の応答からたとえ話が始まっています。そして、いちばん大事な箇所は、父の言いつけに対して兄が「いやです」と答えたのですが、後で考え直して出かけた、この部分だと思います。

わたしは先に、自分たちはなかなか「いやです」とは答えないということ話をしました。父の言いつけですから、なかなか「いやです」とは言いにくいと思います。さらに、日本人は「いいえ」とはっきり言うのが苦手な国民で、「いやです」と言うくらいなら、しぶしぶ「はい」と答えるため、兄の「後で考え直して出かけた」という姿を理解するのは難しいかもしれません。

兄が「いやです」と答えた事情を推理しました。兄が「いやです」と答えたのは何か理由があったのでしょうか。以前にぶどう園で働いたことがあるのかもしれませんが、あんな辛い仕事はいやだ。そう考え、「いやです」と答えたとしても無理はありません。

または、自分に予定があって、重なってしまったのでしょうか。友人と宴会を開く予定があったのでしょうか。自分にとって楽しい予定が先に入っていたら、たとえ父の願いでも断りたくなるのは理解できます。

兄が「いやです」と答えた時、父親はどう思ったのでしょうか。父親の反応は記されていませんが、兄の事情を十分理解していた可能性があります。父親ですから、息子がどんなことを考えているのか、ある程度は理解しているでしょう。「いやです」と、生れてはじめて口答えしたのかもしれませんが。すると、息子に「いやです」と言わせた事情くらいは思い至るのではないのでしょうか。

父親は兄の決断に任せます。兄がいったん決めたことだから、それを尊重します。自由を尊重して、息子であっても一人の人間として、尊重してくれたのだと思います。

いったん「いやです」と答えた兄は、後で考え直して出かけました。父親は「いやです」と言った自分を責めたりしませんでした。自分で決めたことを、尊重してくれました。

「いやです」と言ったことを責められなかったことで、却って兄はよく考えることができたのではないのでしょうか。父は、どんな思いでわたしにぶどう園で働くように声をかけたのだろうか。わたしが今抱えている

事情も知った上で、頼みに来たのではないだろうか。父の穏やかな態度が、後で考え直すきっかけを作ってくれたのかもしれない。

このたとえば、当時洗礼者ヨハネの証しを受け入れなかった祭司長・長老たちと、ヨハネの証しを受け入れ、悔い改めた徴税人や娼婦にあてて話したものでした。

たとえば話の弟は、一見言うことを聞いているかのような態度を取りましたが、聞いているふりをしていただけでした。聞いているふりだけするのは、「いやです」と答えることよりも罪深いような気がします。

一方徴税人や娼婦たちは、自分たちが洗礼者ヨハネの証しに背を向けて生きてきたことを知っていました。けれども洗礼者ヨハネがだれも差別することなく義の道と呼びかけてくれたので、後で考え直して悔い改めたのです。

ぶどう園である神の国は、招かれなければ入ることはできませんが、招かれても、「いいえ」と断れば入れません。洗礼者ヨハネの証しを聞き入れた人々は、それまでの生き方は「いやです」という生き方だったのですが、考え直して悔い改めました。彼らはぶどう園である神の国に、後で考え直したことで先に入ることができたのです。

宗教指導者たちは、2度のチャンスがあったのに無駄にしてしまいました。洗礼者ヨハネの証しを聞いたふりをしてやり過ごし、徴税人や娼婦が悔い改めたのを見ても、自分たちには関係がないと無視したのです。ではわたしたちはどうでしょうか。わたしたちは、素直に「はい」と聞き入れることができず、「はいはい」と言って聞いたふりをする人が多いのではないのでしょうか。もしそのままで終わってしまったら、わたしたちはかつての宗教指導者と同じ過ちを犯すことになります。わたしたちにも、後で考え直すチャンスが残されているのです。

親子の間で、夫婦の間で、職場で、日常の様々な場所で、「はいはい」と聞いたふりをしている場面がないのでしょうか。相手の願いが誠実なものだと知っているなら、後で考え直してみましょう。「ぶどう園へ行って働きなさい」とお願いしている人は、あなたのことを見込んでお願いしているかもしれません。

後で考え直すチャンスは、無限にあるわけではないと思います。もしも相手の願いが洗礼者ヨハネの証しのように真剣なものであったなら、たとえば「いやです」と答えても、後で考え直すことはぜひおこなってほしいと思います。

ぶどう園に行って働く、ぶどう園のために働くことのすばらしさを、あらためて考える機会を与えてくださいと、このミサの中で願うことにしましょう。

年間第 27 主日 (マタイ 21:33-43)

収穫の時期を一緒に過ごす僕

先週司祭団のソフトボール大会に出かけてきました。五島チーム、長崎チーム、佐世保平戸チーム、浜口司教さま率いる大分連合チームの4チームで試合をしました。優勝は五島チームでした。

五島チームはメンバーが15人くらいいましたが、浜口司教さまが連れて来た大分連合チームは7人しかいなくて、五島チームから選手を譲ってくれという話になり、五島チームでレギュラーに入れなかったわたしは、真っ先に大分連合チームに奉公に出されました。

試合は、初めに佐世保平戸チームと五島チームから始まって、五島チームが力の差を見せつけての勝利でした。次に長崎チームとわたしが奉公に出された大分連合チームとで試合をしまして、接戦で大分連合チームが長崎チームを下しました。このときわたしに2回打席が回ってきまして、最初の打席でヒットを打てたので安心しました。

午後からは、1敗したチーム同士の試合を先に始めまして、長崎チームが勝利。これで佐世保平戸チームが2敗、長崎チームが1勝1敗です。次に午前中に1勝したチーム同士試合をして、どちらか2勝したチームを優勝とすることになりました。

わたしは大分連合に奉公に出されていましたが、優勝をかけた午後の試合では呼び戻されて五島チームに入り、代打で呼ばれるのをじっと待っていました。試合は一方的な展開で、五島チームが初回に9点入れて、早々にわたしに代打が回ってきました。

来た球を思い切り強打したのですがファーストの浜口司教さまが逆シングルでキャッチして、ヒットを1本損してしまいました。五島チームの選手の中には、本番でも力を発揮した選手もいましたが、わたしのようには本番では結果につながらず、苦戦した人もたくさんいました。

それでも、全体としてはけがもなく、本当に楽しい大会でした。試合の終盤にはわれらが司教さまも応援に駆け付けて、嫌がるのを無理に打席に立たせたりもしました。ヒットは打てませんでしたが、出てくれただけで大盛り上がりでした。総じて、楽しい大会になりました。

今週の福音朗読ですが、押さえておきたい点を話してみたいと思います。ぶどう園の主人は、「収穫の 때가近づいたとき、収穫を受け取るために、僕たちを農夫たちのところへ送った。」(21・34)とあります。収穫のちょうど時ではなくて、「収穫の時期が近づいた時」ということは、もう少ししたら収穫という意味です。まだ収穫できないのに、なぜ僕たちを送ったのでしょうか。

考えてみたのですが、僕たちは収穫の時期が近づいたころから農夫たちと一緒に過ごし、農夫の苦労と一緒に分かち合い、農夫の気持ちを理解しようとして、早めに送り込まれているのかもしれない。収穫だけを持ち去る冷たい主人ではなくて、一緒に苦労も分け合う主人の姿を教えたかったのではないのでしょうか。

ところが、農夫たちはその僕たちを受け入れません。一緒に苦労を分け

合いたい。一緒に喜びを分け合いたいという主人の思いを農夫たちのよこしまな気持ちで無にできてしまいます。同じ思いで、他の僕たちを送りましたが、それでも主人の思いを信じようとしませんでした。

ぶどう園の主人は最後に、自分の息子を農夫のところに送ります。本当に、農夫たちと喜びあいたいという気持ちの表れでした。けれども、その最後の願いも踏みにじられてしまいます。

実はこの僕たちは旧約の預言者たちでした。神は、神に従う生き方を人間と分かち合いたくて、預言者たちに義の道を示す活動のために送りましたが、イスラエルの人々は預言者を常に迫害しました。神に従う生き方を受け入れて喜びを分かち合おうとしなかったのです。

最後には、独り子イエス・キリストを遣わして、神に従う生き方は喜びにつながりますと知らせたのですが、イスラエルの人々はイエスの示す生き方を拒み、エルサレムの町はずれのゴルゴタでイエスを十字架にかけてしまいます。

預言者を送り、時間をかけて、神の望みを示して、幸せな生き方を喜び合いたかったのに、人々はそれを拒みました。イエスも、たとえを語り、わたしたちのもとに来て一緒に暮らし、時間をかけて神の望む生き方を示してくれました。

わたしたちが、もしイエスの示す生き方を拒み続けるなら、ぶどう園で働く農夫と同じ過ちを犯すことになります。そして、ぶどう園の外に放り出されてしまいます。ぶどう園の主人として現れる父なる神もおん独り子イエス・キリストも、実りを催促したわけではありません。苦労も分かち合うから、喜びを分かち合いたいと期待しただけなのです。

精一杯の世話をしても、分かってもらえないなら悲しいものです。わたしたちにも同じ経験があるかもしれません。そんなとき、「親の気持ちがどうしても分からないんだ」と腹を立てたりするかもしれません。もし、こうした経験を持っているなら、わたしは神に、同じ思いをさせていないか、考えることにしましょう。

神は、精一杯の世話をして、時間の猶予も与えて、わたしたちが神の望みに応えてくれるように待っています。神の深い思いやりに答える生き方を選び取ることができるように、ミサの中で願いましょう。

年間第 28 主日 (マタイ 22:1-14)

イエスが求める婚礼の礼服を着続ける

来週の土日でカトリック神学院、昔で言う小神学校の体験入学がありまして、対象が5・6年生なのでひとまず全員行っ来てい声かけました。高井旅の子はどうしても行けない理由があるそうで、それでは仕方がないということになり、今年は5年生1人、6年生2人を送り込むことにしました。

九州商船は小学生だけを船には乗せてくれないらしくて、同伴の大人を1人お願いしていくことにしています。子供たちが何を見て来て、どのように感じるのか、やはり主任司祭としては気になります。

わたしたちの時代は、もちろん体験入学などというものはありませんでした。体験もせずに新学校に入学して、ある同級生は家が恋しくてしくしく泣き、ある同級生は神学校にいらなくなるために悪さをし、ある人は神父さまになる気はないのに居心地がよいとかいろんな勉強ができるとか下心があって留まり、いろんな形で中学高校時代を過ごしました。

それでも、神さまは何人かは、ご自分の身分を受けて働く司祭を選ばれ、イエスのために喜びも苦しみも分かち合う人を最終的に残してください。わたしたちは入学時点でたぶん17人いたと思います。

翌年編入生があって18人、その中で司祭になったのは4人、今でも司祭であるのは3人です。これまで14年の準備期間と、その後の19年半の司祭生活を思う時、福音朗読のいちばん最後、「招かれる人は多いが、選ばれる人は少ない。」(22・14)というみ言葉は、考えさせられるものがあります。

イエスの最後の締めくくりの言葉に至るまでに、たとえ話が用いられていました。ある王が、王子のために婚宴を催しましたが、招待された人々はそれを断りました。

本来招かれるべき人々は、招待状を書くほどの身分であるとか、学歴であるとか、社会的地位であるとか、いろんな優先事項があったに違いありません。けれども、彼らは王の招待を最優先には考えませんでした。

教会が保たれていくために、信徒を導く司祭が必要なことは百も承知ですが、有名大学に入れるとか、将来会社の後を継いで大勢の社員を引き連れていく人とか、何かの分野に長けている人たちは、ほとんどの場合社会での活躍が優先となってしまいます。まずこの時点で、社会で活躍することを目指す人は神学校に入学しないのです。

それでも王は婚宴に人を招くために、見かけた人は善人も悪人も皆集めて来ます。神学校に入学することになる子供たちも、社会貢献が見込まれる最優先の家庭からではなく、通りに普通に住んでいる家族の中から、空の手で、神学校に入学します。神学校に入ったら、たとえにあるような、礼服を着ていない人はほうり出されることになります。同級生18人のうち、1人は中学3年生で病気のために命を落としました。

た。中学3年生になり、高校受験を控えると、神学生として上の学年に上がるのではなく、公立高校に入って別の道を目指す人が現れてきます。それでも、12人は留まりました。高校3年生の時に7人減って5人となり、5人で大神学校に入り、4人は司祭に叙階されましたが、今は3人です。

いろんな場面で、人数が減っていくのを今振り返る中で、「礼服」とは何だったのだろうと考えました。司祭に期待される部分を拾ってみると、祈る人という部分が必要ですが、わたしはそんなに祈る人でもないし、今年などはこの19年半の司祭生活の中で自分の教会でミサをするのがいちばん少ないのですから、祈る人ではないのです。去った人の中でわたしより祈る人はいたのです。

よく学ぶ人という部分も必要でしょう。わたしよりもよく学んでいた人が、中学で1人、高校で2人別れていきました。3人は、常にわたしよりも成績が良かったのに、選ばれませんでした。礼服は、よく祈るということだけでもないし、よく勉強するということだけでもないようです。

まじめな人柄という部分も必要でしょう。それもまた、そのまま礼服を意味するわけではないようです。2年前に、南山高校卒業20周年で同窓会が開かれ、懐かしい人に会いましたが、彼が母親の介護をするために神学校を去ったことを初めて聞き、ふまじめだったから去ったのかと思っていたわたしは、申し訳なかったなあと思いました。ふまじめと言うなら、わたしは同級生の中でいちばんふまじめです。

結局、「礼服」とは、「わたしがあなたを選んだのだ」という招きを最優先にする気持ちではないかと思いました。自分でついていくには、ふさわしくないと感じるが多々あります。大きな躓きを抱えていたり、判断を誤って神の望みを踏みにじったりしているのですが、それでもイエスは「わたしがあなたを選んだのだ」と仰ってくださいます。

選んでくださったことで、喜ぶこともあります但し苦しむことはその数倍あり、しばしば悩み、うつむいてしまうのです。申し訳ないと、何度も思いますが、「わたしがあなたを選んだのだ」という声を、最優先にするしか生きる道を考えられないのです。そういう繰り返しが、「婚宴に着る礼服」なのではないでしょうか。

結婚生活にも、修道生活にも、「婚礼に着る礼服」が必要でしょう。結婚した人が苦しまないということは決してありません。修道生活もそうです。けれども、苦しみがあっても、「わたしがあなたを選んだ」と仰るイエスの言葉を、最優先にするしか生きる道はないと考えてほしいのです。

あなたが、置かれた生活を全うするには、イエスの招きを最優先にする、その思いを「礼服」として着続ける必要があると思います。神学院体験入学を来週体験する子供たちが、自分にふさわしい「礼服」を見つけ出すことができるように、祈り続けたいと思います。

年間第 29 主日 (マタイ 22:15-21)

神のものなのだから、神にきっちり返す

すでにご覧になった方もいらっしゃるかも知れません。ちょっと派手なバイクを手に入れまして、これから乗り回そうと思っています。以前乗っていたものは廃車にしまして、今度は乗りやすいものに変えました。

フェリーで運び込みましたが、出発の 20 分前には待機していないといけないのに、出発 10 分前になってターミナルに帰ってきてみると、係の人がわたしを手招きでせかしていました。さらに都合の悪いことに、大波止ターミナルの館内放送で、「バイクでご出発のナカダコウジさま、バイクでご出発のナカダコウジさま、至急バイクにお戻りください。」と放送しているのではないですか。ターミナルの中も外も、スピーカーで声が響いていました。きっと、わたしの名前を知っている人もいたでしょうから、えらい恥をかきました。

今週は「皇帝への税金」という問題を持ち込んで、ファリサイ派の人々がイエスを陥れようとする場面です。イエスは彼らの罠を見抜き、それ以上に大切なことにも目を向けさせるために、次のように答えました。「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」(22・21)

このイエスの答えは、いろいろに説明できるようです。そのすべてをここで紹介はできませんが、可能な説明のうちの 1 つを参考に、話してみたいと思います。イエスは質問に答える前に、銀貨を見せなさいと願って、「これは、だれの肖像と銘か」(22・20)と確認しました。

「肖像」とは、「似姿」のことです。人間には、人としての似姿と、神の子としての似姿があると思います。ですから、人としての似姿がある以上、人間からの要求に応えなければなりません。ローマに税金を納めることを苦々しく思っている、普段の生活ではその銀貨を使って買い物をするのを何とも思っていないのですから、皇帝が神とあがめられていたとしても、気にせず税金を納めれば良いではないかと仰ったのでした。

それよりも大事なことは、人間には神の子としての似姿があって、神の子として、神に果たすべき責任は果たしなさいというのがイエスの答えの中心です。イエスの答えは、「神のものは神に返しなさい。」こちらのほうに重きを置いているという解釈に、わたしも同じ意見です。

イエスが「神のものは神に返しなさい。」と仰ったとき、ファリサイ派の人々はどう思ったのでしょうか。きっと、自分たちが神に返すべきものを返していないということにはっとさせられたのだと思います。宗教指導者でありながら、律法の解釈にばかり熱中して、本来神に返すべき「愛」を、なおざりにしていることに恥じ入ったはずです。わたしたちも、今日のイエスとファリサイ派のやりとりを、自分のこととして考えてみましょう。わたしたちが生きている社会で、社会人

として果たすべきことはほぼ果たしていると思います。しかし、神の似姿として、わたしたちが果たすべきことが、きちんと果たされているでしょうか。

そこで、神の似姿が刻まれているわたしたちは、何が神のものなのかを見極めておく必要があります。すると、神に返すべきものも見えてくるはずです。まず、わたしたちが神に祈るきっかけを思い起こしましょう。わたしたちが今朝目を覚ましたということ、これは十分に神に祈るきっかけとなる出来事です。

わたしたちは自分で自分に今日を与えることができません。それは神が与えてくださるものです。神が与えてくださらなければ、わたしたちは今日を迎えられないのです。すると、今日という日は、神のものであって、本来わたしのものではないのです。与えていただいた1日を感謝するために、神のものである1日に感謝するために、時間をちょっと作って祈る、神に返すことはごく自然なことではないでしょうか。

次に、神のために働くということを考えてみましょう。わたしたちが現在手に入れている地位とか、安定した暮らしとか、ほとんどはわたしたちの手で、努力して手に入れたものだと思います。ただ、今日まで働き続けることができたことや、今日までの暮らしをだれにも妨げられずに楽しむことができたのは、もとはといえば神の保護があったから、神の見守りがあったからではないでしょうか。

そうであれば、わたしたちは、今日までの暮らしに感謝して、神のために何かをしてお返しすべきだと思います。神のために働くべきだと思います。もちろん多くの人が、神のために何かをしてくださっているのですが、家族全員で、小教区全体で、地区全体で、教区全体で、神のために何かをしてお返ししているでしょうか。

そこにさらに、「神のものを一切合切神にお返しする」という生き方があっても良いと思います。わたしたち家族が皆、神のためにすべてをかけてお返しすることはできないけれども、家族の中から1人、神にすべてをかけてお返しする人を準備します。小教区がすべてをかけてお返しできないけれども、小教区から1人、神にすべてをかけてお返しする人を準備します。そういう生き方があっても良いと思うのです。

イエスは今のわたしたちにも、「神のものは神に返しなさい」と呼びかけていると思います。わたしたちが寛大に、「もともとすべてが神のものなのだから、神にお返ししましょう」と気持ちを切り替えてみる。そんなチャンスをいただけるように、ミサの中で祈ることにしましょう。

年間第 30 主日 (マタイ 22:34-40)

律法全体と預言者が基づいているものとは

婦人会のミニバレーの試合があるので、ふだんよりも 10 秒だけ話を短くしています。バイクの話の続きを 1 つします。小学生をカトリック神学院 1 日体験入学に送りました。とても楽しい体験ができたそうです。日曜日の午後 3 時 15 分にジェットfoilで奈良尾に到着するので、ちょっとびっくりさせてやろうと思ってバイクで迎えに行きました。リュックサックにもう 1 つヘルメットを入れて、本人が乗りたいと言ったら乗せてあげようという魂胆でした。

奈良尾ターミナルに引率の大人と体験入学を終えた子供が帰って来たので、「ご苦労さん。バイクに乗って帰らないか？」と尋ねると「乗る」と言ってくれました。「ヘルメットがリュックの中にあるので、取り出してかぶってくれ」と言いますと、しばらく探した揚句に「神父さま、何も入っていませんよ」と言います。そんなはずはないと言いましたが、「神父さまのリュック、ファスナーが前回になっていますよ」と言われ、何かが起こったのだと悟りました。どうやら、途中でヘルメットを落としてきたようです。

ガッカリして、引率の大人に子供をお願いして、失意のうちに帰り始めました。ヘルメットは、確かに落ちていました。道路の中央、白線の上に置いてあったのですが、落ちているヘルメットを誰か親切な人が中央の白線の上においてくださったのだと思います。またもや恥をかいてしまいました。

さて喜ばしい話が 1 つあります。日本の典礼の暦に、福者ヨハネ・パウロ 2 世教皇の記念日を祝う認可がローマから与えられまして、10 月 22 日、お祝い日となりました。わたしたちが目で見えた人が、福者として祝うことができるのはすばらしいことだと思います。

マザーテレサも、コルベ神父も、あまり見た人はいないと思いますが、ヨハネ・パウロ 2 世教皇を見た人はたくさんいるでしょう。これは、ヨハネ・パウロ 2 世のような生き方が現代に求められていること、わたしたちの模範としてとても必要であることを意味しているのだと思います。今年 10 月 22 日は土曜日で、浜串教会でのミサでした。来年 10 月 22 日は月曜日ですので、福見教会で祝うことになります。

今週の福音に目を留めましょう。イエスはファリサイ派のうちの 1 人、律法の専門家が「律法の中でどの掟が最も重要でしょうか」と問いかけた時、神を愛することと、隣人を自分のように愛することを示した上で、「律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている」(22・40)とお答えになりました。

問いかけと答えの、わずかな違いが実は大きな違いです。質問をしかけた律法の専門家は、「律法の中で」と尋ねました。これは、律法だけを取り出して考えていることをうかがわせます。それは、「ミサの中でどこが大切ですか」と、ミサの部分にこだわっているようなものです。ミサのすべてが大切ですが、パンとぶどう酒の聖別の言葉の部分に、ミサ

全体は基づいていると答えたいと思います。同じようにイエスも、律法だけを取り出しての議論には意味がないとして、「律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている」とお答えになったのでした。

イエスが言う「律法全体と預言者」というのは、旧約聖書すべてを表す表現です。神の掟と、その掟を守ろうとしてきた神の民の歴史全体を指しているのです。イエスが言った「律法全体と預言者」という表現には、律法の専門家が思っていた狭いとらえ方ではなく、神が歴史の中で行った救いの業全体が含まれていたのです。

ところで、「律法全体と預言者」という表現は、イエスご自身にも当てはまるとわたしは思っています。イエスは、神が歴史の中で行った救いの業の完全な形です。神は、歴史の中で様々な救いの業を行いました。御子イエスをこの世に遣わしたことが、救いのわざの究極の働きです。そしてイエスは、ただ1人、「神を愛すること」と「隣人を自分のように愛すること」を完全に果たされたお方でした。

すると、次のように言えるのではないのでしょうか。「律法全体と預言者は、『イエス・キリスト』に基づいている。」つまり、神である主を愛し、隣人を愛することを極みまで生きたイエス・キリストこそが、「最も重要な掟」だということです。

イエス・キリストが「律法の中で最も重要な掟」であるなら、わたしたちには何が必要でしょうか。それは、「イエス・キリストをもっとよく知ること」です。あらゆる方法で、イエス・キリストをよりよく知るように、努力しなければなりません。祈りの時に、わたしたちは「祈るイエス・キリスト」を知ることができます。わたしたちの心がけひとつで、ただ単に祈るだけではなく、父なる神にひたすら心に向けるイエス・キリストを身に受けることができるのです。

わたしたちはだれかに対して教えることがあります。教会学校で子供たちに教える、親が子に対して教会の務めを教えるなどです。そうした時に、わたしたちは単に教えるだけでなく、「教えるイエス・キリスト」を身に受けることになります。わたしたちの信仰生活の様々な場面が、実はイエス・キリストをよりよく知る機会となり得るのです。

「律法全体と預言者」神がわたしたちに示そうとするすべてのものは、実はイエス・キリストに基づいています。イエスをよりよく知るために、いろんな場を活用しましょう。主日のミサ前に続けている聖書朗読に耳を傾ける時間も、どうぞ活用してください。そして、イエス・キリストをより身近に感じることで、「あらゆることが、イエス・キリストに基づいています」と、人々に証しすることへと、今週一週間を整えていきましょう。

年間第 31 主日 (マタイ 23:1-12)

「実行するだけで、言わない人」のいる教会

先週は上五島地区カトリック婦人会のミニバレー大会ご苦労さまでした。まずは、練習のときから参加してくださった皆さんと、当日応援に来てくださった方々にお礼申し上げます。

結果は、浜串教会が強いところとばかり当たって、グループ B の 4 位、福見・高井旅は練習以上の力が本番で出て、チーム始まって以来のグループ A 準優勝でした。わたしは福見・高井旅からどこかに連れて行くとせがまれています。嬉しい悲鳴です。

今週の福音朗読に、「あなたがたのうちでいちばん偉い人は、仕える者になりなさい。」(23・11) とあるのですが、浜串チーム、今回はほかのチームに仕える者になってくれたのだと思っています。仕える者になってくれたのですから、いちばん偉いと思います。

では福音の学びに入りましょう。福音書で、だれのことかをはっきり書かないときがあります。イエスが語った山上の説教、「心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。」(マタイ 5・3) 以下の部分では、はっきりだれと指定していません。

似たようなことは、たとえ話の中でも出てきます。「旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。」(ルカ 10・33-34) 「あるサマリア人」と書いてはいますが、それがだれのことかは実際には伏せられています。今週の福音朗読でもそうです。「あなたがたのうちでいちばん偉い人は、仕える者になりなさい。だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」(23・11-12) 「あなたがた」と言っているのに、弟子たちのだれかを言っているように聞こえますが、ではだれなのかと突き詰めると、断言はできなくなります。

こういう場合、1 つの考え方を持っているといよいと思います。それは、わたしたちのうちのだれかを探すよりは、イエス・キリストに当てはめるほうが分かりやすい、ということです。「心の貧しい人々は、幸いである。」もちろん当てはまる人がいるとは思いますが、まずそれは、イエス・キリストに当てはまっている生き方です。

旅をしていたあるサマリア人の取った行動は、だれかも同じような態度を取るかもしれませんが、真っ先に、イエス・キリストがこのたとえのサマリア人の態度を取ってくださった方です。そのように考えると、「仕える者になりなさい」というのも、イエス・キリストがそもそも「仕える者」となってくださったのだと考えると、大きな学びを得ることができると思います。

ですから、聖書をぼちぼち読み続けている方にお勧めしたいのは、「これはだれのことなのかなあ」と考えるようなときは、まずイエス・キリストに当てはめてみると、理解が深まりますよ、ということです。どんな人に当てはめるよりも、イエス・キリストに当てはめて考える

方が、聖書の生き方は説明がしやすいのです。

では今週の朗読に当てはめて、イエスはどのようにして「仕える者」となってくださったのでしょうか。いちばん印象的な場面は、最後の晩餐で、弟子たちの足を洗う場面でしょう。シモン・ペトロは「主よ、あなたがわたしの足を洗ってくださるのですか」（ヨハネ 13・6）と驚いています。今週の福音朗読を逆手に取って表現すると、「そのすることは、すべて人に見せるためのものではない」となるのでしょうか。

イエスの「仕える姿」には、自分の利益や満足のためではない、自分を無にした「無私」の姿があります。さらに言うと、人に見せない、「隠れた奉仕」の姿があります。この2つの点は、「仕える者」になるための大切な点かもしれません。これも朗読箇所からヒントを得て言うと、「実行するだけで、言わない」態度と表現できるでしょう。

そこで今週の福音朗読からのまとめとして、「実行するだけで、言わない人」という姿を持ち帰りたいと思います。律法学者やファリサイ派の人々と正反対の態度、イエスが常に実行した態度です。わたしたちも、「実行するだけで、言わない人」でありたいと思います。

わたしがこれまでに出会った人の中で、「実行するだけで、言わない人」を2人紹介しましょう。1人は、これまで何回か話に出したかもしれませんが、わたしが神学校の中学生だったときに出会ったおじさんです。母親が弟の急病で有川病院に行き、奈良尾行きのバスが来る時間だったにもかかわらず、わたしはバス賃を受け取らずに取り残されました。

中野のバス停でションボリしていると、「あんた神学生やろ」と声をかけてくれる人がいました。奈良尾まで行けなくなったのだと話すと、1万円札を渡してくれて、「これでタクシーを捕まえて奈良尾に行きなさい」と言ってくれたのです。「おじさん名前は？」と尋ねましたが、「おじさんはおじさんたい。心配せんちゃよか」と言って、わたしを助けてくれました。一生の恩人ですが、今もだれなのか分かりません。

もう1人は、病人訪問で出会ったおばあちゃんです。この人は自分の病氣のために祈ることも忘れて、自分の所属している教会が栄えますようにと、ひたすら祈ってくれているのです。わたしがその話を聞くことがなければ、またわたしがこの話を公にしなければ、きっとだれにも知られず、ひっそりと祈り続けていたことでしょう。このおばあちゃんもまた、「実行するだけで、言わない人」ではないかと思います。

わたしたちの教会は、「たがいに仕え合う者」の集まりでしょうか。「実行するだけで、言わない人」がどこかにいるのでしょうか。そうした人が、本当の意味で教会を支えてくれているのだと思います。「たがいに仕え合う者」の集まる教会、「実行するだけで、言わない人」がいる教会は、イエスの目に価値ある教会です。わたしたちの教会も、そんな目標をもって関わっていきましょう。そのための勇気と行動力を、ミサの中で願いましょう。

年間第 32 主日 (マタイ 25:1-13)

自分の分の油を常に保つ

年間の主日も、残り少なくなってきました。今週が年間第 32 主日、来週が年間第 33 主日、再来週の「王であるキリスト」で年間の主日も終わり、そのあとは待降節で新しい典礼の暦が始まります。

年間の主日が終わりに近づくと、この 1 年の信仰の面での歩みを振り返ることも考えておくとういいます。わたしは、待降節から始まった教会の 1 年の歩みを、どのように進めてきたでしょうか。何か目標をもっていた人は、目標を達成できたでしょうか。そういうことを、これから残りの 2 週、3 週の間で考えてみましょう。

今週の福音朗読も、典礼暦も締めくくりに近づいているという見方で読むとき、見えてくるものがあると思います。今週は「十人のおとめ」のたとえですが、十人のおとめたちは花婿を迎えに出て行きます。おとめは十人、花婿は 1 人ですから、ここで言うおとめは、「教会」を指し、花婿は「イエス・キリスト」を指していると考えべきです。

花婿の到着が遅れたために、十人のおとめたちは皆眠り込んでしまいました。教会が、イエス・キリストの到着を待ち切れずに眠り込むというのは、一心にイエス・キリストに心を向けていない姿です。

本来は、わき目も振らず、気を緩めることなく、イエス・キリストの到来を待ち望むべきですが、人間の弱さのために心が向いていないこともあるかもしれません。そのたびに花婿であるイエス・キリストはわたしたちのもとに来て、準備を促します。「花婿だ。迎えに出なさい。」(25・6)

ところが、十人のうち、五人は愚かで、五人は賢いおとめです。わたしたちも同じかもしれません。神の民の半分は準備が不足していて、半分は備えができています。確かにそうかもしれません。ともし火は、花婿であるイエス・キリストがここにいると、周りの人に知らせるものです。人によってその中身は違っているわけですが、どんなときにも祈りをためらわないことは、イエス・キリストがここにいることを知らせる 1 つのともし火だと思います。また、服装や、態度や、話す言葉、何を大切に考えているかなども、イエス・キリストの現存を知らせるともし火になると思います。

こうしたともし火は、油を切らしてしまうといつか消えてしまいます。ともし火を絶やさないための「油」とは、いったい何なのでしょう。答えを探す時、頭の中を探してはいけません。答えはいつも、朗読した聖書の中から探すべきです。そこで、もう一度油についておとめたちが何を語ったかを確かめましょう。

「賢いおとめたちは、それぞれのともし火と一緒に、壺に油を入れて持っていた。」(25・4) 本来、ともし火を絶やさないために、常に油を用意していなければならないのです。油はまずは、常に身近に用意しておくべきもののようです。

愚かなおとめは、「油を分けてください。わたしたちのともし火は消え

そうです。」(25・8)と賢いおとめにすぎります。けれども賢いおとめたちは、「分けてあげるほどはありません。それより、店に行って、自分の分を買って来なさい。」(25・9)と答えました。油は、自分の分は自分で用意しなければならないこともここで分かります。

この2つの点を踏まえて、「油」は何を意味しているのでしょうか。油があって、ともし火となる。油があって、イエス・キリストを人々に知らせることができる。すると、油は、わたしたち1人1人の「善い行い」のことかもしれません。

わたしたちは、「善い行い」を常に身近に用意する必要があり、しかも、自分の分は自分で用意しなければならないということになります。愚かなおとめたちが店に行き自分の分を買いに行くというのは、「出かけて行って善い行いを実践して、それから戻ってくる」ということなのでしょう。

さて、「愚かなおとめたちが買いに行っている間に、花婿が到着して、用意のできている五人は、花婿と一緒に婚宴の席に入り、戸が閉められた」(25・10)とあります。

善い行いを常に実行している賢い人は、いざという時に用意ができていたので間に合いました。けれども善い行いを常に心がけていない愚かな人は、いざという時に間に合いません。

これは、年間の主日をもうすぐ終えるわたしたちに、あなたは善い行いを、常に身近に用意できていますか、あなたの善い行いをわたしに示してくれと言われたときに、賢いおとめのようにすぐに用意できますかと問いかけているのだと思います。

自分の分の油、イエス・キリストを周りの人に知らせる善い行いが、今年1年の信仰の歩みの中で身近にありましたかと、問いかけているのです。用意ができていないことに気付き、慌てて外に出て善い行いを実行し、それを持ち帰っても、間に合わないかもしれないのです。

そこで今週の福音の学びとして、「自分の分の油を常に保つ」ということを考えておきましょう。あなたが身近に用意している油が、周りの人にイエス・キリストを証しするともし火となります。油は、十分に用意しておく必要があります。

あなたに求められる証しは、ずっと長く続ける必要があるかもしれません。今年限り、とは限りません。ずっと、その油を使って、周囲の人に、場合によっては遠くにいる人に、ともし火を見せてあげるようお願いされるかもしれません。

花婿であるイエス・キリストの願いに、たとえ到着が遅れることがあっても応じることができるように、常に壺の中の油に注意を払いましょう。聖霊に、「わたしの壺の油をたえず満たしてください」と、ミサの中で願いましょう。

年間第 33 主日 (マタイ 25:14-30)

堅信を受ける人は4タラント預かる人

今日、中学生は堅信式です。今日堅信の秘跡を受ける中学生、去年堅信の秘跡を受けた中学3年生、来年堅信を受ける中学1年生に、今日の説教を届けたいと思います。

今週の福音朗読は、「タラントンのたとえ」でした。「タラントン」は、お金の単位です。だいたい5千万円だと思ってください。ですから、主人は自分の僕たちの能力に合わせて、2億5千万円、1億円、5千万円を預けて旅に出たことになります。

3人の僕たちのうち2人は、期待通りに預かったお金を活用しました。2億5千万円預かった人は、ほかに2億5千万円を儲けました。もしかしたら、ブランド物のバッグを海外から買い付けて、それをお店に並べて売って、お店が急成長したのかもしれない。

1億円預かった人も、どうやって儲けたかは書いていないけれども、ほかに1億円儲けました。こうして、主人の期待に十分応えた僕たちは、主人から「忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。」と褒められています。

ところが、5千万円預かった僕は、主人のことを恐ろしい人だと思っていました。預かったお金を減らしてしまったら、ひどく叱られるのではないかと。結果を求める主人が怖い。そう考えてしまって、預かったお金を活用しようと思わずに、土の中に埋めて隠しておいたのです。

イエスさまが話したのは、「たとえ話」です。たとえ話は、本当に考えてほしいことが別にあります。それは、「神さまはわたしたち人間に何かを預けて、活用してくれることを期待している」ということです。今回は、神さまの恵み、「秘跡」に当てはめてみたいと思います。

5タラント預かった人とは、5つの秘跡を受けている人です。堅信組の皆さんは、7つの秘跡を学びました。それぞれ、洗礼・堅信・聖体・罪の赦し・病者の塗油・叙階・婚姻です。そのうち5つを選ぶとしたら、「洗礼・堅信・聖体・罪の赦し・婚姻」ということになるでしょう。中田神父の5タラントンは、「洗礼・堅信・聖体・罪の赦し・叙階」です。

5つの秘跡を預けてもらった人はだれでしょうか。それは、皆さんの両親です。中学生の皆さんは、堅信までは受けますが、婚姻の秘跡はまだ受けません。婚姻の秘跡まで受けた両親は、授けてもらった秘跡の恵みをフルに活用して、神さまに次のように報告します。「御主人様、5つの秘跡をお預けになりましたが、御覧ください。ほかに5つの秘跡を預かってくれる神の子をもうけました。」

中学生の皆さんはここまではいなくても、「洗礼・堅信・聖体・罪の赦し」と、4つの秘跡の恵みを預かっている人です。4つも秘跡の恵みを預かったなら、同じく4つの秘跡の恵みを受けたいという中学生のお友達を探してくることができるはずです。簡単ではないと思いますが、神さまの恵みは、それを実現するのに十分な力を持っています。

特に、堅信の秘跡によって聖霊の7つの賜物をいただくのですから、秘跡の恵みを受けてみたいというお友達を探してくる十分な力が与えられています。恐れずに、友だちに秘跡の恵みを話しかけてください。

さて、最後は主人をがっかりさせた人のことです。1タラントン預かっている人とは、1つしか秘跡を受けていない人です。「1つしか秘跡を受けていない人」と言いましたが、最初に受ける1つめの秘跡は「洗礼」のことです。これは絶対に間違えないでください。洗礼をまず受けなければ、聖体もゆるしの秘跡も堅信も受けられません。

1タラントン預かった人は、預かったものが重い荷物と感じ、主人をがっかりさせました。もし、洗礼を受けた人が、わたしには重い荷物だと感じてしまったら、その人はミサに行っても聖体も受けないでしょう。神さまと仲直りするゆるしの秘跡も受けないでしょう。おそらく、責任を引き受ける大人の仲間入りをする堅信の秘跡も受けないでしょう。それはちょうど、洗礼の秘跡を土の中に埋めて隠してしまうような態度です。大事なものは、恵みをいただいた人の受け止め方です。恵みは、お金には換えられない価値があります。それを生活に生かそうとする人には何倍にも恵みが働いてくれますが、恵みを重荷に感じる人には、何年たっても恵みが膨らまないのです。ずっと土の中に埋めてしまっているうちに、恵みを膨らませる方法も分からなくなってしまうでしょう。

中学生の皆さんは、今いちばん堅信の秘跡に近い人たちです。堅信の秘跡を受けるまでに、洗礼・聖体・ゆるしの秘跡の3つを自分の中で膨らませてきました。堅信の秘跡を受けると、4つのタラントンを預かった人になります。もうほとんど、5つの秘跡を受けた両親に近づくのです。だから、4つのタラントン、4つの秘跡を受けることを喜びとし、胸を張ってこれからの生活を送ってほしいと思います。堅信の秘跡は特に、聖霊の7つの賜物を注いでくださいます。「智恵・理解・判断・勇気・神さまを知る恵み・神さまを愛し、敬う心」この7つが、自分自身の問題解決にも働いてくれるし、友だちが抱えている問題解決にも、またもっと広く教会や社会が抱えている問題解決にも働いてくれます。そのことを楽しみにして、これからを過ごしてください。

中学生の皆さんが、祈りや黙想会の中で、「神さま、見てください。こんなに恵みが働いて、すばらしい生活を送れました。すてきな人生でした」と、自分の言葉で神さまに報告ができるようになることを祈っています。決して、「わたしはあなたの恵みを隠していました。いらないので返します」という態度を取らないでほしいです。これから、堅信の秘跡を含めた4つのタラントンで、すばらしい学生生活、社会人となれるように、中田神父は祈り続けます。

王であるキリスト(マタイ 25:31-46)

王であるキリスト (マタイ 25:31-46)

最も小さい者の一人に寄り添う

いよいよ、年間の最後の主日、「王であるキリストの祭日」を迎えました。キリストが王であることを、福音の学びによって証しする者になりたいと思います。

先週わたしは宮城県の仙台市に出張しておりました。教区広報委員会の全国研修会でした。初日と3日目は広報のあり方についての講話でした。2日目は、丸1日かけて被災地を視察しました。視察の様子は参考になると思いますので感じたままに話したいと思います。

東北3県の被災地のうち、わたしたち一行は南三陸町、登米市米川、石巻市の3つの活動拠点と、その周辺地域を視察しました。その中で、南三陸町と石巻市では、声を失うような光景を目の当たりにしました。最初は南三陸町に入りました。すぐ目に飛び込んだのは、住宅の基礎のコンクリートだけ残った荒れ果てた土地と、すっかり錆びて鉄くずとなってしまう、うずたかく積み上げられた自動車の山でした。

わたしも話ではそうした場所のことを聞いてはいましたが、実際にその場所に入ってみると、目にする光景は現実のことだろうかと思いを疑うばかりでした。それはたとえるなら、紛争を繰り返している国、戦闘機で爆撃を受けた地域のようなものでした。

鉄骨だけが残った防災庁舎、3階建てのアパートの屋上に乗り上げたままの壊れた自動車、ひっくり返った海の堤防、あるはずのない場所に折り重なっている船。これが現実だろうか、実際にその場にいて信じることはできなかったのです。

3カ所目に訪ねた石巻市でも、一階部分を津波で突き破られてそのままになっている家が延々と続いているのを目の当たりにしました。バス1台で視察していたのですが、一階部分が空洞になっている家は、海岸地区からいったいどれくらい奥まで広がっているのか見当もつかず、胸が痛くなりました。

そして石巻でいちばん焼き付いたのは、日和山公園から眺めた光景でした。この公園は小高い丘の上であって、海沿いの地区が見渡せる、本来は絶景の場所です。わたしたちがそこから海沿いの地区を眺めたとき、あーこれが、報道でよく紹介されていた場所なのだと分かりました。地震の後の津波が押し寄せたとき、「あそこにまだ人がいる！早く逃げて！」と人々が叫んでいたのは、ここからだっただとよく分かりました。そして石巻市の海岸地区では、今でも自動車がまとまった場所に積み上げられていますし、がれきも、こんなにたくさんどこから集まったのだろうかと思うくらいの量が、海沿いに積み上げられていました。たとえて言うと、大型客船をひっくり返したような大きさ高さで、高さは

20 メートル、長さは 100 メートル、奥行きも 20 メートルくらいあったのではないのでしょうか。

もちろん、この説教でわたしはただ被災地の様子を紹介して終わるつもりはありません。この大震災の体験をした人々は、今週の福音朗読の中の、「わたしの兄弟であるこの最も小さい者」ではないかと思うのです。この方々のために、わたしは何かをしなければならない。そう期待されていると考えました。

また、たとえ話に出てくる王は、「飢え、のどが渇き、旅の途上にあり、裸であり、病気で、牢にいます」となっています。この姿は、ひとことで言えばイエスの最後の場面にぴったり当てはまります。

イエスは最後の晩餐のあとは何も食べ物を口にしていません。十字架上で渇きを覚え、エルサレムへの旅、ゴルゴタの丘への旅、天の御父のもとへ帰る旅の途上にありました。むち打ちによって体はずたずたにされて病を得、不正な裁判と人々の嘲笑によって囚われの身にあったのです。王が御自分の姿として描いた様子は、大震災の被災者の姿にも重なります。「飢え、のどが渇き、生活再建という旅の途上にあり、着る物も取り去られ、病気になり、本来の家ではなく、仮設の家にとらわれの身にあるのだと思います。

イエスは言います。「はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。」(25・40) 被災地を訪ねて、広報担当者であるわたしは何をしなければならないかを考えました。

それは何よりもまず、伝えることだと思います。時間が経って、だんだん忘れ去られようとしている「最も小さい者の一人」が本当に立ち直るまで、彼らのことを伝え続けなければならないと感じました。

皆さんにも、これまで同様これからも力を貸していただきたいと思います。カリタスジャパンのボランティアが、現地で大活躍していて、大きな慰めになっていました。例を挙げると、震災で定置網や養殖の網を失った漁業者のところに行って、三重県や北海道から届いた網を、現地の状況に合ったものに作り替えるお手伝いをしていました。わたしたちはカリタスジャパンに募金することで、活動を支えることができます。

大震災の今年、わたしたちは「最も小さい者の一人」を身近に感じ、できることを考える必要があります。「最も小さい者の一人」に仕えることは、キリストを王として認め、王であるキリストに仕える道です。

わたしたちが、まことの王に仕えることによって、社会に王であるキリストを証しすることができるようになります。「最も小さい者の一人」に仕えることによって、社会に王であるキリストを証しすることができるようになります。

待降節第 1 主日 (マルコ 13:33-37)

救い主を待つ動機を確かめよう

待降節、主の到来を待つ季節が始まりました。教会は、この待降節から、1 年の暦が始まります。そこで今週わたしたちは、救い主を待ち望む、はっきりとした目的をつかみたいと思います。

待降節に、救い主を待ち望むのですが、なぜ救い主を待つのでしょうかと聞かれたら、みなさんはどう答えるでしょうか。何となくは分かっていますが、言葉に表そうとすると難しいかもしれません。

もう 30 年近く前になりますが、わたしたちは教皇ヨハネ・パウロ 2 世が松山競技場でミサをしてくださった時、そのおいでを待ちました。わたしは浦上教会で行われた司祭叙階式の時にも、教皇さまのおいでを待ちました。あのとき皆さんは、なぜ教皇さまを待ったのですかと聞かれたら、何と答えるでしょうか。

この問いかけにも、みなさん何となくは分かっているのですが、言葉にできないかもしれません。わたしだったら、「教皇さまを一目見るために、待っていた」と答えるでしょう。教皇さまにお会いしたくて、寒い中をじっと待っていた。言葉にはならなかったかもしれませんが、これが多くの人の心の中にある答えだと思います。

この、皆が持っている体験と重ね合わせると、待降節になぜ救い主を待っているのかと聞かれたら、「救い主を一目見たいからだ」と答えるのが適切だと思います。何となく救い主を待っているのではなくて、救い主を一目見たい、救い主の近くにいて、一緒にいる実感を持ちたい。そう答える信者でありたいものです。

わたしは浦上教会で教皇さまのおいでをお待ちした時、忘れられない体験をしました。教皇さまが大村空港から車に乗り込まれたという連絡が始まって、今諫早を通過された、今長崎市内に入られたと、刻々と近づいてくる様子が聖堂内に案内されていました。

神学生は、中央通路に近い場所に席が用意されていました。当時椅子席だったのか、単なる板張りだったのか思い出せませんが、運が良ければこれで教皇さまに握手してもらうこともできる。そういう場所に神学生は置いてもらっていました。

ところが、「教皇さまが今到着しました」という案内が流れるや否や、とある修道会のシスターたちがいっせいに中央通路になだれ込んで来て、「どいてえ！」と叫び、わたしたちを押しつけて、教皇さまに握手をもらってしまったのです。

シスターたちの迫力にも圧倒されましたが、シスターたちがどれだけ教皇さまを待っていたか、どれだけお会いしたいと熱望していたか、その差がこの結果になったのだろうなあと今になって思います。

待降節を迎え、救い主を待つ季節が始まりました。救い主にお会いしたい。その気持ちでこれからの日々、その時を待ち続けます。その気持ちの中に、約 30 年前のあのときの熱意、何としても会いたい、遠くからでも眺めたい、同じ場所にいる喜びを味わいたい、そうしたものを織り込

めたらすばらしいと思います。

今週わたしたちは、何となく救い主待っているのではなく、はっきりした目的、お会いしたいのだ、一目見たいのだ、その場にいる喜びを味わいたいのだ、という自覚を持って待降節に入ることになりました。お会いするときに、わたしたちがどんな状態にいるべきかも、問われます。福音朗読にありましたように、ご降誕のその日まで、目を覚まして一日一日を過ごしていきましょう。

待降節第2主日(マルコ 1:1-8)

待降節第 2 主日 (マルコ 1:1-8)

すべての人に悔い改めを呼びかけよう

12月3日は聖フランシスコ・ザビエルの祝日でした。今年から日本では、「日本宣教の保護者聖フランシスコ・ザビエル司祭」という名前で祝うことになりました。フランシスコ・ザビエルを「日本宣教の保護者」として祝うことには、何かの狙いがあるはずです。

それは、日本での宣教がもっと進むことを願ってのことでしょう。日本に住むすべての人に、イエス・キリストをもっとよく知ってもらう。イエス・キリストに魅せられて、生き方そのものを転換する。そういう宣教のために取り次ぎを願っているのだと思います。

そこで考えなければならないのは、わたしたち一人一人が、宣教者にならないければ、「日本宣教の保護者」の活躍の場面、取り次ぎの場面も生まれてこないということです。わたしたちが皆、だれかに対して宣教者になって、収穫を神におささげする気持ちが必要です。宣教者としてひと肌脱ぐ。その中で、聖フランシスコ・ザビエルに取り次ぎを願う必要性が出てきます。

言い伝えによると、フランシスコ・ザビエルは日本語が上手ではなかったそうです。それなのに、日本に大きな足跡を残しました。それは、日本人がフランシスコ・ザビエルの生き方を見て、イエス・キリストを感じたからだだと思います。

すべてを、イエス・キリストに賭けて生きている。この人にすべてをつぎ込ませるイエス・キリストは信じるに値する方に違いない。そうやって、日本の人々はフランシスコ・ザビエルからイエス・キリストを学んだのだと思います。

この生き方での証しは、わたしたちに最も適している宣教の方法ではないでしょうか。学問で納得させる方法もあるでしょう。あっと驚くわざを通して引き寄せる方法もあるでしょう。けれども、それらがすべての人に適しているとは限りません。

むしろ、生き方を通して、この命のすべてを賭けても悔いがないという信仰を、人々に知らせる方が皆さんに適していると思います。わたしたちがなけなしの時間や虎の子のように大切にしてきたものを、イエス・キリストのためだったら寛大に差し出すことができます。そうした生き方の中での証しを、周りの人々に示す。それが、フランシスコ・ザビエルの日本にかけた思いを受け継いで宣教する一つの形ではないでしょうか。

さて、今週は待降節第 2 主日です。待降節第 2 主日と言ったら、洗礼者ヨハネの登場です。洗礼者ヨハネが荒れ野で人々に悔い改めを宣べ伝え、来るべき方への準備をさせる場面が朗読されます。

ここでわたしは、悔い改めについてもう一度よく考えてみたいと思いました。というのは、わたしたちはもしかしたら悔い改めについてかなり消極的なとらえ方をしていて、キリストを知らない人々に悔い改めを宣べ伝えることをためらっているのではないかと考えたからです。

皆さんには、思い当たる節がないでしょうか。「悔い改めなさい」という呼びかけを、自分自身に対しては受け入れるけれども、それを人に宣傳伝えるというのは考えられないという見方です。人に「悔い改めなさい」と言うことは、自分自身すらできていないことを人に要求することになり、そんなことはできないと考えていないでしょうか。もしそうだとすると、ちょっと「悔い改め」のことを見誤っているかもしれません。悔い改めが、何か下を向くようなものだったら、それは理解が不足しています。悔い改めは、「来るべき方」に向きを変え、頭を上げる態度です。救い主にすっかり向き直り、喜びの歩みを始めることです。ですから、「悔い改めなさい」という洗礼者ヨハネの呼びかけは、「下を向きなさい」という呼びかけではなくて、「今こそ来るべきお方に向き直り、頭を上げなさい。喜びの日なのだから」という呼びかけなのです。わたしたちが「悔い改め」をよく理解していなかったら、他人に対して決して「悔い改めなさい」と呼びかけることはできないでしょう。それこそ、相手から「お前はどうかんだ」と言われるに違いありません。けれども、「あなたも、あなたも、救い主に向き直りなさい。喜びに触れるその時が近いから」という呼びかけであれば、恐れずに語りかけることができるのではないのでしょうか。洗礼者ヨハネは臆せずすべての人に「悔い改めなさい」と呼びかけました。わたしたちも、フランシスコ・ザビエルの取り次ぎを願いながら、一人一人かけがえのない宣教者として、人々に「悔い改めなさい」と呼びかけましょう。悔い改めを呼びかけ、一人でも多くの人を神に向き直らせることができるように、聖人の取り次ぎを願いましょう。

待降節第3主日(ヨハネ 1:6-8,19-28)

待降節第 3 主日 (マタイ 4:1-11)

あなたも、来るべきお方の声

先に、容体が心配でお祈りしてほしい神父さまのことをお話します。五島市にある、マリアの園という施設で過ごしている竹谷音吉神父さまです。現在非常に容体が心配な状態だと聞いています。

わたしは竹谷神父さまと特別な知り合いではありませんが、以前赴任したことがある太田尾小教区に赴任したことがある神父さまで、わたしが赴任した時に巡回教会の間瀬教会司祭館建設で大変ご苦労なされた神父さまだと伺っています。

また、間瀬教会の信徒が亡くなった時に通夜と葬儀ミサに竹谷神父さまが出席してくださり、当時を知る神父さまからの貴重なお話を伺ったりもしました。皆さまにもお祈りしていただきたくて、説教の初めに一言触れさせていただきました。

今週の福音朗読は、洗礼者ヨハネの使命について語るヨハネ福音書の朗読です。朗読をよく聞いていると、まともに返事をしない場面が初めあって、その次にしっかりと返事をし始めているのがわかります。洗礼者ヨハネがメシアかもしれないと考えて人々が集まっている場面で、そのことを問いただしているときには、まともに取り合っていません。洗礼者ヨハネは自分はメシアではないとはっきり自覚があったからです。

あるところから、ヨハネがはっきりと自分の役割を知らせ始めます。「わたしは荒れ野で叫ぶ声である。『主の道をまっすぐにせよ』と。」(1・23) ヨハネが自覚している役割は、来るべきメシアに向けて人々を準備させる「声」なのです。

ヨハネは、自分の役割をはっきり分かっていたので、勘違いさせるようなことを一切口にしません。もしかしたら、という淡い期待を持たせないために、「わたしはメシアではない」「違う」「そうではない」と、その手の質問に全く取り合わなかったのです。

洗礼者ヨハネの役割は「声」でした。声はふつう、誰かから発せられます。その声には自分の思いはなく、声の持ち主に思いがあります。声は、声の持ち主の思いを忠実に伝えるものです。来るべき救い主が人々に何を望んでいるかを、忠実に伝えたい。その一心でヨハネは働きました。

ヨハネは、イエスの思いを完全に伝えたのでしょうか。それは不可能なことでした。救い主イエス・キリストの思いは、ヨハネの理解をはるかに超えていたからです。それでも、声の持ち主の思いを、できる限り忠実に伝えようとしたので、人々は悔い改めの気持ちを起こし、悔い改めの洗礼をヨハネから受けたのでした。

すると、こういうことが言えるでしょう。来るべきお方の「声」となって、人々に悔い改めを促す人が現れれば、来るべきお方はやって来る、ということです。「声」が届くところに、「声の主」も現れる、ということです。

イエスさまが実際においでになった時は、洗礼者ヨハネがその役割を

果たしました。現代、「声」の役割を果たすべき人とはだれのことでしょうか。わたしは、すべてのキリスト者が、洗礼者ヨハネが果たした「声」の役割を果たすべきだ、と思っています。

現代、救い主の誕生は、もっと多くの人に、もっといろいろな場所に届けるべきです。多くの人が、「声」になってくれたら、それだけ多くの人が、「声の主」に気付くはずです。また、今は1人の人の声を、多くの人が聞くことのできる時代になりました。いちばんわかりやすいのはテレビとインターネットです。

テレビに出ている人が、何かを言えば、それは、何千人何万人の視聴者が聞くことになります。インターネットにも同じような効果があって、たとえばYouTubeというサイトで自分の主張をすると、ある場合は何十万、何百万人が繰り返し見ることになります。

こうした時代ですから、何か、場所と機会をとらえて、来るべきお方の「声」になってほしいのです。何も特別なことを話す必要はありません。「もうすぐクリスマスです。わたしたちの心に救い主をお迎えする準備をしましょう」そう言えばいいのです。

そうして、あらゆるキリスト者が来るべきお方を知らせる「声」になってくだされば、聞いた人はわたしたちを通して「声の主」を知り、「声の主」に近づきたい、「声の主」に耳を傾けたいと思うようになるでしょう。とにかく、人は「声」が聞こえなければ、「声の主」にたどりつけないのです。そのために、皆さん一人一人の協力が必要なのです。

わたしは、どこで、どの機会に、来るべきお方を知らせる「声」になれるでしょうか。その時間と場所についての照らしが与えられるように、そのようなチャンスが与えてもらえるように、ミサの中で祈り求めましょう。

待降節第 4 主日 (マタイ 4:1-11)

神の御計画にいっぱい心を開く

もしかしたら見かけたことがあるかもしれませんが、12 月 1 日から司祭団マラソンの練習をちょっとだけ始めました。来年 1 月下旬に予定されているマラソンは 10 キロ走るのですが、今は 4 キロ、せいぜい走って 5 キロといったところです。

まだ全く見かけたことのない人が多いはずです。昼間に走ったのは 1 度だけで、あとは夜にこそこそ走っております。わたしは長崎出張も多い人間ですが、長崎に行くときにもマラソンシューズをそのまま履いて行って、長崎市松山町にある陸上競技場跡地で走り続けています。

毎日欠かさず走れているわけではありません。火曜日金曜日のふれあいミニバレーをする日はお休みで、雨降りの日もお休みしています。マラソン当日は、雨だろうが雪だろうがお構いなしに走らないといけません。今はそこまでの元気はありませんし、うっかり雨の中走って皆さんに迷惑をかけるようなことがあってはいけません。

浜串を走る時は、次のような走り方をしています。司祭館の玄関から、まず岬の聖母に向かい、折り返します。そのあと、後浜串のバス停まで上って、いったん浜串生活館まで下りて来ます。そしてもう一度、後浜串まで上って下りて、下りたら岬の聖母まで走って折り返し司祭館に戻る。こういう走り方で約 5 キロです。

当日走るコース途中に山越えをする難所が 1 ヶ所あって、その場所が後浜串までの上り坂に似ています。ちょうど良い練習になっています。最終的には、5 キロの練習を 2 回繰り返す持久力を付けなければなりません。12 月からの練習では間に合わないかもしれませんが、前回よりは納得できる走りができるものと信じております。

さて待降節も第 4 週に入り、ちょうど一週間後が救い主の降誕を迎える日となりました。救い主の降誕を迎える中でも、最も深い信仰をもって迎えるように求められているのが、救い主の母となることを求められたマリアです。今週はその、マリアの救い主誕生を受諾する場面が選ばれました。わたしたちの直前の準備として、マリアの信仰に学ぶことにしましょう。

天使ガブリエルが、マリアのもとを訪ね、男の子が生まれ、マリアは救いの計画の協力者になると告げます。神である主がマリアを選び、救い主の母となることが知らされましたが、はいそうですかと承諾するにはあまりにも難しい話だったと思います。

マリアは最初、人間の立場から納得できる説明を求めました。「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに。」(1・34) 物事はふつう原因があって結果があり、理由があるからそれに見合う決定が下るものです。マリアは天使ガブリエルの言葉を何とか理解しようと、人間の側から納得できる説明を求めたのです。

天使はこれに対して、聖霊があなたを包むことと、神にできないこと

は何一つないという返事で答えました。天使は神に遣わされた存在です。神の計画を知り尽くしているわけではないでしょう。そこで、天使ガブリエルは、神の計画にマリアが心を開いて受け入れることができるように、必要な言葉をかけたのでした。

神の御計画ですから、天使が説明して納得できるものでもないと思います。むしろ、マリアが、神の御計画を受け取るために、天使は全力を尽くしたのではないのでしょうか。マリアが心を開いて御計画を受けるか否か、そこにすべてがかかっていました。

今年、日本全体で3人の司教さまが選ばれました。司教さまが選ばれるいきさつは詳しくは知りませんが、3人とも日本におられるバチカン大使から「あなたはベネディクト16世教皇さまから〇〇教区の司教に選ばれましたよ。お受けしますか？」と問われたそうです。

わたしは、時代も場所も違いますが、マリアが天使ガブリエルから、「あなたは身ごもって男の子を生みます。その子をイエスと名付けなさい」（1・31）と言われた時と似ているのではないかと思いました。司教さまに選ばれたと言われても、人間の側からの説明で納得するのは難しいと思います。

なるほど、だからわたしが選ばれたのですねと受け入れる人はいないのではないのでしょうか。むしろ、「どうしてそのようなことがありますでしょうか」と、状況を飲み込めないだろうと思うのです。こんな時、司教さまに選ばれた方々は、教皇さまを通して示された神の御計画に心を開いて、「お言葉どおり、この身に成りますように」（1・38）と答えるのだと思います。

この場面で、人間の立場での説明で納得することは難しく、むしろ、神の御計画に心を開く、心を開いて受け入れることが必要なのだと思います。今年、わたしたち日本の教会は、マリアと同じ立場に置かれた3人の新しい司教さまを与えられました。この司教さま方がどんな思いだったろうなあと推し量る時、マリアの心にいくらかでも触れることになると思います。

マリアは、神の御計画を受け取るため、精一杯心を開いて自分を委ねました。救い主の誕生は、わたしたちが神に精一杯心を開いて自分を委ねる体験を積みかせてくださいます。いっぱい心を開かなければ、神さまの御計画を受け取ることはできません。

これから起こる様々な出来事、その中に込められた神の御計画を、いっぱい心を広げて受け入れていくことができるよう、マリアに倣う決意を新たにいたしましょう。

主の降誕（夜半）（マタイ 17:1-9）

主の降誕（夜半）（ルカ 2:1-14）

幼子を訪ね当てた人が持つ喜び

主の降誕、おめでとうございます。今年のご降誕のお祝いは、痛みを伴うお祝いかもしれません。なぜなら、救い主が、人のお産にふさわしい場所を与えられず、飼い葉おけに寝かされていたように、東北では数え切れないほどの人が、3月11日寒空にさらされ、地面に寝かされたからです。

数え切れないほどの人が、この日つらい1日を過ごし、それから9カ月たった今も、本来自分たちが暮らすはずの土地から引き離されて暮らしています。救い主が、暖かい場所、安心して眠れる場所にお生まれになったのではなく、厳しい場所、本来休むにふさわしくない場所でお生まれになったことを今年はよりいっそう感じます。

大震災で被災した人々は、電気もガスも水もすべて止まってしまって、夜は真っ暗になったことでしょう。それでも、何日かすると、真っ暗な中に明かりが灯り、暗闇の中にあって希望を感じることができたと思います。イエス・キリストも、明かりのない場所で生まれました。「明かりのない場所に生まれた」と言ってもよいでしょう。明かりのない場所に、世の光として、お生まれになったのです。

大震災直後、真っ暗だった場所にあちらで1つ明かりがともし、また別の場所で1つ明かりがともる、そういう出来事が起こりました。それは、ご誕生の場面と重なります。明かりのない暗闇に、神の独り子という明かりがともりました。深い悲しみ、だれにも解決してもらえない絶望の荒れ野に、希望のともし火がともった瞬間でした。

震災後にどこかで明かりがともった時、何もかも失った人々が、その明かりを確かめに集まったであろうことは容易に推測できます。だれも明かりをもたない中で、明かりがともったのを自分のことのように喜んで、様子を見に行ったはずです。それは、羊飼いたちが飼い葉おけに寝かされている乳飲み子を探しに行く姿そのものです。この明かりはどんな明かりだろうかと、確かめるために集まり、確かめて喜びあうのです。

イエスは今日、「民全体に与えられる大きな喜び」としてお生まれになりました。この喜びは、2つの見方が必要です。まず、神が人類に与えてくださった喜びですから、すでに実現している喜びです。父なる神は、ご自分の望む通りに、人類に独り子を与えてくださいました。

もう1つの見方があります。羊飼いたちは、天使の言葉を信じて、飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけ、喜びに沸きました。羊飼いたちが飼い葉おけに眠る幼子を見つけた時に、喜びが喜びとなったのです。そこで、わたしたちも今日のお祝いに2つの喜びを考える必要があります。1つは、わたしたちにすでに与えられ、実現している喜びがあり、それを人々に知らせる必要があるということです。そしてもう1つ、わたしたちが幼子を訪ね当てて、幼子の前に跪くことで、わたしにとっての喜びも実現します。今日こうしてミサに集まり、喜び合っているわたしたちは、神が用意してくださった喜びを喜び合い、また、寒さの中で

教会まで幼子を訪ね歩いて来て、わたしにとっての喜びを確かなものとしたのです。

「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。」（2・10-11）

あなたが、今日この喜びの日と一緒にいることはすばらしいことです。ただ単に、100 人のうちの 1 人なのではありません。神が人類に与えてくださった大きな喜びは実現していますが、あなたがここに来て、幼子を訪ねてくださることで、あなたと神との間で喜びが確かなものとなったのです。

そこで、今日の喜びを出かけて行って、出会ったすべての人に伝えましょう。神は、人類のための喜びを与えてくださいました。そして、あなたのための喜びも用意してくれています。どうぞ、教会に来て、幼子の姿を見つけてください。そのように伝えられたらすばらしいと思います。

真っ暗な中に、希望の光がもたらされました。絶望しそうな中に、人を導く光が、被災地に、そしてこの日本すべてに与えられました。この喜びが、もっと多くの人と一緒に喜びあえるように、見たことを告げ知らせる。今日の出来事を心に収めて持ち帰りたいと思います。

主の降誕（日中）（ヨハネ 1:1-18）

主の降誕（日中）（ヨハネ 1:1-18）

神の独り子は神と人間との絆となられた

主の降誕日中の典礼では、ヨハネ福音書が朗読されます。幼子誕生の具体的な様子が描かれていないので、降誕の様子を読みとるのは少し難しいかもしれません。飼い葉おけに寝かされている幼子を目に焼き付けて、与えられた朗読から降誕の喜びを味わいましょう。

朗読では「言（ことば）」の働きが取り上げられていました。そして最後に「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。」（1・14）とあります。言が、わたしたちの間に住んでくださいました。

待降節第2主日で「声」について考えましたが、ヨハネ福音記者が語る「言（ことば）」も、それを語る側と、受け取る側が存在して成立します。御父と、御子、聖霊の三位一体の中でまずそれは成り立っていましたが、今やわたしたちのために言（ことば）が与えられて、御父とわたしたち人間との間で対話が始まります。

これは、大きな喜びです。神は、わたしたちに言（ことば）を発して、語りかけてくださる。その言（ことば）とは、神の独り子、イエス・キリストです。神はどのようなお方なのか、神がどれほど人間を愛してくださっているのか、言（ことば）が肉となって、わたしたちに感じることができるようになってくださったのです。

これまでも、神はたとえば預言者を通して、人間に語りかけてきましたが、これからは神ご自身が、わたしたちと同じ姿になって、語りかけてくださいます。貧しい生活も、しいたげられる経験も、命さえ狙われることも、人間がおよそ経験するあらゆる苦しみ、悲しみを背負って、神は人間のそばにいてくださいます。

神が言（ことば）として、神と人間との対話を求めておられること、言（ことば）が肉となって、わたしたちの間に宿られたことを、わたしは「絆」という言葉で表したいと思います。

今年、東日本大震災と、福島原子力発電所の放射能汚染で多くの人が不安におびえる生活を強いられました。イエスの誕生も、「世は言を認めなかった」「言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった」とあるように、十字架を背負う運命が待ち構えていました。それでも、今年日本人がたどり着いたのは、「絆」という漢字一文字でした。絆の必要性を強く感じましたし、絆の力をあらためて感じたのです。わたしたちのもとに宿ってくださった神の言もまた、神と人とを結ぶ絆として、宿ってくださったのです。神は今年、神と人間との絆として、わたしたちの間に宿ってくださったのだと思います。

わたしたちが今日ご降誕を祝う時、それは神との絆を思い出しているのです。この絆が来年のご誕生まで、固い絆でありますように、ミサの中で祈り求めましょう。

神の母聖マリア（ルカ 2:16-21）

2 0 1 1 年

「聖週間の説教」

「ちょっとひとやすみ」

2 0 1 1 年

「聖週間の説教」

「ちょっとひとやすみ」

受難の主日 (マタイ 27:11-54)

今は恵みの時、今は救いの日

今日、受難の主日のために、福音書が2度朗読されました。最初の朗読は、エルサレム入城記念です。イエスは、最後の日々をエルサレムで迎えるために、お入りになります。預言者の言葉が引き合いに出されています。その中で、王であるイエスは華やかな王ではなく、「柔和な方」です。

また、「荷を負うろばの子、子ろばに乗って」とあります。「荷を負う」のは、今も昔も変わらないかもしれませんが、身分のある人、王の務めではありません。王の僕が、通常であれば荷を負うはずです。荷を負う仕事は、苦しみを伴う仕事だからです。

するとイエスは、柔和な方であり、荷を負う方であり、荷を負うことで苦しむ方であるということになります。その決意のもとに、エルサレムに入られるのです。このことを踏まえて、二度目の福音朗読を考えてみましょう。

朗読はマタイが描く受難の場面です。イエスはほとんど口を開きません。弁明をしない姿は、最後まで柔和を保った姿です。十字架に磔（はりつけ）にされている姿は、荷を負う姿、苦し

むメシアの姿です。わたしたちは、十字架の上から問いかけているイエスと、向き合わなければなりません。

イエスを取り囲む群衆がいます。彼らの態度は真っ二つに分かれています。柔和な姿、荷を負う姿、苦しむメシアの姿をしたイエスを見て、心をかたくなにする人々と、心を開き、イエスにより頼もうとする人々です。

イエスは問いかけています。あなたは、わたしのこのような姿を見て、心をかたくなにするのですか、心を開き、わたしにより頼もうとしますか。最後まで柔和に、荷を負い、苦しむイエスはわたしたちの救い主ですと、今まさにより頼むことができるでしょうか。

イエスに倣って、わたしたちも生活の中で柔和を保ち、進んで荷を負い、苦しみを逃げませんと、正面向いて答えることができるでしょうか。今日はそのことが問われていると思います。イエスに倣って生きますと答える人に、イエスはまことの自由、まことの解放をお与えくださいます。

……†……

ちょっとひとやすみ

……†……

▼過ぎた一週間は外に出てばかり。広報誌の割り付け、音訳養成者の講座で講話、鹿児島で九州視覚障害者情報提供施設の大会、広報誌の校正と、ほとんど教会を留守にしていた。

▼先週の熊本とあわせ、今週もまた新幹線「さ

くら」に乗った。静かで、早い。ただ今回の鹿児島行の新幹線では、悲しいことに切符を失くしてしまい、どうしても見つからなかったので買い直す羽目になった。

▼どうして無くしたのか、思い出せない。自動改札を通過したし、何両目のどの席まで、切符を見て確認し、車両に乗ったのに、座席に座る前に切符を確認してから座ろうと思ったら、切符が見当たらなかった。

▼ショックで、鹿児島で過ごした時間はわたしの中では遠い思い出のようになっている。どこかで切符を手放したのだと思うが、数十メートルのどこかで落としたのであれば、周囲の人も「落としましたよ」と言ってくれそうなものだ。本当にわからない。

▼ショックを受けたと言えば、月曜日にもガッカリする出来事があった。長崎の大波止ターミナルで、五島産業汽船の窓口に戻りの切符の引換券を差し出したところ、窓口の女性が「鯛ノ浦には車を置いて長崎に出ましたか？」と尋ねられた。

▼はいと答えると、車種を聞いてきたので、「ホンダの・・・」とそこまでは出たのだが車の名前が出て来ない。「えーっと、ナンバーは228、紺色です・・・名前・・・思い出せません。」とうとうその場で名前が出ずに、正式な切符と引き換えた後、待合所で車の名前を思い出そうと真剣に悩んだ。

▼頭の中で、車が出て来た。しばらくしてようやく、「あっ、SM-X だった」とようやく思い出

し、恥ずかしかったが窓口に戻って「車の名前、思い出しました」と告げた。「中田さんですね。SM-X でしたか。到着時に駐車場に回しておきます。」と答えてくれた。きっと、「この人認知症だわ」と思ったに違いない。

聖木曜日 (ヨハネ 13:1-15)

弟子をすべて、愛し抜かれた

今日は聖木曜日、主の晩餐を祝う日です。イエスは2つの奉仕をなさいます。食事を用意してくださることと、弟子たちの足を洗うことです。どちらも、今日の朗読の冒頭に書かれている弟子たちへの愛が、根底にあります。「イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。」 (13・1)

イエスによる食事の用意は、御自分を与え尽くす愛です。食事は、パンとぶどう酒のごくありふれた食べ物を通して、イエスの御体と御血を、弟子たちに与えます。イエスはこれまでに数々の教えを与えてくださいましたが、この場面ではイエスご自身を、すべて余すところなくお与

えになるのです。

そして、一人一人弟子たちの足を洗います。足を洗う仕事は、奴隷の仕事とされていましたが、その奴隷の仕事の中でも、最も低い身分の奴隷にあてがわれていた仕事なのだそうです。自分がかわいければ、この仕事を最も低い奴隷に代わって引き受けることは決してできません。イエスは、弟子たちを深く愛して、最も低い身分に与えられる務めを引き受けたのでした。

今日、わたしもこの出来事に倣って洗足式をいたしますが、あらためて、洗足式の心構えを考えさせられました。イエスが、最下層の奴隷の身分にまで降りていった。そこに自分も留まる。そういう覚悟を新たにしています。

イエスの、食事を通して示された「与え尽くす愛」、弟子たちの足を洗うことで示された「愛し抜く姿」を、イエスを信じるわたしたちも受け取りましょう。わたしたちの身の回りでも、「与え尽くす愛」「愛し抜く姿」を求められている場面があるのではないのでしょうか。

今日までは相手をゆるすけれども、明日になったらもうゆるすことはできない。今日までは愛情を示すつもりがあるけれども、それももうおしまい、あすからは決して愛すつもりはない。そんな困難な場面にも、イエスは御自分の模範を示そうとします。「わたしに倣いなさい」と。最大限努力して、世話をしてきたけれども、疲れ果ててその場を投げ出したい、その場から逃げ出したい。そんなあなたを、イエスは呼び寄せて、聖体の秘跡で養い、あなたの足を洗って

困難な場面から救い出してくださいます。
ある人は、「わたしの足など、決して洗わないでください」（13・8）と言うかもしれません。
「教会に行っても前に座れるような人間ではないのです」と、考えている人がいるかもしれません。

けれども、イエスは今日の夕食の席で、だれも裁いたりはしないのです。全員を愛し抜こうとしておられるのです。ですから足を洗わないでくださいと拒んでいるあなたも、イエスは愛し抜こうとしておられるのです。

イエスの招きに、すべてをゆだねましょう。イエスが愛し抜いた人は、変えられていきます。イエスの愛によって変えてもらい、この世の罪な生き方に死んで、命に満ちた生き方に生まれ変わることができるように、主に願いましょう。

………†………

ちょっとひとやすみ

………†………

▼受難の主日の説教をメールマガジンで配信した直後、いろんな人からメールでお便りをいただいた。メールマガジンが役に立っているのだと、あらためて実感する一コマである。

▼身近な人に役に立てる人になることはだれにでもチャンスが巡ってくるが、見ず知らずの人にも役に立つということはそうチャンスがあるわけではないので、わたしにとってはかけがえのない仕事だと感じる。

▼最近長崎でインターネットを使ってメッセー

ジを発信している人を知らないかと聞かれたことがあるが、わたしは把握していない。確かなことは言えないが、司祭がみずからメッセージを発信している例はないのではないと思う。寂しい限りである。

▼長崎教区でインターネットを使ってメッセージを発信しているサイトを検索するが、同業者を見つけることができない。違う教区の司祭はあちこちでサイトを立ち上げている。どこかに立ち上げているのかもしれないが、一時間探してみたが、見つからなかった。

▼あちこちサイトが立ち上がっているのは心強いのだが、長崎教区には 45 歳のわたしよりも後輩が 36 人もいる。何かが立ち上がっていてもおかしくないのだが、わたしはそれを聞いたことがないし、見たことがない。

▼どういう事情かは分からないが、後輩たちが一日も早く、ネット上での活動に着手して、経験を積んでほしい。長崎教区からの発信がいろいろ出ることで、今までとは違った交流や、関心を持ってもらえるはずだ。わたしがこの活動を継続できるのも、せいぜいあと 30 年なのだから。

聖金曜日 (ヨハネ 18:1-19:42)

十字架はすべての人にいのちをもたらす

わたしたちの救いのために、わたしたちを罪から解き放つために、イエスはこの日、死に渡されました。今年の聖金曜日は、息を引き取るときにそばにいた人々に注目して、黙想してみたいと思います。

ヨハネ福音書によれば、十字架上のイエスのそばにいてイエスの最期を見守った人々の中に、「イエスの母と母の姉妹、クロパの妻マリアとマグダラのマリアとが立っていた」（18・）とあります。また、イエスの愛する弟子が、そばにいたとあります。この、母マリアと愛する弟子が十字架のそばにいたことに、注目したいと思います。

イエスは確かに苦しんでお亡くなりになりました。そのイエスのそばに、母と愛する弟子とがいたことには意味があります。母は、子を産む苦しみとその後の喜びを現わす姿です。ですからイエスの十字架上の死は、新たないのちを産む苦しみであると、イエスのそばにいるマリアを通して現わそうとしているのです。

また、愛する弟子が母マリアのそばにいました。イエスが母マリアに、「婦人よ、ご覧なさい。あなたの子です。」（19・26）と示した通り、この愛する弟子はイエスが十字架を通して生み出した新たないのち、苦しみの後に生まれた喜びです。

こうしてイエスは、十字架上の出来事が、息絶えてすべてが消える滅びの出来事ではなく、新たないのちをもたらす、豊かさを秘めた出来事であると身をもって示したのです。

かつて見たことがあるでしょうか。死ぬことが、いのちをもたらすということ。いのちをもたらす死など、だれも説明できませんでした。それをイエスは、十字架のもとにたたずむ人々の目の前で、証明したのです。

わたしたちはこの出来事を前にして、何が必要でしょうか。それはただ、イエスがもたらすいのちを受け取る。その準備だけだと思います。イエスが十字架の上で死に、新たないのちをもたらすことを、感謝してそのまま受け取ることです。

この説教の後に、十字架の礼拝をいたします。十字架を礼拝するのは、イエスが十字架の上で死に渡されて、わたしたちにいのちをもたらしてくださったからです。ぜひ、この十字架の礼拝の時に、「わたしたちに救いのいのちを与えてくださるイエスに、感謝します。」その気持ちで十字架の前に立ちましょう。

礼拝は二人一組で行います。イエスが苦しみと死を通して与えてくださるいのちを全身で受け止めるために、きちんと動きを止めて礼拝いたしましょう。

………†………

ちょっとひとやすみ

………†………

▼受難の主日の説教の時、原稿の誤変換に気がついた。配信してから気づいても遅いのだが、少なくとも2箇所、パソコンを信じすぎて誤変換していた。「十字架に貼り付けにされている」これは、パソコンの「コピーして貼り付け」という感覚だ。イエスさまがコピーして貼り付けでは、薄っぺらいものになってしまう。

▼同じ段落に、「向き合わなければ鳴りません」これも誤変換である。土曜日の前晩のミサから、都合4回もこの誤変換を見て説教をしたが、本当に嫌気がさしてしまった。ミスに気づかないわたしに責任があるのだが、だんだんミスに気づかないようになっていくのかもしれない。悲しいことだ。

▼聖香油のミサに参加した。このミサの後、司祭の集いも開かれ、25周年、50周年、60周年、そして司教に叙階されることになった被選司教さまがお祝いされた。この先輩方を見ながら、長くこの務めを果たすために、健康にはくれぐれも気をつけなければならないと感じた。

▼いくら何でも25周年は迎えることができるだろうが、50周年はよほど健康に留意しないと、お祝いしてはもらえないだろう。ギリギリそこまでたどり着けるかもしれないが、今年は60周年の対象者もいる。立派だなと思う。

▼矛盾しているかもしれないが、ある意味「この世」に死ななければ、長生きできないのではないかと思った。「この世」は命を縮める要因に溢れている。タバコ（受動喫煙も含めて）、パチンコその他のギャンブル、食べ物の好き嫌

い、過度の飲酒、生活習慣。数えればきりがない。

▼それら「この世」に死ぬことが、この世でも生きることにつながるのではないだろうか。予測できないことは仕方がないとしても、みずから望んで不安要因を抱えて生きる必要はどこにもない。十字架上のイエスが、「わたしに従いなさい。」と呼びかけている。

復活徹夜祭(マタイ 28:1-10)

イエスがわたしたちの行く手に立っておられる

皆さん主の復活、おめでとうございます。今年の聖週間を貫くテーマは、復活は死からの解放であり、神は信頼に足る解放者であるということでした。枝の主日から聖木曜日・聖金曜日・復活徹夜祭と連続して典礼にあずかった人は、そのことに気づいたでしょう。

すべてに参加できなかった人のためにも、この一週間の説教を一冊にまとめたプリントを入りに置いてありますので、どうぞ持ち帰って、この一週間の豊かな典礼の補いにしてください。今年の復活の喜びを黙想するために、わたしは婦人たちと復活したイエスがどのようにして出会ったかを振り返りたいと思います。マタイ福音記者は、「マグダラのマリアともう一人のマ

リアが、墓を見に行った」(28・1)と記しています。

婦人たちが墓で出会ったのは、主の天使でした。「その姿は稲妻のように輝き、衣は雪のように白かった。」(28・3) 番兵たちが、恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになる。表現のしようのない光景だったのでしょう。

それでも、婦人たちはイエスと出会うことはありませんでした。いかに主の天使の登場が驚きであっても、婦人たちの心を満たすものではなかったのです。

けれども、主の天使の言葉は婦人たちを少しずつ動かします。お会いしたいただ一人のお方、イエスに、主の天使の言葉が導いていくからです。「恐れることはない。十字架につけられたイエスを捜しているのだろうが、あの方は、ここにはおられない。かねて言われていたとおり、復活なさったのだ。さあ、遺体の置いてあった場所を見なさい。それから、急いで行って弟子たちにこう告げなさい。『あの方は死者の中から復活された。そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる。』確かに、あなたがたに伝えました。」(28・5-7) 婦人たちは、「恐れながらも大いに喜び、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行った。」とあります。お会いしたいお方のところに、心も体も動き出しました。まだイエスにはお会いできていません。けれども、ガリラヤに行けば、弟子たちと一緒にイエスに会えるだろうと思って、動き出したのです。

そのとき婦人たちはイエスと出会います。「すると、イエスが行く手に立っていて、『おはよう』と言われた」（28・9）ここでようやく、婦人たちは会いたいと思っていたただ一人のお方に会えたのです。

婦人たちが復活したイエスに会ったのは、どの時点だったのでしょうか。墓に出向いたときではありません。主の天使が言った「イエスは復活なされた」「弟子たちにイエスが復活したこと、ガリラヤでお目にかかされると告げなさい」という言葉を信じ、動き出した。その時点で、婦人たちは復活したイエスにお会いしたのです。

この一連の流れは、弟子たちにも当てはまります。弟子たちも、婦人たちの言葉を信じ、ガリラヤに行くことで復活したイエスに会うことになります。続く物語でこのように書かれています。「十一人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスが指示しておかれた山に登った。そして、イエスに会い、ひれ伏した。」（28・16-17）

同じことは、弟子たちだけに留まらず、わたしたちにも当てはまります。わたしたちも、四旬節を通して準備をととのえ、今復活したイエスに会いたいと願っています。わたしたちが復活したイエスに会えるとすれば、それは、わたしたちに告げられるメッセージを信じ、行動を起こしたそのときなのです。

すでにわたしたちは、一つの行動を起こしています。普段よりもさらに遅い時間に、聖堂に集まりました。聖書の朗読を5つ聞きました。神

の言葉を信じて行動を起こした者にイエスは現れることも学びました。

わたしたちは行動を起こしたのですから、必ず復活したイエスに会うことができます。まずは聖体の中のイエスさまを通して、さらに、あなたの生活を支え、導く力となって、そして、イエスの言葉を信じる人々に注がれる聖霊を通して、復活のイエスは出会ってくださいます。

神の言葉を信じ、行動する人に復活したイエスは現れます。イエスの存在は恐れや不安を解放する力です。イエスを信じてこの信仰に留まって、あるときは肩身の狭い思いをしている人もいるかもしれません。信仰だけは捨てないと頑張っていて、気持ちが張り詰めていた人がいるかもしれません。

そんなあなたに、復活したイエスは先回りして、必ず会ってくださいます。だれにも言えない恐れや不安を、解放する方として、今出会ってくださいます。恐れながらも大いに喜んだ婦人たちのように、今日のミサを終えて家路につくとき、喜びつつ帰りましょう。わたしたちの行く手には、必ず復活したイエスが先回りして、恐れや不安を解放するために立っておられるのです。

………†………

ちょっとひとやすみ

………†………

▼御復活おめでとうございます。今年は洗礼式も準備できず、司祭としては働きが足りなかつ

たと感じている。証しが足りなかった、そのことに尽きる。洗礼に導くことだけが証しではないだろうが、それぞれの家庭の信仰生活に、もっと司祭が手をさしのべることができたはずである。次の復活祭までには、そういう報告ができるようにしたい。

▼今週、2度、福音を役割分担して朗読した。司祭と、語り手（C）と、群衆（S）と、他の登場人物（A）である。ちなみにC・S・Aのうち、Cは福音史家の語り（*celeriter*、速やかに）の頭文字、Sは群衆のせりふ（*sursum*、高く）だそう。Aも、きっと受難音楽のラテン語の指示の頭文字なのだろう。詳しい人がいたら、返事ください。

▼その受難朗読だが、本来の「速やかに」「高く」など、もっと積極的に取り入れた方がよいと思う。今回の朗読では、思い入れがあるのか、かなり抑揚を付け、声を変えたりして朗読している担当者がいたが、そこまでの指示はなされていない。

▼一般的にそうだが、朗読にことさら感情移入してしまうと、聞いている者は抵抗を感じるものだ。声を変えてまで聖書朗読する必要を、わたしは感じない。演劇であればその必要もあるだろうが、聖書朗読はあくまで神のみことばの朗読だと思う。

▼話し方の講師が、「笑いを誘う話をするときに、本人が笑いながら話してもうまく伝わりません」と言っていた。そうだろうと思う。あくまで、聞き手が笑うためにそのような話に触れ

るのであって、本人が笑っていては聞き手は引いてしまう。

▼あまり出番の来ないキリスト役を務めながら、「キリストの声」とはどんなものだろうかと考えた。受難音楽上は、T (tenere、ゆっくり) という指示があるそうだ。キリストの声、いろいろ考えが巡る。このミサの後、45 年物のワインを飲みながら、考えてみるか。もっとも、ワインが回れば、考えることもできないだろうが。

復活の主日（日中）（ヨハネ 20:1-9）

イエスは復活し、愛を残してくださった

あらためて、主の御復活おめでとうございます。高井旅教会の皆さんにとっては、いよいよ待ちに待った復活の喜びの日です。昨晚の復活徹夜祭でも話しましたが、イエスの死と復活は人間に解放を告げるというのが今年の説教の主眼点ですが、今日の福音朗読にもそのことは表われています。

マグダラのマリアが墓に行きました。「朝早く、まだ暗いうちに」（20・1）とありますが、「暗闇」は、実際の時間帯と同時に、マグダラのマリアの心の状態も表していると思います。彼女

は、イエスが十字架の上で亡くなったことで、恐れにとらえられていたのです。墓から石が取りのけてありましたが、それを遠くから眺めるだけで、近づく勇氣は持てなかったのでしょう。すぐに弟子たちのもとへ報告に戻ります。

シモン・ペトロと、イエスが愛しておられたもう一人の弟子は、マリアの知らせにすぐに応じて墓へ急ぎました。身をかがめて中をのぞき、亜麻布が置いてあるのを見つけました。それでも、もう一人の弟子は墓に入ろうとはしませんでした。墓に入ることが怖かったのではないのでしょうか。墓に入り、遺体を確認すれば、あらためてイエスが死んでもういないのだと打ちのめされることになります。また、墓に入る様子を他人に知られたら、自分たちの身も危険にさらされると考えたかもしれせん。

シモン・ペトロは恐れを振り払って、墓の中に入りました。「墓に入り、亜麻布が置いてあるのを見た。イエスの頭を包んでいた覆いは、亜麻布と同じ所には置いてなく、離れた所に丸めてあった。」（20・6-7）となっています。

この場面について、つい先日、長崎で貴重な写真展と講演を聞くことができました。イタリアのトリノには、「聖骸布」というものが存在します。この布は、イエスのご遺体を包んだ布だと考えられています。この布について 50 年以上研究しているサレジオ会のコンプリ神父さまが、長崎で聖骸布を撮影した写真の展示と講演会をしておられたのです。18 日（月）に、参加しました。

この聖骸布が、確かにイエスのご遺体を包んだ布であると、だれも証明することはできませんが、たくさんのデータがこの布から出ているそうです。背中の部分には 100 発以上の鞭打ちの跡が残っていますし、手首と足首に釘跡が残っています。また、膝や、鼻の部分に、倒れて付着したと思われる土が発見されていますが、この土はエルサレムの土と成分が同じなのだそうです。いろんなデータがあって、大いに興味をかき立てました。

その中で、最も興味を引いたのは、アメリカの N A S A がある時期調査をして、この聖骸布から立体的な輪郭を描き出したという研究です。もしも、人間の遺体を包んだ布が、遺体が腐敗したあとも包んでいたとすれば、布に残された痕跡から、立体的な輪郭は描けなかっただろうと思ったのです。腐敗する前の状態を包んで、その痕跡が残ったので、聖骸布から立体的な姿を描くことができたのだらうなあと思いました。

コンプリ神父さまは、日本語の新共同訳聖書が、この場面での大切な言葉をうまく訳しきれていないと残念がっていました。「亜麻布が置いてあるのを見た」(20・6)となっているのですが、もとの言葉は「横たえる」という意味があるそうです。亜麻布が置いてあるだけでは、遺体を誰かが盗みに来て、亜麻布はそこに置いて帰ることも可能でしょう。

けれども、横たえられていたというのは、第三者が意図的にできるものではないのです。その

場を動かさず、横たえた状態のままであった。その点が、墓に入って確かめた弟子たちに、イエスの復活を感じさせたのではないでしようか。

布についての興味深い話も含めて、シモン・ペトロとヨハネが思い切って墓の中に入った時、彼らはイエスの復活を信じることができました。恐れのために、墓を遠くからしか眺めなかったマグダラのマリア。墓をのぞいてみたけれども、中には入らなかった弟子。恐れにとらえられていた人間が、ありのままの墓の中を見た時に恐れから解放されたのです。

恐れを解き放ったのは、そこに残された亜麻布でしようか。そうではないと思います。亜麻布が横たえられていた、その状態で残してくださった方が布の向こうにおられるのです。横たえられていた亜麻布を通して、弟子たちの心を解き放ち、本来思い出すべきこと、イエスが亡くなられる前に残してくださった言葉に導いてくださったのです。

弟子たちは、イエスの復活に気付き、恐れから解放されたときに何を思ったでしようか。わたしは、聖木曜日のことを思ったのではないかと考えました。つまり、「イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。」（13・1）この場面です。

イエスは、復活なさって、自分たちをこの上なく愛し抜かれたことを証明してくださった。十字架上の死は、自分たちを見捨てたのではなく、

この上なく愛しておられた証しだった。弟子たちはイエスの深い愛を、思い出していたのではないのでしょうか。

もしそうであるなら、わたしたちもイエスの復活を喜びながら、わたしたちを愛し抜かれたことを思い出す必要があります。イエスの復活は、弟子たちにも、わたしたちにも、名誉も権力も財産も何も残しませんでした。ただ一つ残してくださったのは、罪から逃れられないわたしたち一人一人を、この上なく愛し抜かれた、その愛です。

イエスはその復活によって、わたしたちも解放します。イエスの愛を、あなたを愛し抜いたその愛を、人々に知らせに行きなさい。見捨てられている人、孤独にある人、ちょっと周りの人から外れている人。だれにでも、イエスが愛してくださったことを知らせに行く。イエスはわたしたちの心を解き放って、証しを立てる人へと変えようとしています。

……†……

ちょっとひとやすみ

……†……

▼今年も、聖週間の説教と「ちょっとひとやすみ」を一つにまとめ、パンフレットにして信徒に配った。紙がもったいないと思う人もいるかもしれないが、聖週間の説教を通して、次の聖週間まで神の救いの計画と、イエスの愛に、少しでも触れることができればと思っただけのことである。

▼それにしても今年は時間が足りなかった。出張が重なって、どうしても腰を据えて説教に取り組めなかった。ある時は新幹線の中で、ある時は船の中で、ある時は宿泊先で、四苦八苦して考えた。考えてばかりでは頭だけのようだが、福音朗読から何か聞こえてこないかと、何度もテキストを読み、耳をすませた。

▼パンフレットは、当然一人の手では作れない。いつもだれか協力を仰いでいるのだが、今年はだれに頼もうかと考えあぐねていたが、いいメンバーを思い出した。中学生だ。確か6人はいたと思うので、お願いしてみよう。できれば、このパンフレットを真っ先に中学生に読んでほしいところだが、はたして興味を持ってくれるだろうか。

▼昨日のワインは甘すぎた。調べた範囲で銘柄を紹介すると、フランスワインで、ヴァル・オーリス バニユルス グラン・クリュ Banyuls Grand Cru 1966 年物。1966 年物というのは、つまり自分の生まれ年ワインということである。

▼ちょっと飲むのはおいしいけれども、グイグイ飲むには甘すぎると思う。ミサワインも、かなり甘い、それ以上だったかもしれない。とにかく、一度に空けてしまうほどお酒に強くもないし、あの甘いワインではお酒に強くても飲み干せないのではなかろうか。

▼昨日の「ちょっとひとやすみ」を読み返すと、「キリストの声」を思い巡らすと書いてあったが、ワインを一杯飲んだ時点で、その計画はボトルの中に沈んで消えてしまった。キリストの

声は、これからもずっと追いつけよう。もしチャンスがあれば、十年に一度開かれるキリストの受難劇を観て、そこでも考えてみたいと思う。

主の昇天(マタイ 28:16-20)

疑う弟子たちに近寄って力強い言葉をかける

今日は「主の昇天」の祭日です。土曜日に、太田尾小教区の信徒の方 24 人が浜串教会を訪問してくれました。太田尾小教区は、この前亡くなった松永正勝神父さまがおられた教会で、わたし自身も初めて主任司祭に任命された小教区です。

24 人の巡礼団の方々は、松永神父さまのおられた土井ノ浦教会などを訪ねて、その足跡をたどり、祈るためにやって来たのだと思います。その中で、かつて赴任していたわたしのところにも、表敬訪問してくれたのだらうと想像しています。

太田尾小教区巡礼団の訪問を受けて、わたしは別のことを思い出しました。そう言えば、太田尾小教区ではご昇天の祭日に決まって山登りをして、山の上でミサをして、遠足を楽しんでいたなあということです。今年、その楽しい思い出を巡礼団が来てくれたことで思い出しました。

では福音朗読に入りましょう。弟子たちはガリラヤで指示されていた山に登り、イエスに会い、ひれ伏しました。ところがそこに、マタイはもう 1 つのことを書き加えました。「しかし、疑う者もいた。」(28・17) というのです。

この「疑う者もいた」という書き込みは、非常に気になります。というのは、弟子たちにとって、またこの福音書を読み、聞く人々にとって、もっと言うと校正のすべての人々にとって、都合の悪い出来事だからです。復活したイエスと出会っているのに、みながみな心からイエスを信じ切れていないというのですから、場合によってはその事実を伏せておけばよかったはずです。

マタイはなぜ、この「疑う者もいた」ということを書き残したのでしょうか。この天から今週は出発したいと思います。ここで、「疑う」と日本語に訳された言葉は、もとの意味をたどると「2つの方向に歩む。人の中に2つの思いがあり、分裂した状態」を表すのだそうです。

同じ「疑う」場面は、湖で嵐に遭遇した時も体験しました。弟子たちが舟を漕ぎ悩んでいるときにイエスが湖の上を歩いてこられ、ペトロに「来なさい」と言います。ペトロは湖の上を歩き始めますが、波に気付いて恐ろしくなり、助けを求めました。イエスの「来なさい」という言葉を信じたいのだけれども、現実には振り回されて心が2つに分かれている。この状態を「疑う」と表現しています。

心が2つに分かれ、信じたいけれども信じきれない。こういう状態が「疑う」という意味でしたら、それは、信仰に至るきっかけとなり得ます。信じたいけれども心を邪魔するものがあって、神にまっすぐに心に向けることができない。これは誰にでも起こりうることで、何か力をいただければ、迷いを断ち切って一心に神に助けを願う人に生まれ変わることができるわけです。

実は今日の出来事に、そのヒントがあります。「疑う者もいた」その弟子たちに、イエスは何をなさったのでしょうか。イエスは近寄って来て、言葉をかけました。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にきなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わ

たしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」(28・18-20)

わたしはこの場面で、プロ野球の試合を重ねて考えました。ピッチャーが打者に連続して打ち込まれたり、フォアボールを立て続けに出したりするとき、よく監督が飛んで行って、何か一言二言声をかけると、そのピッチャーが立ち直ってピンチを切り抜けるということがあります。

これはまさしく、近寄って来て言葉をかける場面です。監督が何を言うのかわかりませんが、技術云々ではなく、きっと「お前に任せたんだから、お前を信じているぞ」そういった力強い一言ではないでしょうか。

イエスも、近寄って来て声をかけ、なかなか信じ切れない弟子たちを力づけるのです。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている」「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」ともすれば学んだ知識や経験に頼りがちな弟子たちを、イエスに全面的に信頼するように、御言葉が導いていくのです。

しかしながら、弟子たちも人間です。イエスの言葉を聞いて右にも左にもそれない人物にすぐに生まれ変わったのかと言うと、そうではないと思います。

それはご昇天をお祝いしているわたしたちも同じことです。イエスの言葉は力強いのですが、わたしたちはそれを聞いてもなお、十分信じきれないという過ちを犯したり御言葉への信頼を忘れたりするわけです。

心が2つに割れることなく、真にイエスを信じて歩めるようになるためには、わたしたちは失敗も犯し、もう神に頼る以外に道はないというところまで追い込まれる必要があるのかもしれませんが。プロ野球のたとえを話しましたが、追いつめられてからの監督の一言は、何にもまして効果がある、これに似ています。

では最後に、弟子たちはご昇天の時に最後にガリラヤの指示された山でイエスにお会いして御言葉に力を得たのですが、現代のわたしたちはどこに行けば同じような体験を積むことができるのでしょうか。

わたしは、現代におけるイエスが指示された場所は「教会」だと思います。復活して昇天なさるイエスが、近づいて声をかける場所は、教会ではないでしょうか。弟子たちはガリラヤの指示された山ですべての民を弟子にするように、また洗礼を受け、掟を守るように教えることを命じられました。

イエスはわたしたちにも、教会で必要な命令を授けてくださいます。それは、「神を愛し、隣人を自分のように愛する」という新しい掟を自分自身が生きて、またそれを守るように人々に教えることです。この新しい掟を守るならば、その生き方を見た人が信仰に入り、洗礼を受け、弟子となるでしょう。わたしたちも弟子たちと同じように、イエスの言葉に力づけられた宣教者となるのです。

もちろん、すぐにわたしたちが完成されるわけではありません。失敗もするし、挫折することもあります。それでも、繰り返し現代の指示された山である教会に来ることで、「わたしは天と地の一切の権能を授かっている」「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」という御言葉に力づけられ、実を結ぶことができるのです。繰り返し、現代の指示された場所である教会に足を運び、宣教するための土台を固めていただくことにいたしましょう。

(参考) 実際の声を確かめながら読みたい方はこちらをクリック

↓↓説教者の意図が、より自然に伝わります。↓↓

<http://hanashi-no-mori.news-site.net/voice/110605.mp3>

(テスト運用中) ケータイで録音説教を聞きたい方はこちら

↓↓通信料がかかります。ご理解の上、ご利用ください。↓↓

<http://hanashi-no-mori.news-site.net/voice/110605.3gp>

………†………

ちょっとひとやすみ

………†………

▼試行錯誤の挙句に、ケータイで日曜日の説教をダウンロードして聞くことができるようになった。たぶん、スマートフォンでも聞くことができるのではないかと思いますので、ケータイでメルマガを受信している人はお試しあれ。そして、「聞くことができた」「聞けなかった」など、声を着かえてもらえればありがたい。

▼ただし、ダウンロードには通信料金がかかるので、定額制の料金を選んでおくことをお勧めする。詳しくは知らないが、「パケホーダイ」「パケホーダイダブル」など、通信料金を気にせずに利用できるコースに入っていないと、とんでもない請求が回って来るかも知れない。そこまでは責任持てないので、御注意を。

▼太田尾小教区のみんなが浜串を訪ねて来てくれた。当日は真夏のような日差しの日で、お年寄りにはちょっときつかったのではないだろうか。それでも久しぶりの人々に囲まれて、「にわか太田尾主任司祭」を味わわせてもらった。にぎやかな人々がやって来てくれていると、原稿を書いた時点では想像している。

▼中には、前もって出席がかなわないと聞いている人々もいる。この7～8年で、病気になったり徐々に体力を奪われたりして、ここまで来るにはちょっと心配ということになったのだろう。楽しいひと時を過ごすことができた、巡礼団の人からぜひ報告してほしい。とくにわたしの霊名のお祝いのときによく時代劇の踊りを披露してくれたおじいさんに。

▼この日曜日、上五島ではトライアスロン大会が開催され、島じゅうが熱気にあふれる。トライアスロン競技には全く縁のない体型をしているが、厳しい練習を積んだ成果をぜひ発揮してほしい。日曜日のミサの聖書朗読をできずに応援に回った中学生も、代わりに精いっぱい応援してくれ。

………†………

新企画今週の1枚

………†………

第144回目。太田尾小教区の皆さん。なつかしさに笑顔もこぼれます(予定)。

<http://hanashi-no-mori.news-site.net/110605.jpg>